

文京遺跡

－ 53 次・54 次調査 －

2016

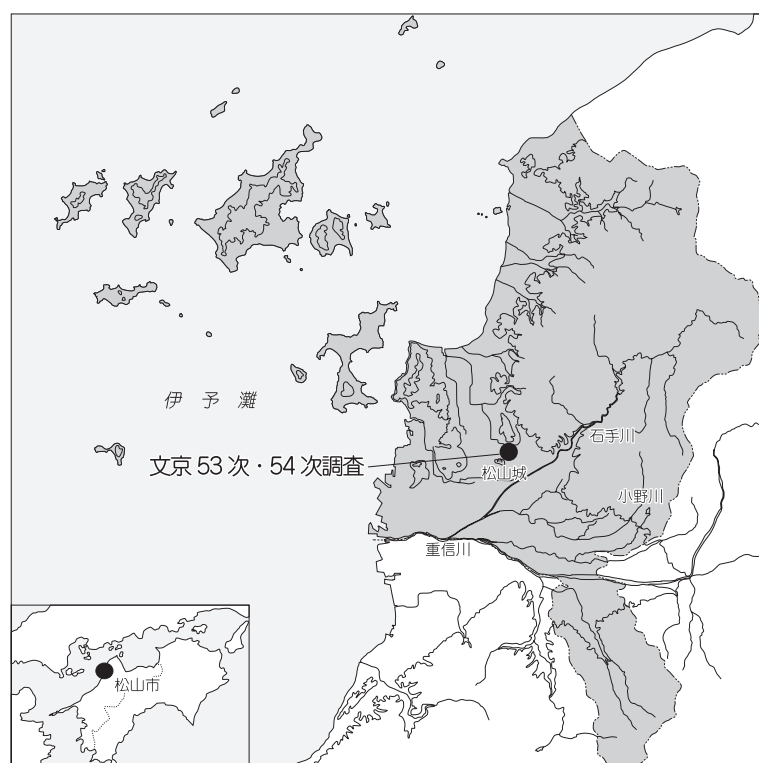
松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

ぶんきょういせき
文京遺跡

－ 53次・54次調査 －



2016

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序 言

本書は、平成 25 年度に松山市立東雲小学校構内で発掘調査を実施した文京遺跡 53 次・54 次調査の報告書です。

この遺跡は、弥生時代の大規模集落跡である文京遺跡の東端に位置します。今回、縄文時代から中世にかけての集落や農耕に関連する遺構や遺物などが発見され、文京遺跡の東端付近の様相を知る貴重な成果を得ることができました。

このような成果を得られましたのも、地権者並びに関係各位の方々のご理解とご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。今後は、本書が埋蔵文化財研究の一助となり、さらには埋蔵文化財行政や教育普及活動に寄与できますれば幸いに存じます。

平成 28 年 3 月

松山市教育長 山本 昭弘

例 言

1. 本書は、平成 25 年度に松山市教育委員会と公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが、松山市文京町の松山市立東雲小学校構内で実施した 2 件の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 整理作業及び報告書作成作業は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが行った。
3. 本書掲載の遺構は、呼称名を略号化して記載した。
溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP、自然流路：SR、性格不明遺構：SX
4. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした座標北である。
5. 本書で使用した土層や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1998）に準拠した。
6. 遺物の実測・製図は、調査担当者の指示のもと木下奈緒美、仙波千秋、丹生谷道代、本多智絵、松下郁子が行った。
7. 本書掲載の遺構図、遺物図は、縮分値をスケール下に記した。
8. 本書の執筆は、第 3 章を宮内慎一が担当し、その他は河野史知が担当した。なお、本書の編集は河野が担当し、浄書は本多が担当した。
9. 発掘調査の遺構写真は調査担当者で大西朋子が担当し、写真図版の作成は大西が担当した。
10. 本書に掲載した遺物や図面、写真等の記録類は、松山市立埋蔵文化財センターにて保管されている。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

目 次

第1章	はじめに	(河野)	1
	第1節	調査に至る経緯	
	第2節	調査・刊行組織	
	第3節	立地と歴史的環境	
第2章	調査の概要	(河野)	7
	第1節	調査の経緯	
	第2節	層位	
	第3節	遺構と遺物	
第3章	文京遺跡53次調査	(宮内)	11
	第1節	調査の経過	
	第2節	層位	
	第3節	遺構と遺物	
	第4節	まとめ	
第4章	文京遺跡54次調査	(河野)	33
	第1節	調査の経過	
	第2節	層位	
	第3節	遺構と遺物	
	第4節	まとめ	
第5章	調査の成果と課題	(河野)	52

挿 図 目 次

第 1 章	はじめに	
第 1 図	松山平野の地形概要図	3
第 2 章	調査の概要	
第 2 図	周辺の遺跡分布図	5
第 3 図	文京遺跡位置図	6
第 4 図	調査区区割り図	7
第 5 図	区割り図・土層模式図	9
第 3 章	文京遺跡 53 次調査	
第 6 図	調査区位置図	12
第 7 図	1 区北壁土層図	14
第 8 図	2 区東壁・3 区南壁土層図	15
第 9 図	1 区トレンチ土層図	16
第 10 図	3 区トレンチ土層図	16
第 11 図	1 区遺構配置図	17
第 12 図	2 区遺構配置図	18
第 13 図	3 区遺構配置図	18
第 14 図	SD101 南壁断面図	19
第 15 図	SD101 出土遺物実測図	20
第 16 図	SD102・SD103・SD104 断面図	21
第 17 図	1 区第Ⅷ層黄色シルト（第 1 面）遺物出土状況図	23
第 18 図	1 区第Ⅷ層黄色シルト（第 2 面）遺物出土状況図	23
第 19 図	1 区第Ⅷ層出土遺物実測図	24
第 20 図	SP234 出土遺物実測図	25
第 21 図	SR301 南壁土層図	25
第 22 図	3 区第Ⅷ層黄色シルト遺物出土状況図	26
第 4 章	文京遺跡 54 次調査	
第 23 図	調査区位置図	34
第 24 図	1・2 区南壁土層図	35
第 25 図	3・4 区南壁土層図	36
第 26 図	1～4 区トレンチ土層図	37
第 27 図	1 区遺構配置図	38
第 28 図	2 区遺構配置図	38
第 29 図	3 区遺構配置図	39
第 30 図	4 区遺構配置図	39
第 31 図	SD101 測量図・出土遺物実測図	41

第 32 図	1 区第Ⅷ層黄色シルト遺物出土状況図・出土遺物実測図	42
第 33 図	2 区第Ⅶ層出土遺物実測図	43
第 34 図	2 区第Ⅷ層黄色シルト遺物出土状況図・出土遺物実測図	43
第 35 図	SK301 測量図	44
第 36 図	第Ⅶ層出土遺物実測図	45
第 37 図	3 区第Ⅷ層黄色シルト遺物出土状況図	45
第 38 図	3 区第Ⅷ層中の礫測量図	46
第 39 図	SR401 測量図・出土遺物実測図	47
第 40 図	SR402 測量図・出土遺物実測図	48

表 目 次

第 1 章	はじめに	
表 1	調査地一覧	1
第 2 章	調査の概要	
表 2	検出遺構一覧	10
第 3 章	文京遺跡 53 次調査	
表 3	溝一覧	28
表 4	自然流路一覧	28
表 5	柱穴一覧	28
表 6	SD101 出土遺物観察表（土製品）	31
表 7	SD101 出土遺物観察表（石製品）	31
表 8	第Ⅷ層出土遺物観察表（土製品）	32
表 9	第Ⅷ層出土遺物観察表（石製品）	32
表 10	柱穴出土遺物観察表（土製品）	32
第 4 章	文京遺跡 54 次調査	
表 11	溝一覧	50
表 12	土坑一覧	50
表 13	自然流路一覧	50
表 14	柱穴一覧	50
表 15	1 区 SD101 出土遺物観察表（土製品）	51
表 16	1 区第Ⅷ層黄色シルト出土遺物観察表（石製品）	51
表 17	2 区第Ⅷ層出土遺物観察表（土製品）	51
表 18	2 区第Ⅷ層黄色シルト出土遺物観察表（土製品）	51
表 19	第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品）	51
表 20	SR401 出土遺物観察表（土製品）	51
表 21	SR402 出土遺物観察表（土製品）	51

写真図版目次

第3章 文京遺跡 53次調査		2.1区 SD101 堆積埋土 (南より)	
図版 1	1. 調査地全景 (西より)	3.1区 柱穴完掘状況 (北より)	
	2.1区 遺構検出状況 (南東より)	図版 13	1.2区 東壁土層 (西より)
	3.1区 完掘状況 (東より)	2.2区 第Ⅷ層上面遺構検出状況 (東より)	
図版 2	1.1区 SD101 完掘状況 (北より)	3.2区 SP202 半掘状況 (南より)	
	2.1区 SD102 完掘状況 (南より)	4.2区 SP204 半掘状況 (北より)	
	3.1区 SD103 完掘状況 (東より)	5.2区 第Ⅷ層上面遺構完掘状況	
図版 3	1.1区 SD104 完掘状況 (東より)	(北西より)	
	2.1区 SP136 検出状況 (南より)	図版 14	1.2区 第Ⅷ層中縄文土器片出土状況
	3.1区 第Ⅶ層検出状況 (南より)	(北より)	
図版 4	1.1区 第Ⅶ層小溝①検出状況 (北東より)	2.2区 第Ⅷ層焼土・炭化材出土状況	
	2.1区 第Ⅶ層遺物出土状況① (北東より)	(北より)	
	3.1区 第Ⅶ層遺物出土状況② (南より)	3.2区 第Ⅷ層中で隆起した礫層 (北より)	
図版 5	1.1区 第Ⅶ層遺物出土状況③ (東より)	図版 15	1.3区 西壁土層 (東より)
	2.1区 トレンチ土層① (南東より)	2.3区 第Ⅳ層上面遺構検出状況 (西より)	
	3.1区 トレンチ土層② (北より)	3.3区 第Ⅳ層上面遺構完掘状況 (北より)	
図版 6	1.2区 遺構検出状況 (南西より)	図版 16	1.3区 SK301 焼土 (上位) 検出状況
	2.2区 完掘状況 (西より)	(北より)	
	3.2区 東壁土層 (西より)	2.3区 SK301 焼土 (下位) 堆積状況	
図版 7	1.3区 遺構検出状況 (北西より)	(東より)	
	2.3区 完掘状況 (北より)	3.3区 SK301 堆積土層 (東より)	
	3.3区 SR301 検出状況 (南より)	図版 17	1.3区 SK301 完掘状況 (東より)
図版 8	1.3区 第Ⅶ層遺物出土状況 (南東より)	2.2区 第Ⅷ層中で出土した礫と土器片	
	2.3区 トレンチ土層 (北東より)	(北より)	
	3. 作業風景 (南西より)	3.2区 第Ⅷ層中で隆起した礫層 (東より)	
図版 9	1.1区 SD101 出土遺物	図版 18	1.4区 調査前全景 (東より)
図版 10	1. 出土遺物	2.4区 西壁土層 (南東より)	
	(1区 第Ⅷ層：10～17、SP234：18)	3.4区 遺構検出状況 (東より)	
第4章 文京遺跡 54次調査		図版 19	1.4区 SR401 完掘状況 (北より)
図版 11	1.1～3区 調査前全景 (西より)	2.4区 SR401 完掘状況 (東より)	
	2.1～3区 配置状況 (西より)	3.4区 SR402 部分掘り下げ状況 (東より)	
	3.1区 東壁土層 (西より)	図版 20	1. 出土遺物
	4.1区 第Ⅵ層上面遺構検出状況 (北より)	(1区 SD101：1～3・5、2区：6～11、	
	5.1区 第Ⅵ層上面遺構完掘状況 (北より)	3区：12・13、4区 SR401：14、4区 SR	
図版 12	1.1区 SD101 完掘状況 (北より)	402：15)	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回報告する文京遺跡 53 次調査は、小学校校舎改築工事に伴い、同 54 次調査は病院の改築に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。

2012（平成 24）年 6 月 18 日、松山市教育委員会事務局学習施設課（以下、申請者という。）より、松山市文京町 2 番 1 の一部における東雲小学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財確認願と 2013（平成 25）年 5 月 31 日、松山赤十字病院 院長 瀧上忠彦氏（以下、申請者という。）より松山市文京町 2 番 1 の一部における病院改築にあたり、埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。確認願が提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『No.67 文京遺跡（樋又遺跡・元練兵場遺跡包含地）』内にあたる。申請地が所在する松山市文京町は、松山平野内でも有数の遺跡地帯である道後城北遺跡群内にあり、文京遺跡（愛媛大学構内）や松山大学構内遺跡をはじめ数多くの遺跡が発見されている。なかでも、文京遺跡は昭和 50 年度に 1 次調査（工学部構内）が行われ、これまでに 52 次の調査が継続的に実施され、縄文時代から近世に及ぶ集落跡や生産跡が確認されている。縄文時代では、文京遺跡 24 次調査（理学部構内）にて前期末の土器が出土したほか、11 次調査（法文学部）や 27 次調査（工学部）などでは縄文時代後期の土器や焼土、炭化物が確認されている。弥生時代になると、4 次調査（東中学校構内）にて前期の竪穴住居址が検出され、その後、中期から後期には竪穴住居をはじめとする集落遺跡が数多く発見されている。古墳時代を通して継続的な集落経営がみられるが、古代から中世の段階では水田跡や畑跡などの生産遺跡が発見されている。

これらのことから、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）は、申請地内における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、2012（平成 24）年 8 月 1 日～8 月 15 日の間に試掘調査を実施することになった。調査の結果、溝や土坑・柱穴を検出し、縄文土器や弥生土器が出土した。

この結果を受け、文化財課と申請者の両者は協議を重ね、小学校校舎改築工事に伴う発掘調査を文京遺跡 53 次調査、病院改築に伴う発掘調査を同 54 次調査として遺跡が破壊される範囲に対して記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、縄文時代や弥生時代の集落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、53 次調査は 2013（平成 25）年 7 月 8 日から同年 8 月 30 日の間、54 次調査は 2013（平成 25）年 10 月 1 日から 12 月 13 日の間、本格調査を実施した。

表 1 調査地一覧

遺跡名	所在地（松山市）	面積（㎡）	調査期間
文京遺跡 53 次調査	文京町 2 番 1、2 番 2 の各一部	819	平成 25 年 7 月 8 日～同年 8 月 30 日
文京遺跡 54 次調査	文京町 2 番 1 の一部	1,079	平成 25 年 10 月 1 日～同年 12 月 13 日

第2節 調査・刊行組織

(1) 調査組織〔平成25年度〕

松山市教育委員会

教育長 山本 昭弘
事務局 局長 榊田 二郎
企画官 梶川 明彦
企画官 津田 慎吾
文化財課 課長 若江 俊二
主幹 篠原 昭二

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長 一色 哲昭 (～6/4)
理事長 中山紘治郎 (6/5～)
事務局 局長 中西 真也
次長兼総務部長 中野 忠
施設利用推進部 部長 玉井 弘幸
埋蔵文化財センター 所長 田城 武志
調査研究 主査 山之内志郎
調査研究 主査 橋本 雄一
主任 宮内 慎一(調査担当)
主任 河野 史知(調査担当)
大西 朋子(写真担当)

(2) 刊行組織〔平成27年度〕

松山市教育委員会

教育長 山本 昭弘
事務局 局長 前田 昌一
次長 隅田 完二
次長 家串 正治
文化財課 課長 若江 俊二
主幹 篠原 昭二

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

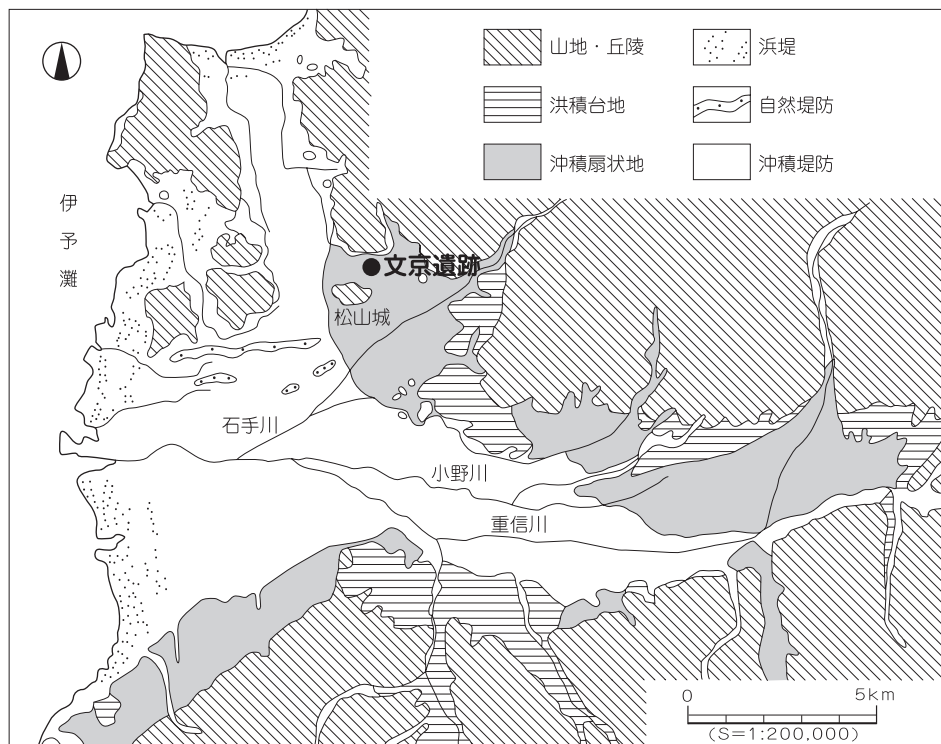
理事長 中山紘治郎
事務局 局長 中西 真也
次長兼総務部長 紺田 正彦
施設利用推進部 部長 渡部 広明
埋蔵文化財センター
所長兼考古館館長 田城 武志
調査・研究 主査 山之内志郎
普及・啓発 主査 梅木 謙一
普及・啓発 主査 橋本 雄一
主任 宮内 慎一(執筆担当)
主任 河野 史知(編集担当)
大西 朋子(写真担当)

第3節 立地と歴史的環境

1. 立地

文京遺跡の所在する松山平野は、伊予灘と斎灘に挟まれた高縄半島の南西部に位置し、高縄半島を南北に延びる高縄山系西麓を水源とする大小の河川が存在する。

これらの河川のうち、旧石手川によって形成された勝山（城山）と御幸寺山に挟まれた南北約1km、東は道後温泉周辺から西の勝山北部までの約2kmの沖積扇状地上に道後城北遺跡群が立地する。道後城北遺跡群は東から西へ緩傾斜する地形で標高20～50mであり、既存の調査において北半部は旧流路である谷状の窪地が網目状に展開しており、窪地間の微高地上に集落が営まれている。文京遺跡はこの道後城北遺跡群のほぼ中央部の最も広い微高地上に展開している。



第1図 松山平野の地形概要図

2. 歴史的環境

ここでは道後城北遺跡群とその周辺の主要な遺跡について時代別に概要を説明する。

旧石器時代

松山平野において明確な遺構は確認されていないが、丸山川左岸の標高 120 m の丘陵部の丸山遺跡では細石核や細石刃などが表面採集されている。

縄文時代

文京遺跡 24 次調査において前期末の土器が包含層内から出土している。後期には同 11 次調査にて屋外炉 3 基が検出されているほか、24 次・27 次・30 次調査などでは該期の土器や焼土・炭化物が確認されている。晩期には理学部構内で多数の土器が出土している。土居窪遺跡では後期から晩期にかけての土器片が出土している。持田三丁目遺跡で中期の土坑が検出されている。南海放送遺跡、道後今市遺跡 10 次調査などで晩期後葉の突帯文期の遺物が出土している。

弥生時代

前期には文京遺跡 4 次調査にて竪穴建物が検出されており、持田三丁目遺跡からは土壙墓群や土器棺墓群で構成される墓域が確認されている。また、岩崎遺跡では前期末から中期初頭にかけての環濠と考えられる大型の溝や貯蔵穴群が確認され、集落様相が明らかになりつつある。中期には丘陵上に遺跡が広がっており、祝谷六丁場遺跡からは土坑に埋納された平形銅剣が、祝谷畑中遺跡では大規模な環濠や弥生土偶が出土した。中期中頃には祝谷大地ケ田遺跡 3 次調査では密集した状態で貯蔵穴群が確認され、中期後半から後期にかけては文京遺跡に大規模な集落が展開されるようになり、その集落範囲は東西 300 m、南北 200 m となり、居住区や高床倉庫群に加え、居住区東側には集落中枢部となる超大型の掘立柱建物や竪穴建物、方形壇が配置されている。後期後半以降から終末にかけては松山北高等学校遺跡、若草町遺跡からは重圈日光鏡が出土している。

古墳時代

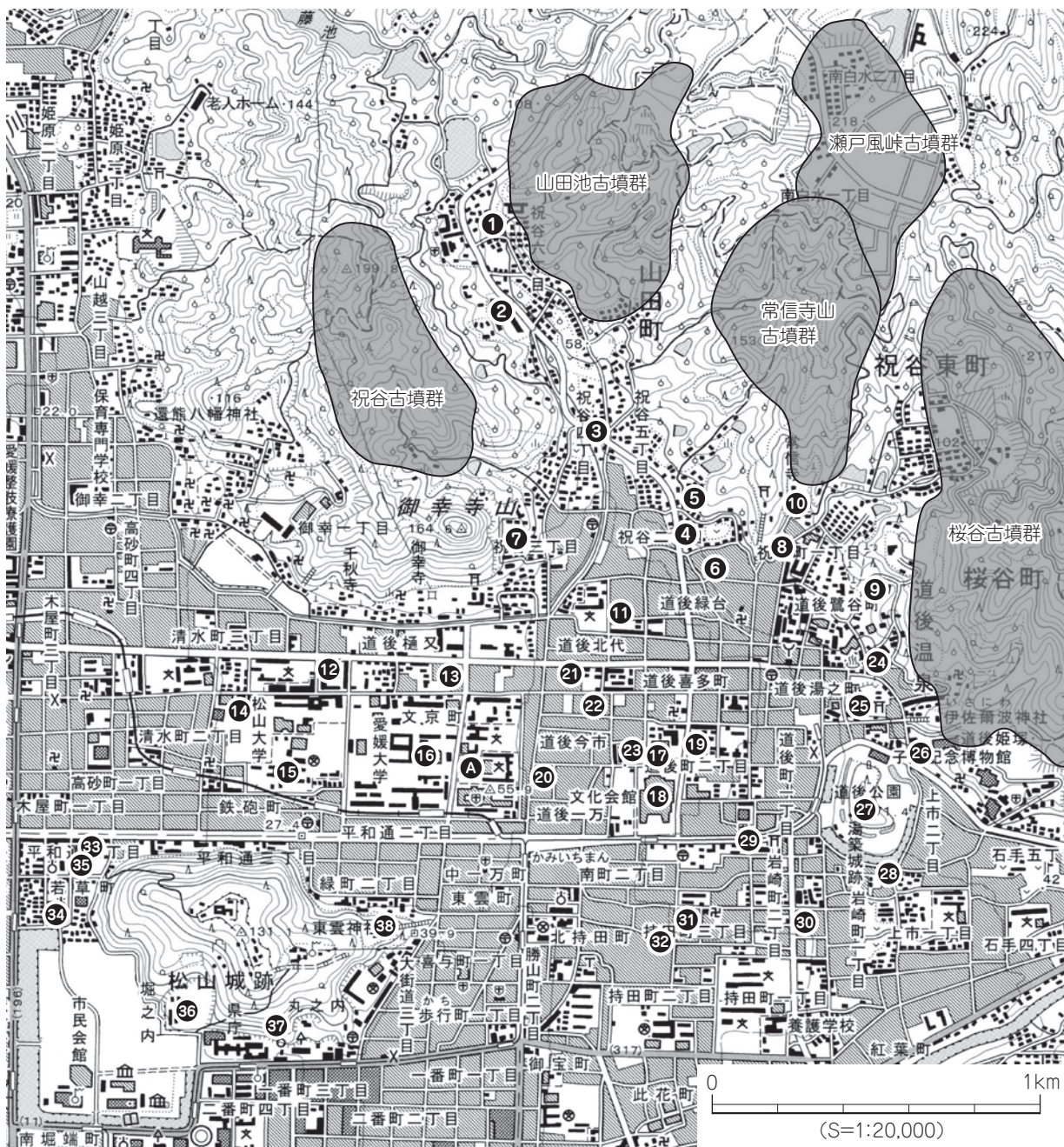
松山北高等学校遺跡 2 次調査では前期の竪穴建物が検出され、松山大学構内遺跡 2 次調査や持田町三丁目遺跡では多数の竪穴建物が検出されている。中期から後期にかけては松山大学構内遺跡にて竪穴建物や溝、土坑など多数の遺構や遺物が確認されている。また、文京遺跡 14 次調査ではカマドを付設する竪穴建物が発見されている。丘陵部では中期から後期の古墳が広く分布しており祝谷古墳群や御幸寺山古墳群、常信寺古墳群などがある。祝谷 6～8 号墳は横穴式石室構造で、6 号墳や 7 号墳からは象嵌のある刀の飾り金具が出土し、7 号墳からは複数の小像を配した装飾付須恵器が出土している。

古 代

白鳳期には湯之町廃寺跡や内代廃寺跡が確認されており、石手寺は神亀 5 (728) 年に聖武天皇の勅願で創建されたと伝えられている。道後温泉の東隣の道後湯月町遺跡にて池跡を検出し、飛鳥時代から平安時代の土器や瓦が多数出土している。岩崎遺跡では奈良時代後半の区画溝や平安時代の掘立柱建物が検出されている。

中 世

鎌倉時代から戦国時代の伊予国の守護、河野氏の居城である湯築城は、中央部の丘陵部を中心として二重の濠と土塁で囲まれた平山城である。文京遺跡 18 次・25 次調査では自然流路埋没後に 11 世紀から 13 世紀にかけての水田を 3 面確認した。



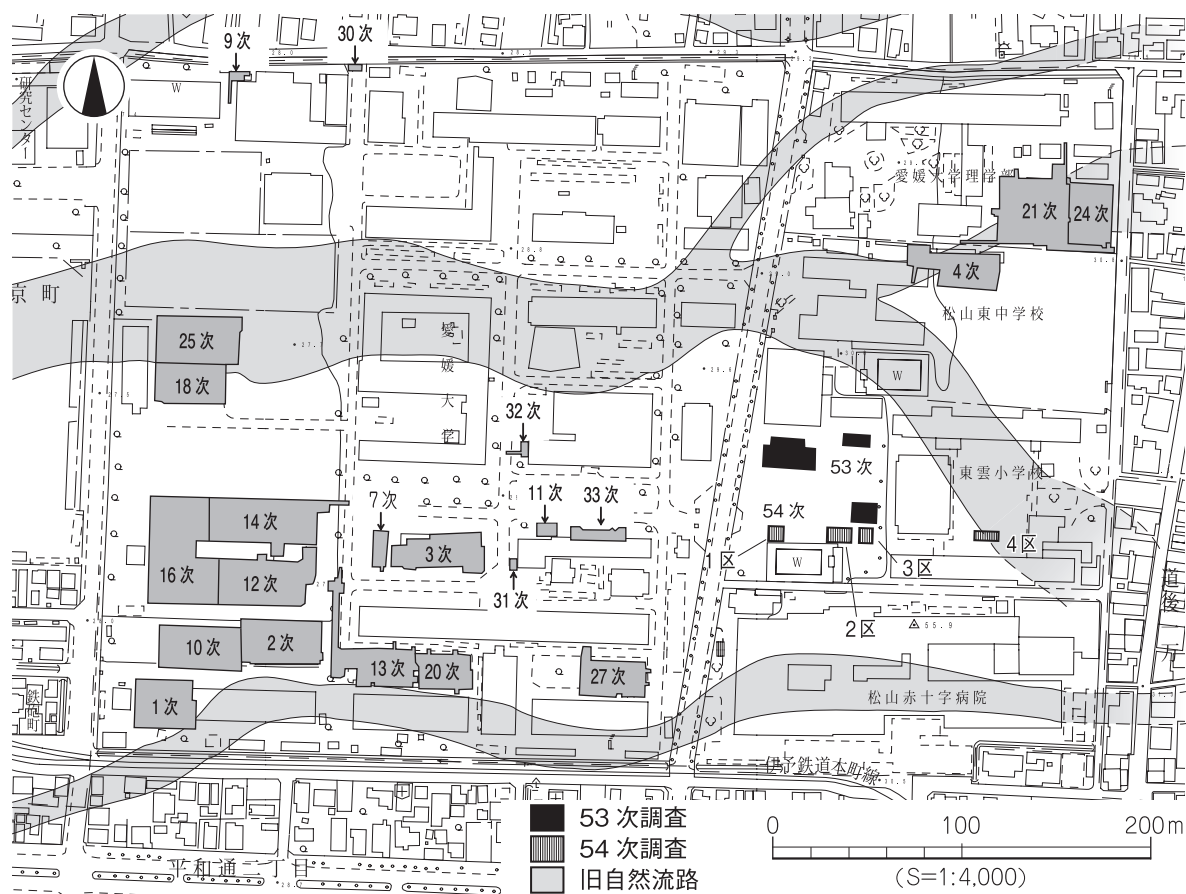
▲ 文京遺跡 53 次・54 次調査

- | | | | |
|----------------|----------------|-----------------|---------------|
| ① 祝谷アイリ遺跡 | ⑪ 土居窪遺跡 | ⑳ 道後今市遺跡 7 次調査 | ㉔ 岩崎遺跡 |
| ② 祝谷六丁場遺跡 | ⑫ 道後城北 RNB 遺跡 | ㉑ 道後今市遺跡 9 次調査 | ㉕ 持田町三丁目遺跡 |
| ③ 祝谷大地ヶ田遺跡 | ⑬ 道後樋又遺跡 2 次調査 | ㉒ 道後今市遺跡 10 次調査 | ㉖ 持田町遺跡 |
| ④ 祝谷畑中遺跡 1 次調査 | ⑭ 松山大学構内遺跡 | ㉓ 道後今市遺跡 11 次調査 | ㉗ 若草町遺跡 1 次調査 |
| ⑤ 祝谷畑中遺跡 2 次調査 | ⑮ 1 ~ 3 次調査 | ㉔ 道後湯月町遺跡 | ㉘ 若草町遺跡 2 次調査 |
| ⑥ 道後緑台遺跡 | ⑯ 松山北高等学校遺跡 | ㉕ 道後冠山遺跡 | ㉙ 若草町遺跡 3 次調査 |
| ⑦ 御幸寺山東麓遺跡 | ⑰ 文京遺跡群 | ㉖ 道後姫塚遺跡 | ㉚ 松山城二ノ丸遺跡 |
| ⑧ 湯之町廃寺 | ⑱ 道後今市遺跡 1 次調査 | ㉗ 湯築城跡 | ㉛ 城ノ内古墳 |
| ⑨ 道後鶯谷遺跡 | ⑲ 道後今市遺跡 3 次調査 | ㉘ 内代廃寺 | ㉜ 東雲神社遺跡 |
| ⑩ 土居ノ段遺跡 | ⑳ 道後今市遺跡 5 次調査 | ㉙ 道後町遺跡 | |

第 2 図 周辺の遺跡分布図

近世

松山城は、勝山の山頂に連立式天守を伴う本丸、南西の山麓に二之丸、土塁で囲まれた三之丸が設けられており、二之丸跡では御殿の構造や三之丸跡からは御殿の範囲や郭内施設の区画や構造が明らかになりつつある。また、勝山の南山麓の番町遺跡では武家屋敷を確認している。



第3図 文京遺跡位置図

【参考文献】

- 吉本 拓 1986 「湯ノ町廃寺」「内代廃寺」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XX
 宮本一夫 1990 「文京遺跡 8・9・11 次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 II
 宮本一夫 1991 「文京遺跡 10 次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 III
 相原浩二 1991 「若草町遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報 III
 宮崎泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」松山市文化財調査報告書第 24 集
 梅木謙一 1991 「松山大学構内遺跡」松山市文化財調査報告書第 20 集
 梅木謙一 1992 「道後城北遺跡群」松山市文化財調査報告書第 30 集
 梅木謙一 1994 「道後城北遺跡群 II」松山市文化財調査報告書第 37 集
 真鍋昭文 1995 「愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書 2」埋蔵文化財発掘調査報告書第 55 集
 真鍋昭文 1995 「持田三丁目遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第 58 集
 宮内慎一 1995 「松山大学構内遺跡 II」松山市文化財調査報告書第 49 集
 中野良一 1998 「湯築城跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第 66 集
 梅木謙一 1998 「松山大学構内遺跡 III」松山市文化財調査報告書第 68 集
 宮内慎一 1999 「岩崎遺跡」松山市文化財調査報告書第 71 集
 真鍋昭文 2002 「祝谷畑中遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第 101 集
 田崎博之 2004 「文京遺跡 III」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 X II
 吉田 広 2005 「文京遺跡 IV」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XIV
 田崎博之 2007 「文京遺跡 V」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XVI
 相原浩二 2007 「松山大学構内遺跡 IV」松山市文化財調査報告書第 115 集
 宮内慎一 2008 「道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡」松山市文化財調査報告書第 123 集
 吉田 広 2009 「文京遺跡 VI」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XX
 宮内慎一 2014 「道後城北遺跡群 III」松山市文化財調査報告書第 169 集

第2章 調査の概要

第1節 調査の経緯

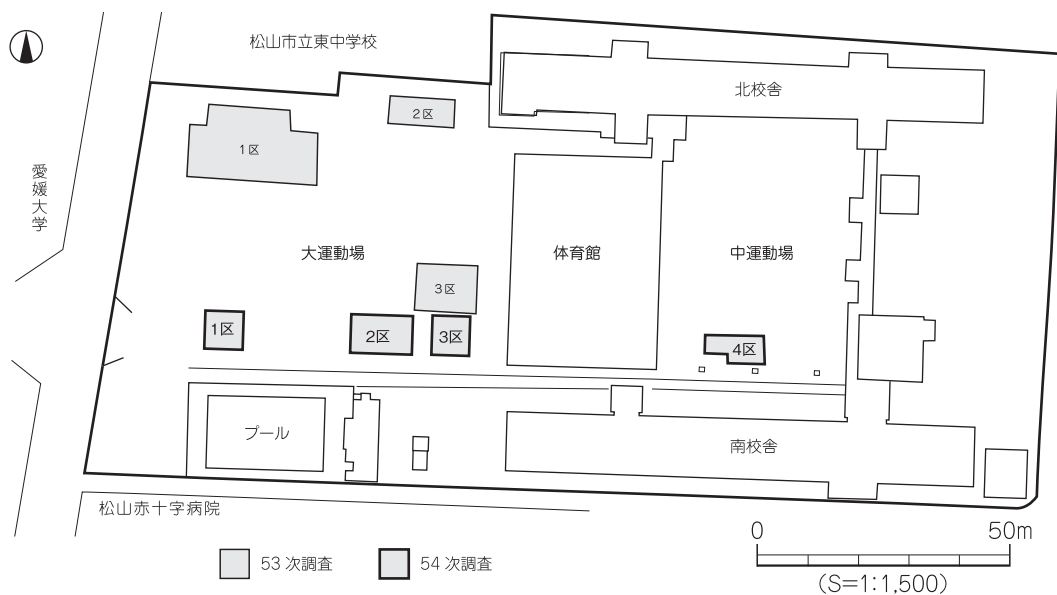
調査地は、松山市立東雲小学校の大運動場から中運動場に位置する。調査に先立って実施した試掘調査結果、遺構を検出した部分について開発工事によって遺跡の消滅する部分の7カ所を対象区域とした。今回の調査は、小学校校舎改築工事に伴う発掘調査を文京遺跡53次調査として平成25年7月～8月の間、病院改築工事に伴う発掘調査を文京遺跡54次調査として平成25年10月～12月の間、発掘調査を実施することとなった。

〔調査〕 文京遺跡53次調査は3地区、文京遺跡54次調査は4地区に調査区を分けて、区割りは西側より順に1区・2区…4区とした。また、国土座標第Ⅳ座標系基準点に基づいた座標を基準点とし5m四方のグリッド割を設定した。グリッドは区毎に北から南へA・B・C、西から東へ1・2・3…25とし、A1～C25区と呼称名を付けた。調査区すべてを調査区間は東西約120、南北約50mの規模で調査時の地表面は運動場の真砂土で覆われており、中運動場から大運動場にかけては56cmの段差をもち大運動場が低く、大運動場は東から西へ16cmの比高差をもつ。

調査は、重機で表土層を除去し、遺構を検出し、遺構の掘り下げ及び測量、写真撮影などの記録作業を実施した。その後、人力にて第Ⅶ層、第Ⅷ層を掘下げて出土した遺物はドット方式で取り上げた。

〔整理〕 整理作業は、平成25年度から発掘調査に並行して、遺構図の合成や遺物の実測を行った。平成26年度からは埋蔵文化財センターにて、本格的な整理作業と本格的な整理作業と報告書作成作業を実施した。

〔説明会〕 平成25年11月30日（土）に遺跡説明会を開催した。説明会は、53次調査で出土した遺物や写真パネル、54次調査では、1区から3区の遺構を対象とし、遺構や遺物の説明を行った。説明会では地域住民や考古学ファンをはじめ、学校関係者など総勢80人に及ぶ参加者を得て、埋蔵文化財に対する意識の高揚がはかられた。



第4図 調査区区割り図

第2節 層位 (第5図)

調査地は小学校の運動場である。調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層近現代の農耕に伴う耕作土、第Ⅲ層灰白色砂質土、第Ⅳ層灰黄色土、第Ⅴ層褐灰色土、第Ⅵ層灰黄褐色土、第Ⅶ層暗褐色シルト、第Ⅷ層黄色シルトである。遺構検出面である第Ⅷ層上面の比高差は、調査地東端の54次調査4区が最も高く標高30.7mを測り、調査地西端の54次調査1区が最も低い標高29.7mを測ることから、東から西へ緩やかに傾斜して約1m下がっている。

第Ⅰ層：表土層で、土質の違いにより5層に分層され、53次調査・54次調査の全地区に層厚34～86cmの堆積を測る。第Ⅰ層①：黄色土(2.5Y8/8)、第Ⅰ層②：明褐灰色土(7.5YR7/2)、第Ⅰ層③：オリーブ灰色土(10Y6/2)、第Ⅰ層④：黄褐色土(7.5YR8/8)、第Ⅰ層⑤：オリーブ黄色土(7.5Y6/3)である。

第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う耕作土で、土色の違いにより、53次調査全地区には、二種類、54次調査4区には3種類に分層され、層厚4～16cmの堆積を測る。第Ⅱ層①：にぶい黄橙色土(10YR7/2)、第Ⅱ層②：淡黄色土(2.5Y8/3)、第Ⅱ層③：黄橙色土(10YR7/8)である。

第Ⅲ層：中世段階の堆積層で、灰白色砂質土(10YR7/1)が、53次調査1区と3区、54次調査2区から3区にかけて堆積し、層厚4～30cmを測る。

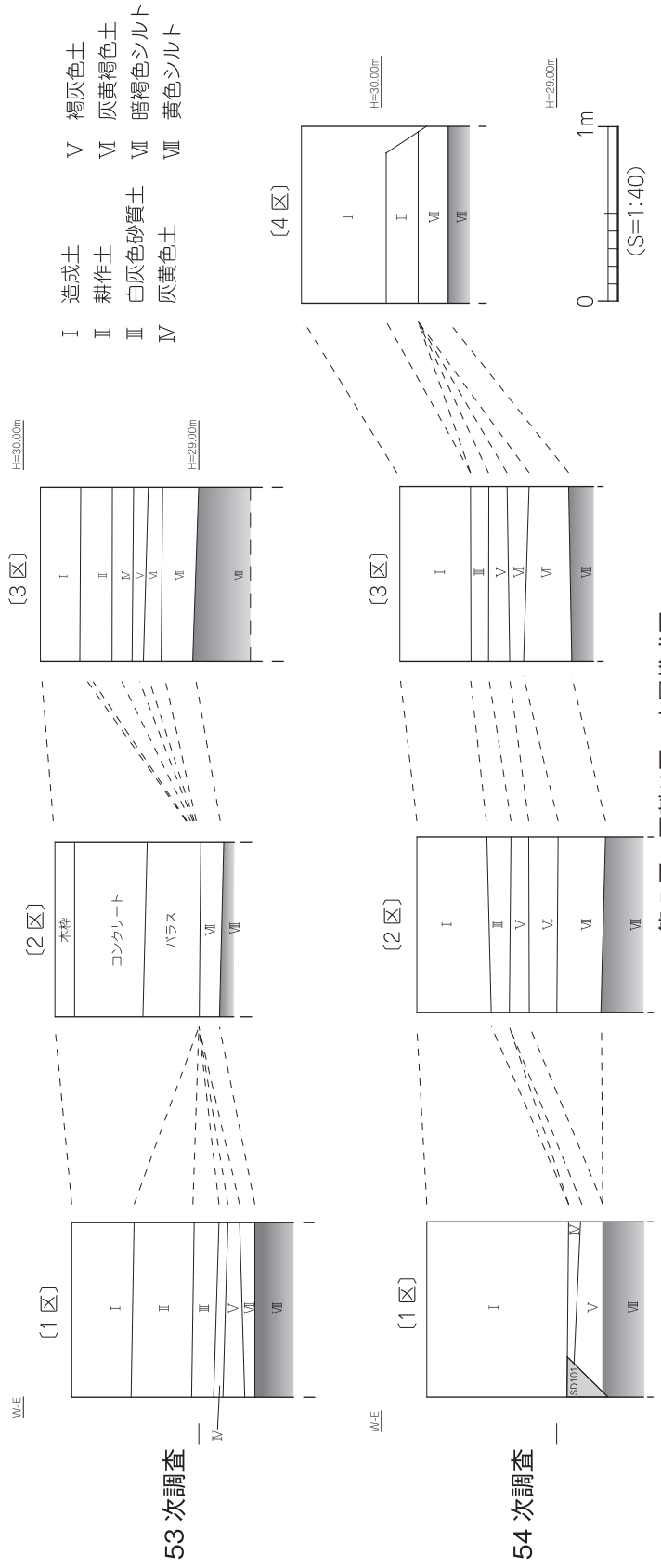
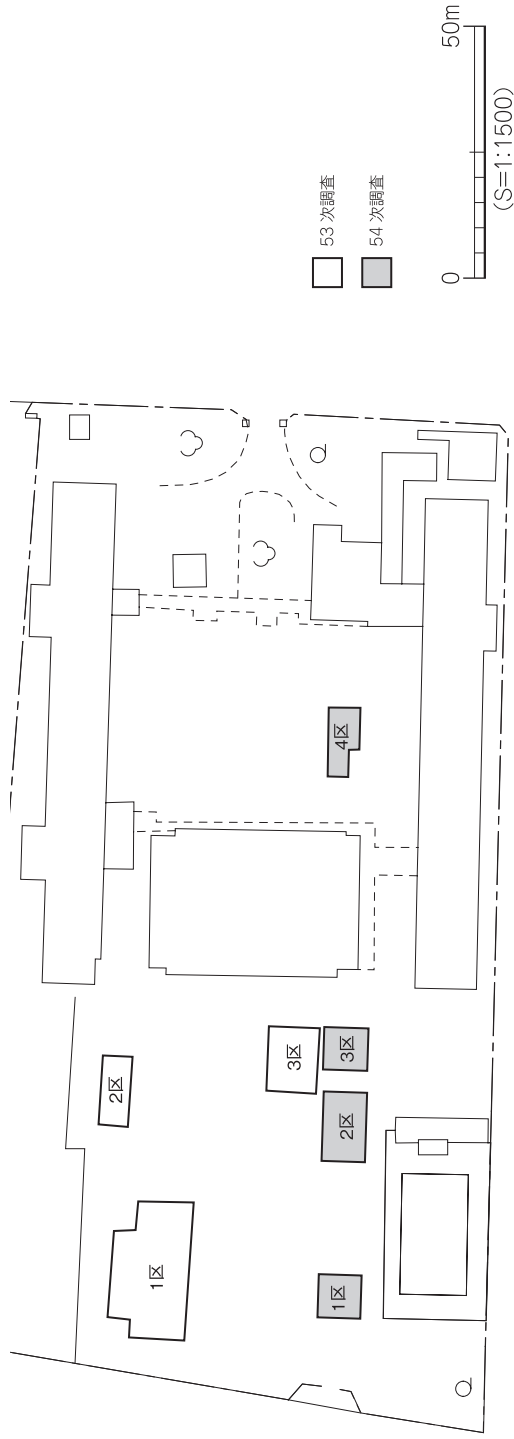
第Ⅳ層：灰黄色土(2.5Y7/2)で、53次調査全地区と54次調査4区に堆積し、層厚5～19cmを測る。

第Ⅴ層：褐灰色土(10YR4/1)で、53次調査全地区と54次調査2～3区に堆積し、層厚5～20cmを測る。53次調査では、本層中から土師器片が少量出土した。53次調査1区のSD103と3区のSR301は本層上面にて検出した。

第Ⅵ層：土色や土質の違いにより二種類に分層される。53次調査全地区と54次調査1～3区に層厚3～21cmの堆積を測る。第Ⅵ層①：灰黄褐色土(10YR5/2)土、第Ⅵ層②：暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)である。54次調査1区のSD101は本層上面にて検出した。また、54次調査では本層中より、土師器片が僅かに出土した。

第Ⅶ層：土質の違いにより3層に分層され53次調査1区と2区、54次調査1区～3区に層厚3～40cmの堆積を測る。第Ⅶ層①：暗褐色シルト(10YR3/3)、第Ⅶ層②：褐灰色シルト(10YR4/1)、第Ⅶ層③：第Ⅶ層②(砂を多く含有)である。54次調査では第Ⅶ層中より弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土した。

第Ⅷ層：本層上面が最終の遺構検出面で、53次調査1区では小溝を検出した。本層上位の第Ⅷ層①：黄色シルト(2.5Y8/6)は53次調査、54次調査の全地区に堆積し、53次調査1区、2区と54次調査1～3区では本層中から縄文土器、石器や炭化物、焼土が出土し、小溝を検出した。各調査区に深掘りトレンチを設定し土層を確認したところ砂質をもつ黄色土(2.5Y8/6)や明黄褐色粘質土(2.5Y6/6)、黄色粘質土(2.5Y8/6)のほか灰色砂～粗砂、浅黄色微砂、灰色砂礫層などが堆積しており、第Ⅷ層は自然流路の堆積土であることが確認できた。また、この第Ⅷ層上面は文京遺跡の弥生時代の集落が展開する微高地を形成しており東西方向の比高差は、東端の54次調査4区と西端の調査区である54次調査1区の比高差は0.9mをもち西側へ緩傾斜し、南北方向は54次調査1区と53次調査1区の比高差0.3mをもち北側へ緩傾斜を呈している。



第5図 区割り図・土層模式図

第3節 遺構と遺物

2 遺跡の調査により、縄文時代から中世にかけての遺構や遺物を確認した。以下、時代別に遺構と遺物の概要を説明する。

1) 縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であったが、53 次調査 1 区～3 区、54 次調査 1 区～3 区の第Ⅷ層中より縄文土器の破片が出土した。53 次調査 1 区～3 区、54 次調査 2 区では第Ⅷ層中から焼土や炭化物が出土した。

2) 弥生時代～古墳時代

54 次調査 3 区土坑内からは焼土の塊や炭化材が出土した。土器類が未出土であり、検出層から弥生時代から古墳時代の間としか分からない。54 次調査 4 区自然流路は、弥生時代から古墳時代にかけて西流していた自然流路である。

3) 中世

西側の調査区に集中しており、SD101 は 53 次調査 1 区から 54 次調査 1 区へ南北方向に直線的に延びる溝でさらに両端は調査区外へ延びる様相である。また、54 次調査 4 区を除いた全域において柱穴を検出した。

今回の調査で検出した遺構は、殆どが第Ⅷ層上面の検出であり、弥生時代～古墳時代の土坑 1 基、中世の溝 5 条、弥生時代から古墳時代にかけての自然流路 1 条、中世の自然流路 2 条、弥生時代～中世の柱穴 183 基である。

表 2 検出遺構一覧

時期	文京遺跡 53 次調査			文京遺跡 54 次調査			
	1 区	2 区	3 区	1 区	2 区	3 区	4 区
縄文時代	土器・炭化物・焼土	土器・炭化物	土器・炭化物	土器	土器・炭化物・焼土	土器	
弥生時代～古墳時代						SK301	SR402
中世以前	SD104						
中世	SD101～SD103・柱穴	柱穴	SR301・柱穴	SD101・柱穴	柱穴	柱穴	SR401

－凡例－

1. 本報告書では、検出した遺構を以下のように掲載している。
2. 遺構の一覧表や遺物の観察表の凡例は以下とした。

遺構一覧・遺物観察表 －凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 (): 現存検出長を示す。

(3) 遺物観察表の各掲載について。

- 法量欄 (): 推定復元値
 調整欄 土製品の各部位名称を略記した。
 例) ㊦ → 口縁部、㊦端 → 口縁端部、㊦ → 胴部、㊦ → 底部。
 胎土欄 胎土欄では混和材を略記した。
 例) 石 → 石英、長 → 長石、金 → 金ウンモ、角 → 角閃石、赤 → 赤色土粒、密 → 精製土。
 () の中の数値は混和材粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1～3) → 「1～3mm 大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略号について。◎ → 良好、○ → 良、△ → 不良。

第3章 文京遺跡53次調査

第1節 調査の経過

1. 調査の経緯

調査は、3地区（1区・2区・3区）に分区して実施した（第6図）。以下、調査工程を略記する。

7月8日（月）：午前9時に調査事務所の建て上げを開始し、運動場内には安全対策用の防御フェンスを設置する。午前10時、発掘作業用の重機を搬入し、1区と2区の表土掘削を開始する。

7月9日（火）：前日に引き続き、1区と2区の表土掘削を行い、本日にて2区の掘削を終了する。

7月10日（水）：本日より、3区の表土掘削を開始する。表土掘削が終了した2区は、作業員による調査区壁面の精査を行う。

7月11日（木）：2区は前日に引き続き、調査区壁面の精査を行い、本日にて3区の表土掘削を終了する。

7月12日（金）：3区は調査区壁面の精査を行い、2区と3区の土層堆積状況を確認する。

7月16日（火）：1区の表土掘削を終了し、その後、調査区壁面の精査を行う。

7月17日（水）：1区で検出した近現代坑の除去作業を開始すると共に、土層堆積状況を確認する。

7月22日（月）：1区の遺構検出作業を行い、溝と柱穴を確認する。

7月23日（火）：2区と3区で検出した近現代坑の除去作業を行い、併行して1区で検出した遺構の配置図を作成する。

7月24日（水）：3区の遺構検出作業を行い、自然流路と柱穴を確認する。

7月25日（木）：1区と3区で検出した柱穴の柱痕跡確認作業を行い、併行して2区で検出した遺構の配置図を作成する。

7月29日（月）：高所作業車を使用して、遺構検出状況の写真撮影を行う。

7月30日（火）：1区で検出した溝の掘り下げと、柱穴の半裁作業を行う。

8月1日（水）：1区と3区で検出した柱穴の半裁作業を行う。

8月5日（月）：1区で検出した遺構平面図の作成と、2区で検出した柱穴の半裁作業を行う。

8月6日（火）：1区で検出した柱穴の測量、及び完掘作業を行う。

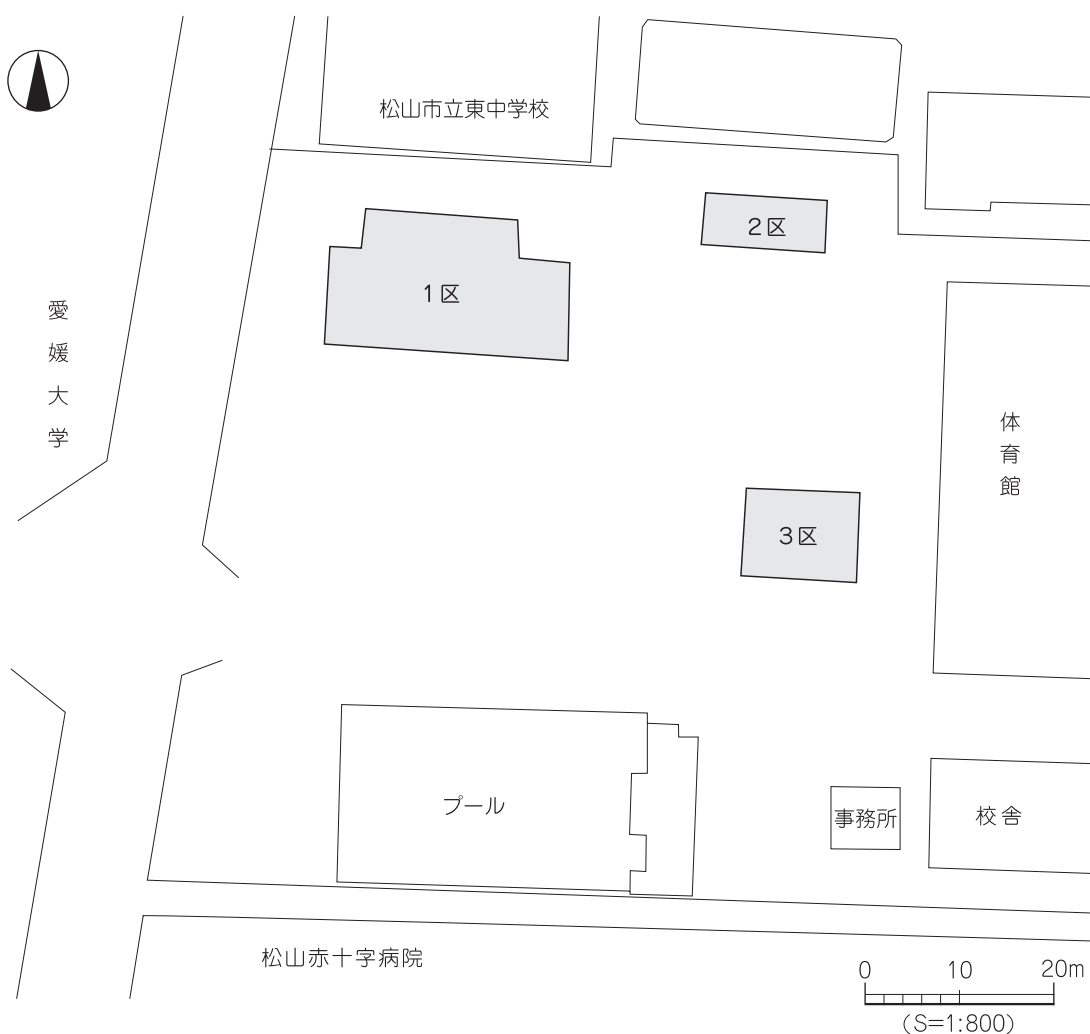
8月7日（水）：2・3区で検出した柱穴の測量、及び完掘作業を行う。

8月8日（木）：2・3区は検出した遺構の平面図を作成し、1区では試掘調査の結果より、縄文土器が出土した調査区北西部に一辺8m四方の小調査区を設定し、遺構検出層である第Ⅷ層黄色シルト層の掘り下げ及び遺物の検出作業を行う。

8月9日（金）：1区は前日に引き続き、第Ⅷ層の掘り下げを行う。本日より、各地区の調査壁面土層図を作成する。

8月12日（月）：3区中央部に1区と同様の小調査区を設定し、第Ⅷ層の掘り下げと遺物の検出作業を行う。

- 8月13日（火）：1区は重機の使用により深掘トレンチを掘削し、黄色シルト及び流路や河川の確認作業を行う。なお、1区と3区では第Ⅷ層の掘り下げを続行する。
- 8月15日（木）：1区では、検出した遺物（土器・石器）の出土状況図面を作成し、3区は引き続き第Ⅷ層の掘り下げを行う。
- 8月19日（月）：1区は検出した遺物の取り上げ、3区は第Ⅷ層の掘り下げを行う。
- 8月20日（火）：1区は遺物の取り下げを行った後、さらに第Ⅷ層の掘り下げを行う。
- 8月23日（金）：1区と3区で検出した遺物の取り上げを行い、3区は本日より重機の使用による埋戻し作業を開始する。
- 8月24日（土）：午前中に3区の埋戻し作業を終了し、午後は2区の埋戻し作業を行う。
- 8月27日（火）：午前中に2区の埋戻し作業を終了し、午後からは1区の埋戻し作業を行う。
- 8月29日（木）：本日にて1区の埋戻し作業を終了し、午後には防衛フェンスの撤去を行う。
- 8月30日（金）：運動場全体の整地作業と調査事務所の解体・撤去を行い、本日にて屋外調査を終了する。



第6図 調査区位置図

第2節 層位 (第7～10図)

調査対象地は東雲小学校の運動場内にあり、地表面の標高は約 29 mを測る。調査地の基本層位は、以下の8層である。第I層は真砂土のほか、運動場建設以前に存在した建物の基礎などである。

第I層－表土層（真砂土・コンクリート・バラス・レンガ等）で、地表下 40～80cmまで開発が行われている。土質の違いにより、四種類に分層される。第I①層：真砂土、第I②層：造成土、第I③層：オリーブ灰色土（10Y6/2）、第I④層：黄褐色土（10YR8/8）

第II層－近現代の農耕に伴う耕土〔黄褐色土（2.5Y5/4）〕で、全区にみられ、層厚 5～10cmを測る。

第III層－中世段階の堆積層〔灰白色砂質土（10YR7/1）〕で1区と3区にみられ、層厚 10～30cmを測る。本層中からは、土師器片が数点出土した。なお、1区検出の溝 SD101は土層観察の結果より、本層上面から掘削された遺構である。

第IV層－灰黄色土（7.5YR7/2）で全地区にみられ、層厚 5～10cmを測る。

第V層－褐灰色土（10YR4/1）で全地区にみられ、層厚 5～20cmを測る。本層中からは、土師器片が少量出土した。1区検出の溝 SD103及び3区検出の SR301は、本層上面から掘削された遺構である。

第VI層－土色・土質の違いにより、二種類に分層される。

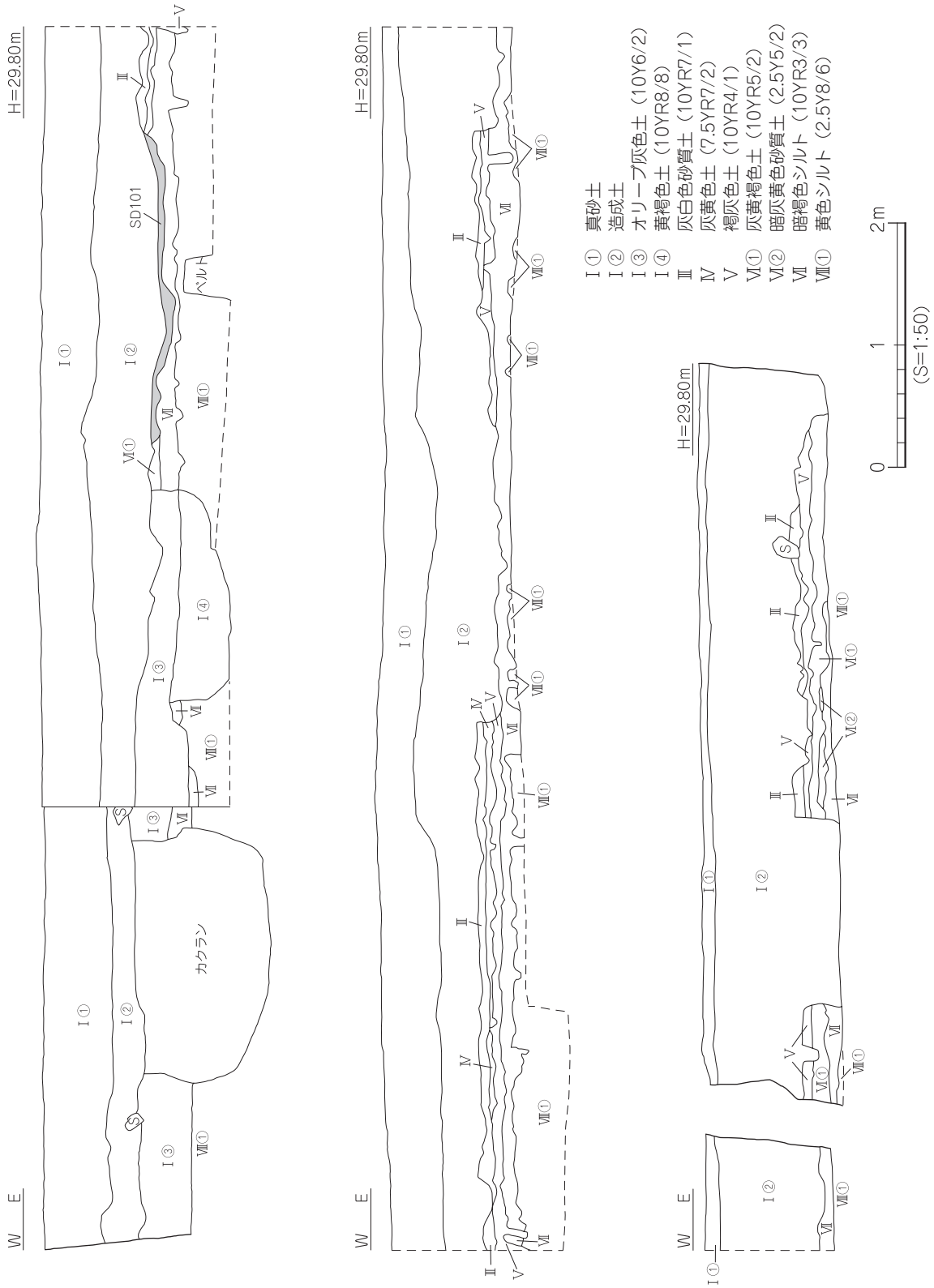
第VI①層：灰黄褐色土（10YR5/2）で全地区にみられ、層厚 5～10cmを測る。

第VI②層：暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）で1区東側にみられ、層厚 3～10cmを測る。

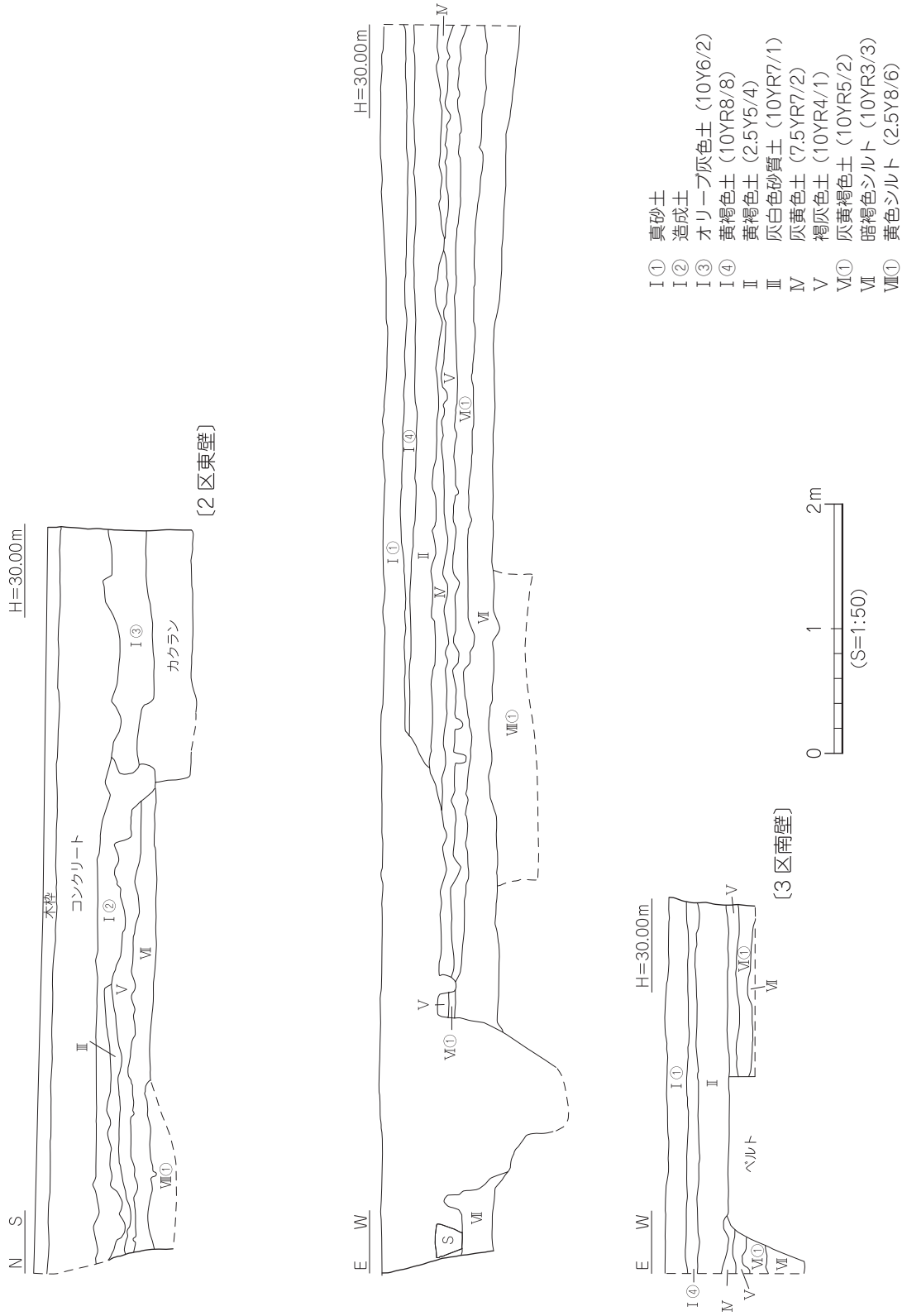
第VII層－暗褐色シルト（10YR3/3）で1区と2区にみられ、層厚 10～40cmを測る。

第VIII層－黄色シルト（2.5Y8/6）で全地区にみられ、層厚 30cm以上を測る。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。1区と3区では、第VIII層下の堆積状況を確認するため、調査地内に深さ 2m程度のトレンチを掘削した（図版 5・8）。その結果、砂質の黄色土（2.5Y8/6）や明黄褐色粘質土（2.5Y6/6）、黄色粘質土（2.5Y8/6）がみられたほか、灰色砂や灰色粗砂、浅黄色微砂、灰色砂礫層などがあり、第VIII層堆積時に自然流路や河川の形成されていることが判明した。本層中からは、縄文土器や石器のほか炭化物や焼土が出土した。なお、本層上面の標高を測量すると、調査地南東部の3区東側が最も高く標高 29.2m、調査地西部の1区南西部が最も低く標高 28.4mとなり、漸次、南東部から北西部に向けて傾斜をなす（比高差 80cm）。

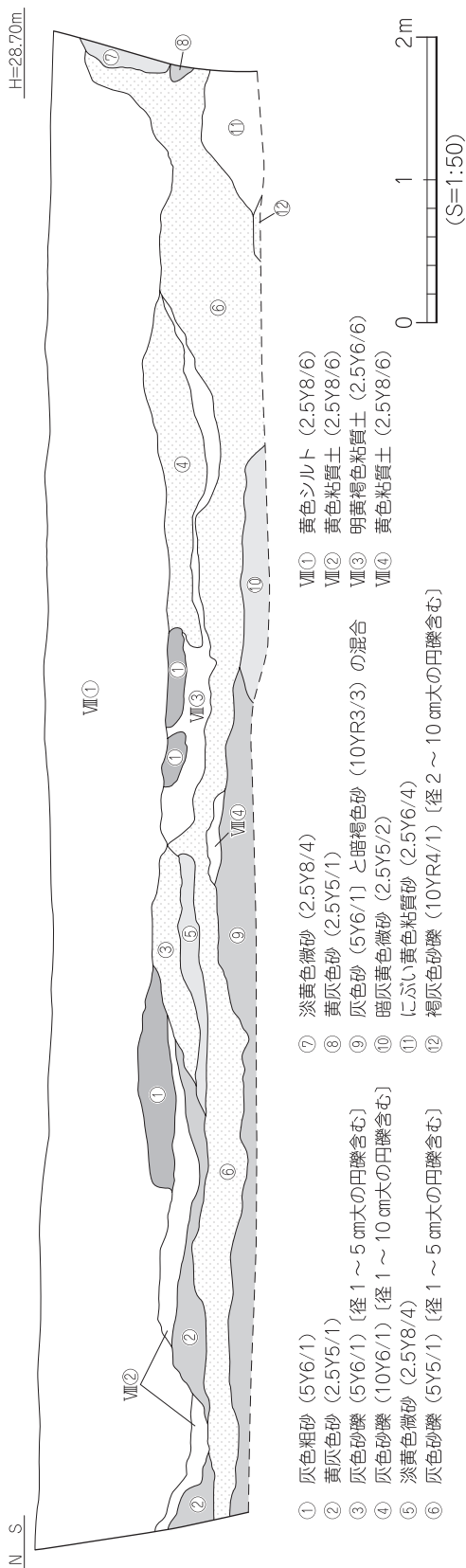
検出した遺構や出土遺物のほか、周辺の調査結果より、第VIII層は縄文時代、第VII層は弥生時代～古墳時代、第VI層から第III層は中世段階の堆積層と考えられる。なお、調査にあたり調査区内に 5m 四方のグリッドを設定した。グリッドは地区毎に北から南側へ向けて A・B・C・D、西から東側へ 1・2・3・・・7とし、A1・A2・・・D7といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取上げ等に利用した。



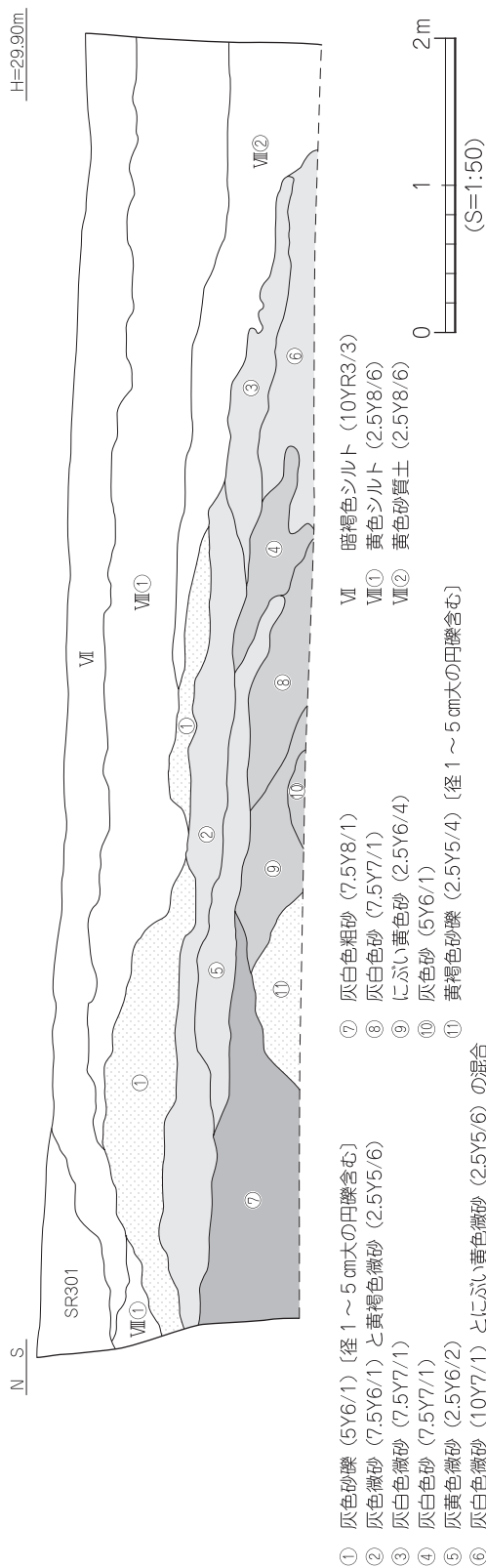
第7図 1区北壁土層図



第8図 2区東壁・3区南壁土層図



第 9 図 1 区トレンチ土層図

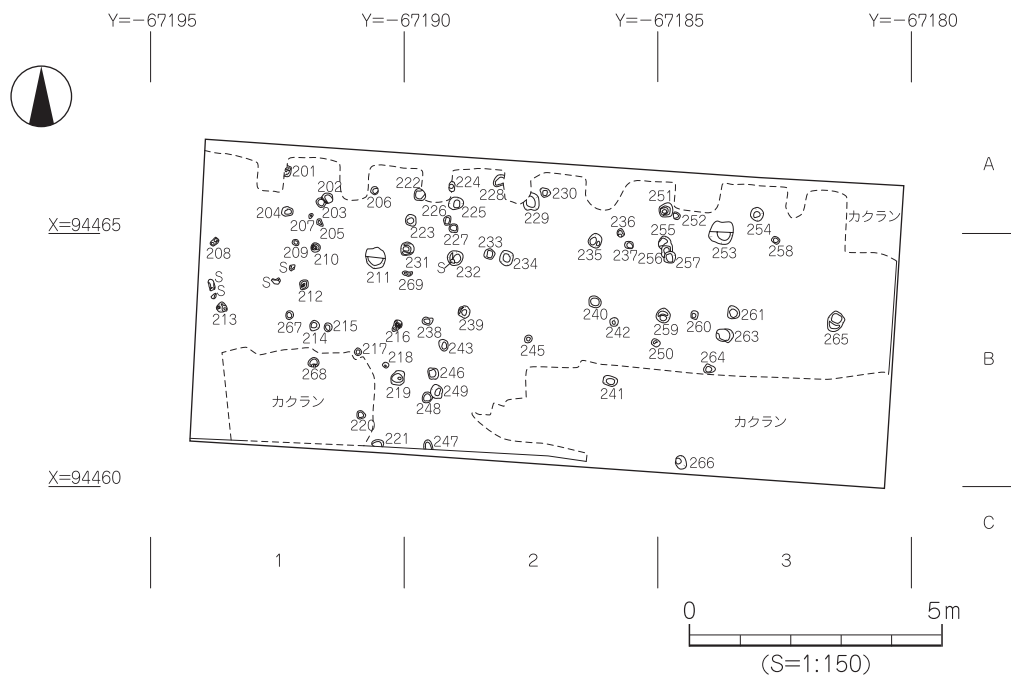


第 10 図 3 区トレンチ土層図



第11図 1区遺構配置図

文京遺跡 53 次調査



第 12 図 2 区遺構配置図



第 13 図 3 区遺構配置図

第3節 遺構と遺物

本調査では、溝4条と自然流路1条のほか柱穴155基を確認した。すべて、第Ⅷ層黄色シルト上面での検出である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器のほか動物骨が出土した。ここでは、地区毎に遺構・遺物を説明する。

1. 1区の調査

1区では、溝4条と柱穴54基を検出した。すべて、第Ⅷ層黄色シルト上面での検出である（第11図、図版1）。また、第Ⅷ層黄色シルト内からは縄文土器や石器のほか、焼土や炭化物が出土した。

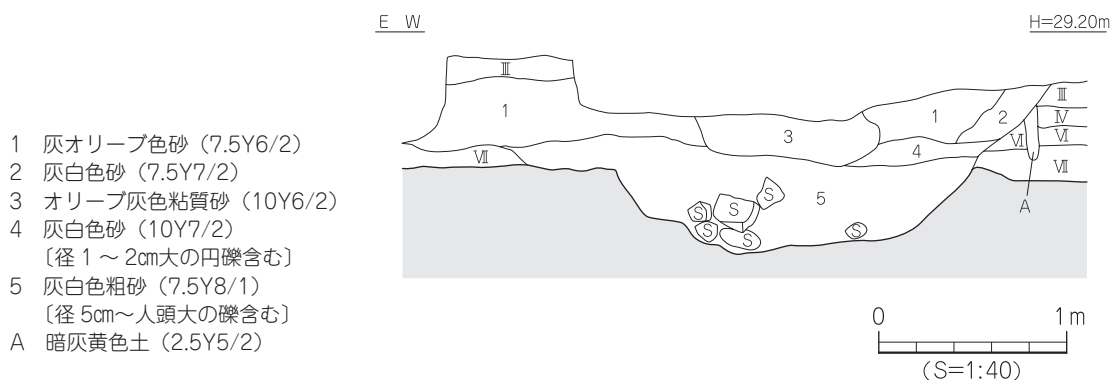
(1) 溝

SD 101（第14図、図版2）

1区中央部西寄り、D3区で検出した南北方向の溝で、調査壁の土層観察により本来は第Ⅲ層上面より掘削された遺構である。発掘調査時は溝南端部分が遺存するのみで、溝の大半は検出されなかったが、壁面の土層観察により調査区北壁にて溝基底部が残存していることを確認した。なお、第11図にSD101の想定範囲をしている。溝の規模は検出長2.6m、幅2.5m、深さ52cmを測るが、調査区南壁では約80cmの深さを測る。断面形態はレンズ状を呈し、溝内には拳～人頭大の石が基底面付近にあり、溝中位には1～5cm大の小礫や粗砂がレンズ状に堆積している。このことから、溝内には激しい水流のあったことが伺われ、水路として機能していたものと推測される。なお、基底面は凹凸が著しく、足跡状の凹みが数箇所認められた。遺物は埋土中より、土師器土釜や須恵器播鉢の破片、古墳時代の土師器片や須恵器片が出土したほか、動物骨（牛の臼歯）が1点出土した（図版9-A）。

出土遺物（第15図、図版9）

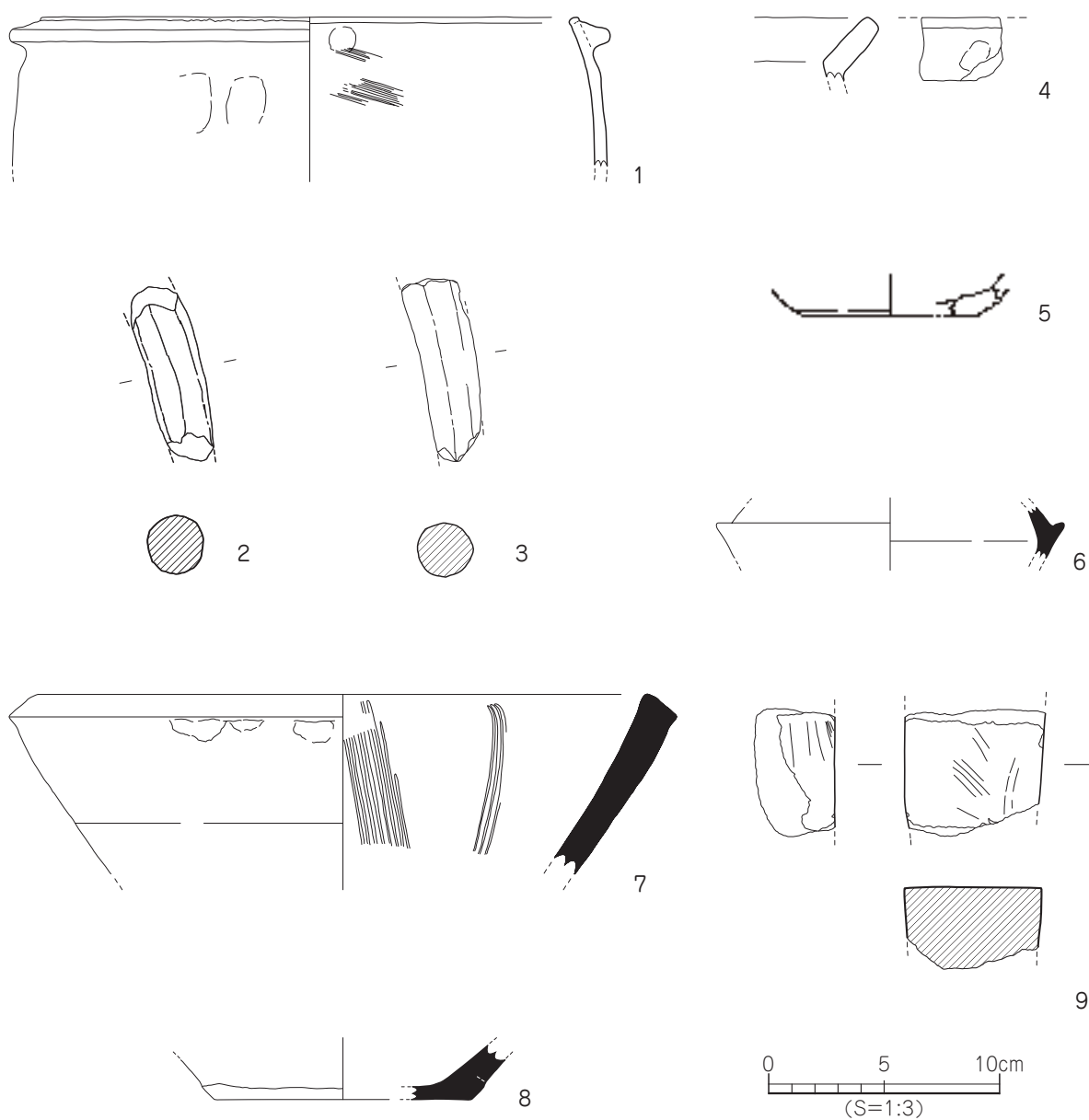
1～5は土師器。1は推定口径22.4cmを測る三足付土釜の口縁部片で、口唇部よりやや下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付ける。色調は茶褐色を呈し、内面にはハケメ調整を施す。胎土中には石英や長石のほか金ウンモが混入しており、外面には煤が付着している。2・3は三足付土釜の脚部片で断面円形状をなし、厚さ2.4cmを測る。4は甕の口縁部片で、内面には明瞭な稜をもつ。色調は



第14図 SD101南壁断面図

褐色を呈し、胎土中に赤色酸化土粒を含む。5 は坏の底部片で、推定底径 7.4cm を測り、色調は橙色を呈する。6 は須恵器坏身小片で、色調は内外面共に青灰色を呈する。7・8 は東播系須恵器揃鉢である。7 は推定口径 26.2cm を測る口縁～体部片で、口縁部は外傾し、体部内面に 8 条 1 対の条線を施す。8 は推定底径 11.0cm を測る底部片で、底部の厚さは 0.5cm を測る。7・8 共に、色調は灰色を呈する。9 は安山岩製の砥石で、3 面の砥面を確認した。幅 6cm を測り、部分的に焼け焦げ痕を残す。4・6 は古墳時代後期、その他は 13～14 世紀代に時期比定される遺物である。

時 期：出土遺物の特徴より SD101 は中世、13～14 世紀代の溝とする。



第 15 図 SD101 出土遺物実測図

SD 102 (第 16 図、図版 2)

1 区西側 B・C2 区で検出した南北方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、本来は第 V 層上面から掘削された遺構であり、溝上面は第 III 層が覆う。溝の規模は幅 20～35cm、深さは検出面下 8cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黄灰色砂 (2.5Y6/1) であるが、調査区壁面の観察では上層部分に灰黄褐色土 (10YR6/2) が約 20cm 堆積している。溝基底面は比較的平坦で、わずかに北側から南側に向けて緩傾斜をなす (比高差 5cm)。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第 V 層上面から掘削されていることから、概ね中世段階の溝と考えられる。

SD 103 (第 16 図、図版 2)

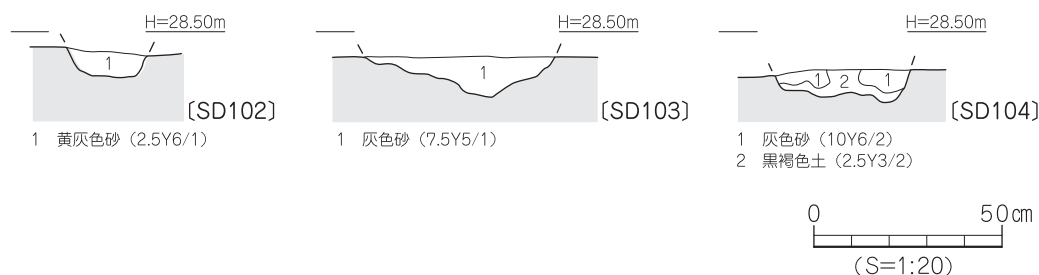
1 区南西部 C1～D4 区で検出した南東－北西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。調査区壁面の土層観察により、SD102 と同様、第 V 層上面から掘削された遺構であることが判明している。溝の規模は幅 20～50cm、深さは検出面下 10cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色砂 (7.5Y5/1) 単層である。溝基底面には凹凸があり、わずかに南西から北東に向けて緩傾斜をなす (比高差 2cm)。溝内からは土師器小片が数点出土したが、時期の判断できるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、第 V 層上面から掘削されていることから、概ね中世段階の溝とする。

SD 104 (第 16 図、図版 3)

1 区中央部南寄り、C1～C7 区で検出した東西方向の溝で、やや蛇行しており、溝両端は調査区外に続く。調査区壁面の土層観察により、本来は第 VII 層上面以上の土層から掘削された遺構であり、溝上面は第 VI ①層が覆う。溝の規模は幅 22～36cm、深さは検出面下 8cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土 (2.5Y3/2) を基調とし、部分的に灰色砂 (10Y6/2) が混入する。溝基底面には凹凸が著しく、小ピット状の凹みが数多く認められる。なお、基底面は東側から西側に向けて傾斜をなす (比高差 8cm)。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第 VI ①層が覆うことから、概ね中世以前の溝とする。



第 16 図 SD102・SD103・SD104 断面図

(2) 柱 穴

1区では、54基の柱穴（SP101～SP154）を検出した（表5）。各柱穴の埋土は暗褐色土、暗灰色土、灰色土、灰褐色土の四種類であるが、調査区壁面の土層観察により灰褐色土を埋土とする柱穴は第V層上面から掘削された遺構であることが判明している。平面形態は円形と楕円形の二種類があり、規模は径14～52cm、深さ5～75cmを測る。柱穴の分布状況であるが、調査区北西部にはほとんど見られず、南東部に散在しており、灰色土を埋土とする柱穴は調査区東半部に集中している。なお、柱穴からは遺物の出土はない。

暗褐色土：19基（SP101～104・106～111・113～115・117・123・126・127・129・142）

暗灰色土：11基（SP105・125・131・132・134・143・146～149・152）

灰色土：22基（SP112・116・118・119・121・122・124・128・130・133・135～141・145・150・151・153・154）

灰褐色土：2基（SP120・144）

(3) 第Ⅷ層の調査

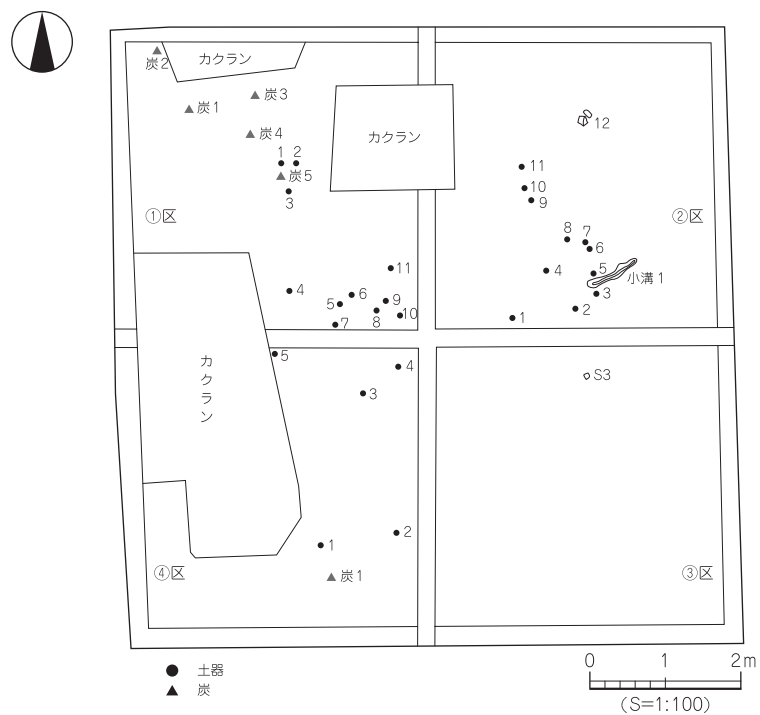
1区では事前に実施した試掘調査において、第Ⅷ層黄色シルト層中より縄文土器や炭化物が少量検出された。このことから、遺物が出土した地点を中心に小調査区（8m×8m）を設定し、第Ⅷ層の掘り下げと遺物の検出・取り上げ作業を実施した（第17・18図、図版4～6）。その結果、縄文土器片や石鏃、スクレーパーのほか、炭化物や焼土を検出した。このほか、幅10cm前後、深さ10cm前後の小溝4条（小溝1～4）を検出した。

調査は調査区内を4分割し、北西部から時計回りに①区、②区、③区、④区といった地区名を設け、それぞれに地区名を付けた。

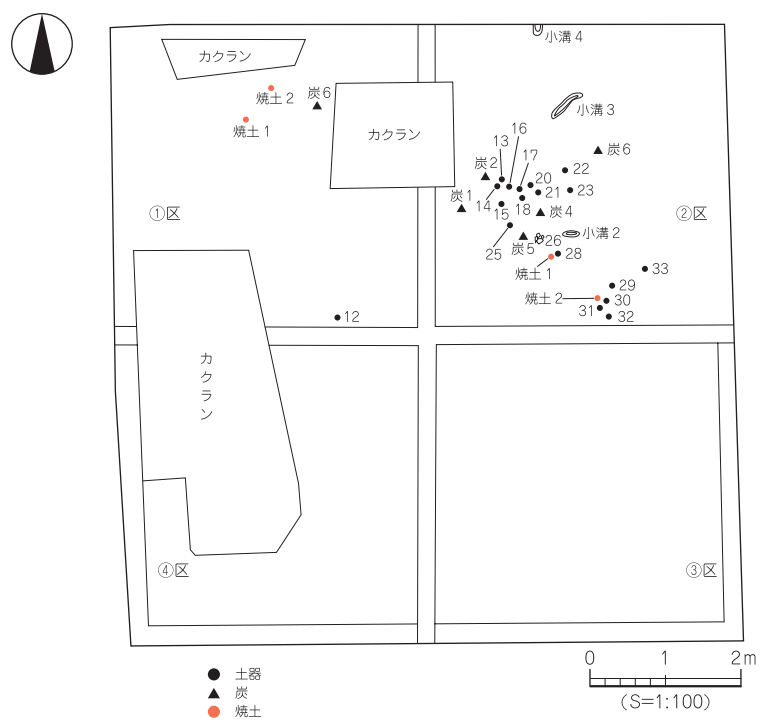
まず、試掘調査で縄文土器が出土した地点（標高28.50m）付近まで掘り下げを行った（第1面の調査）。その結果、①区では北西部に炭化物、南東部には土器片が比較的集中して検出された。②区では中央部付近にて土器片の集中する箇所が認められたほか、北東部では大型の土器片がまとまって出土した。また、②区からは幅10cm、長さ30cm、深さ8cmを測る小溝1を検出した。小溝1の埋土は、灰色粘質土（10YR5/1）である。③区では北側中央部にて大型のスクレーパーが出土したほか、南側では第Ⅷ層堆積時に存在した自然流路や河川に起因する小礫（径1～2cm大）が集中して検出された。それらの測量と遺物の取り上げを行った後、①区と②区に限り、さらに10cm程度の掘り下げを進めた（第2面の調査）。その結果、①区では径0.5～1cm大の焼土や炭化物が検出され、②区では中央部付近にて土器片が集中して検出されたほか、木材と思われる炭化材（径1cm、長さ1.5cm）や焼土が検出された。また、第1面と同様の小溝3条（小溝2～4）を検出した。小溝埋土は、灰色粘質土（10YR5/1）である。小溝内からは、遺物の出土はない。

出土遺物（第19図、図版10）

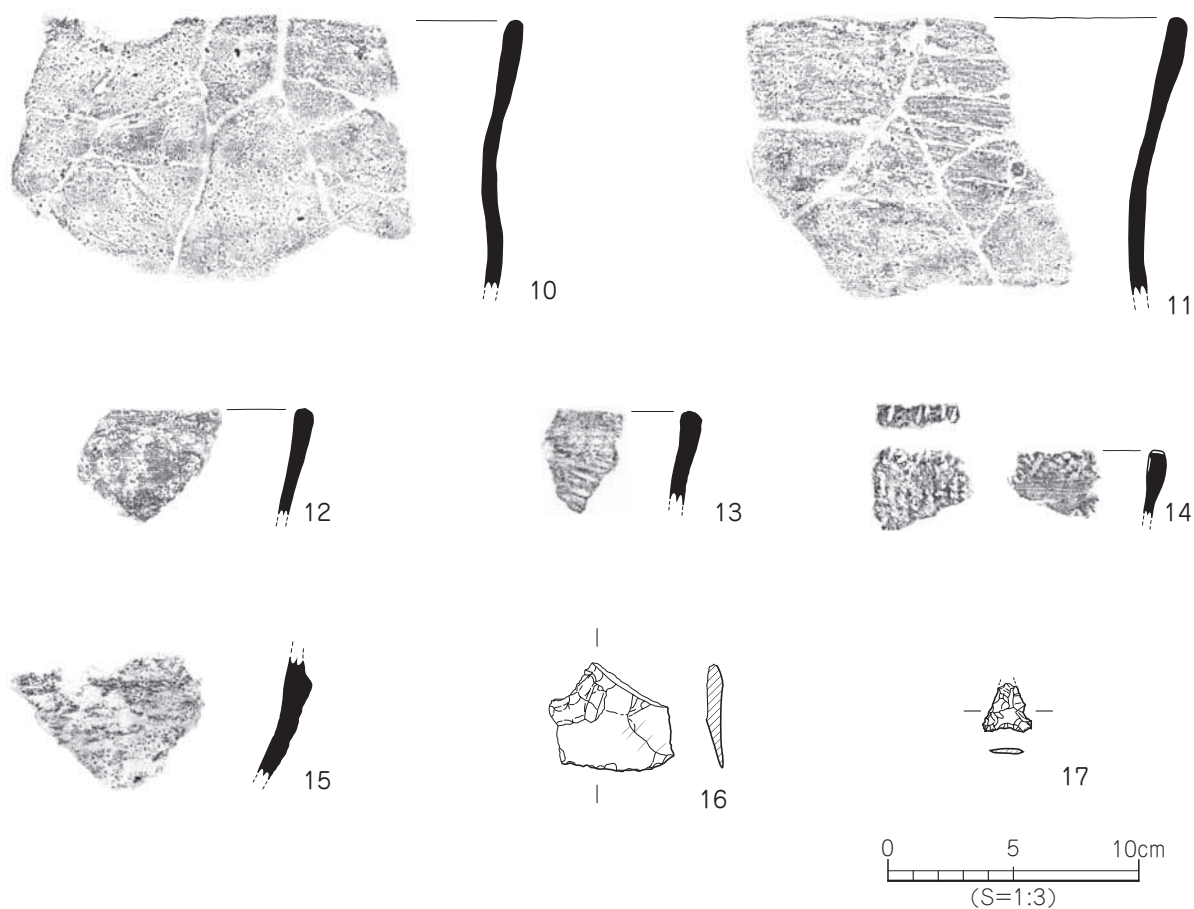
10～14は粗製の深鉢で、口縁部がわずかに肥厚する。10は第1面②区12地点出土品。色調は外面が黄褐色、内面は暗褐色を呈し、器表面にはナデ調整を施す。11は第2面②区26地点出土品。色調は灰褐色を呈し、器表面には条痕を残す。12は第1面②区5地点出土品。色調は黄褐色を呈し、器表面にはナデ調整を施す。13は第2面④区出土品。色調は黄茶色を呈し、器表面には条痕を残す。14は第1面①区出土品。口縁端部には刻目、口縁部にはRL縄文を施し、色調は褐色を呈する。15



第 17 図 1 区第Ⅷ層黄色シルト (第 1 面) 遺物出土状況図



第 18 図 1 区第Ⅷ層黄色シルト (第 2 面) 遺物出土状況図



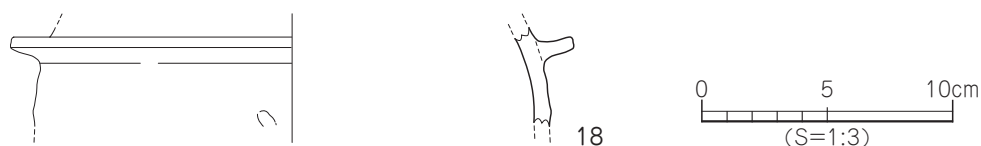
第 19 図 1 区第Ⅷ層出土遺物実測図

は第 1 面①区 1 地点出土の深鉢。胴部片で、色調は黒褐色を呈し、外面には条痕、内面にはミガキ調整を施す。16 は第 1 面③区 S3 地点出土品。サヌカイト製のスクレーパーで、長さ 4.8cm、幅 4.2cm、厚さ 0.6cm、重量 15.9 g を測る。17 は第 1 面②区出土品。打製の凹基無茎石鏃である。サヌカイト製。

2. 2 区の調査

2 区は、調査以前は砂場として利用されていた。調査区北壁沿いには運動場建設以前に建てられた建物の基礎、南側にはバラス層と建物基礎があり、2 区の北側と南側では遺跡の削平されている箇所が部分的にみられた。

2 区では、67 基の柱穴を検出した (SP201 ~ 269 : SP244・262 は欠番)。すべて、第Ⅷ層上面での検出である (第 12 図、図版 6)。各柱穴の平面形態は円形と楕円形であり、規模は径 5 ~ 50cm、深さ 4 ~ 40cm を測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色土、暗灰色土、灰色土、灰褐色土、緑灰色土の五種類である。このうち、灰色土の柱穴は調査区西半部に集中しており、暗褐色土の柱穴は調査区全域に散在している。なお、柱穴内からは弥生土器片や土師器片、瓦質土器片のほか、3 基の柱穴内 (SP203 : 暗褐色土、SP217・218 : 灰色土) からは炭化物が出土した。なお、調査では数多くの柱穴を検出したが、建物を構成するまでには至らなかった。



第 20 図 SP234 出土遺物実測図

暗褐色土：38 基（SP201～204・207～210・212・213・219・223・226・228～230・233・235～240・243・246・249・251～255・257～260・265・266）

暗灰色土：2 基（SP231・247）

灰色土：22 基（SP206・211・214～218・220～222・224・225・227・232・234・241・242・245・248・250・264・268）

灰褐色土：4 基（SP205・256・261・263）

緑灰色土：2 基（SP267・269）

出土遺物（第 20 図、図版 10）

18 は灰色土を埋土とする SP234 からの出土品。瓦質の羽釜片で、断面方形状の鍔が付く。外面には煤が付着している。

3. 3 区の調査

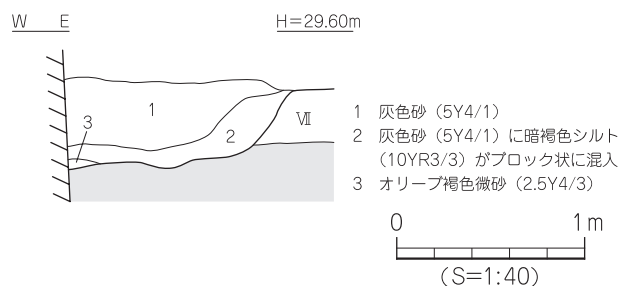
3 区は運動場南東部に位置し、調査区南側中央部や東壁沿いには近現代の攪乱坑が検出され、部分的に遺跡が削平されている。3 区では、自然流路 1 条と柱穴 34 基を検出した。すべて、第Ⅷ層上面での検出である（第 13 図、図版 7）。

(1) 自然流路

SR 301（第 21 図、図版 7）

3 区北西隅 A1 区で検出した自然流路の一部で、土層観察の結果、本来は第Ⅴ層堆積時以降に存在した遺構である。事前に実施した試掘調査では、3 区北西部に設定した 3 箇所のトレンチにて流路跡が検出されており、SR301 はそれらの延長部と考えられる。規模は検出長 1.1m、検出幅 1.0m、深さは検出面下 40cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色砂（5Y4/1）を基調とし、埋土下位には暗褐色シルト（10YR3/3）やオリーブ褐色微砂（2.5Y4/3）が混入している。なお、流路内から遺物の出土は見られなかった。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第Ⅴ層堆積時以降の流路であることから、概ね中世段階の遺構と考えられる。



第 21 図 SR301 南壁土層図

(2) 柱 穴

3区では、34基の柱穴（SP301～SP334）を検出した。すべて、第Ⅷ層上面での検出である（表3）。各柱穴の平面形態は円形と楕円形であり、規模は径11～58cm、深さ5～31cmを測る。柱穴掘り方埋土は、暗褐色土、暗灰色土、灰色土の三種類である。分布状況をみると、調査区南半部にはみられず、北半部に散在している。なお、多数の柱穴を検出したが、建物を構成するには至らなかった。柱穴内からは、SP322より弥生土器の小破片が数点出土した。

暗褐色土：10基（SP302・303・307・310・314・315・318～320・325）

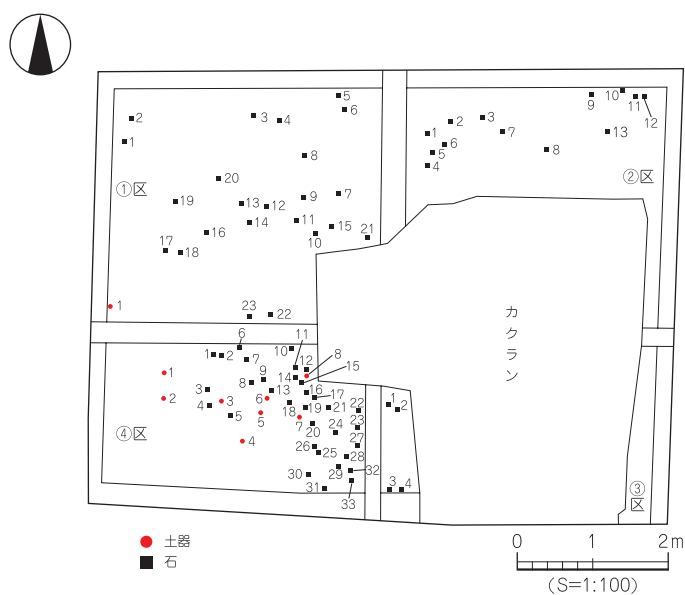
暗灰色土：22基（SP301・304～306・308・309・311・313・316・317・321～324・326～329・331～334）

灰色土：2基（SP312・330）

(3) 第Ⅷ層の調査

3区では1区と同様、試掘調査にて縄文土器や炭化物が検出された。このことから、遺物が出土した箇所を中心に小調査区（8×8m）を設定し、第Ⅷ層の掘り下げや遺物の取り上げ作業を行った。その結果、縄文土器や小礫を検出した（第22図、図版8）。調査は調査区内を4分割し、それぞれに地区名を付けた（①～④区）。

調査では地区南西部④区にて土器片が比較的まとまって出土したが、いずれも小片ばかりであり、図化しうるものはない。なお、地区全域には径1～2cm大の河原石が散在して出土したが、これらは第Ⅷ層堆積時に存在した河川や流路に起因するものと判断される。なお、①区と④区からは、第Ⅷ層中に炭化物（径0.5～1cm）が散在して検出された。



第22図 3区第Ⅷ層黄色シルト遺物出土状況図

第4節 まとめ

本調査では、主に中世段階の遺構を検出したほか、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、石器などが出土した。

1区では中世、鎌倉時代から室町時代の溝を検出した。このうち、溝 SD101 は南北方向に延びる比較的大型の溝で、検出最大幅 2.5m、深さ 80cm を測る。溝内には拳～人頭大の礫を含む砂や粗砂が厚く堆積しており、激しい水流のあったことが伺われる。周辺調査では、調査地北方にある文京遺跡 4 次調査にて中世段階の流路が検出されており、SD101 はそれらから取水するために掘削された基幹水路の可能性もある。このほか、1区では砂で埋没する 2 条の溝 (SD102・103) を検出した。幅 20～50cm の小規模な溝ではあるが、明らかに水路として機能したものであり、SD101 を含む 3 条の溝は 1 区や近隣地域に存在すると思われる水田や畑に関連する遺構と考えられる。なお、1 区検出の溝 SD104 は基底面に小ピット状の凹みが多くみられたことから、農耕に伴う鋤跡溝と思われる。このように、1 区は中世段階において耕作地として土地利用されたものと考えられる。

一方、2 区や 3 区では多数の柱穴を検出した。建物を構成するような柱穴は未検出であるが、柱穴内からは中世段階の土師器土釜や瓦質土器羽釜の破片が数点出土した。断定はできないが、中世において調査地や周辺地域には農村的な集落が営まれていたものと推測される。

今回の調査では、第Ⅷ層黄色シルト内より縄文土器や石器のほか炭化物や焼土を検出した。このうち、1 区では黄色シルト上面から約 20cm 掘り下げた地点 (標高 28.5m 前後) にて縄文後期に時期比定される深鉢や浅鉢の破片が出土した。また、同地点からは土器と共に径 1cm、厚さ 1cm 大の炭化材が数点出土した。明確な掘り方は確認できなかったが、出土した遺物は本来、遺構に伴う可能性が高いものと考えられる。なお、1 区では灰色粘質土で埋没する幅 10cm、長さ 5～30cm、深さ 10cm 前後の小溝を検出したが、その性格や用途は不明であり、今後の検討課題である。いずれにせよ、黄色シルト内からこれらの遺構・遺物が検出されたことは、調査地内に縄文時代後期集落が存在したことを示す貴重な資料である。

文京遺跡 53 次調査

表 3 溝一覧

溝 (SD)	区	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
101	1	D3	レンズ状	(2.60) × 2.50 × 0.52	灰白色砂 他	土師器・須恵器・石器・骨	13～14世紀
102	1	B・C2	レンズ状	7.20 × 0.35 × 0.08	黄灰色砂		中世
103	1	C1～D4	レンズ状	13.20 × 0.50 × 0.10	灰色砂		中世
104	1	C1～C7	皿状	24.40 × 0.36 × 0.08	黒褐色土 (灰色砂混入)		中世以前

表 4 自然流路一覧

自然流路 (SR)	区	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
301	3	A1	レンズ状	(1.10) × (1.00) × 0.40	灰色砂 他		中世

表 5 柱穴一覧

(1)

番号 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物
101	1区	楕円形	0.29 × 0.24 × 0.07	暗褐色土	
102	1区	楕円形	0.20 × 0.16 × 0.08	暗褐色土	
103	1区	楕円形	0.22 × 0.16 × 0.25	暗褐色土	
104	1区	楕円形	0.20 × 0.17 × 0.22	暗褐色土	
105	1区	円形	0.17 × 0.17 × 0.19	暗灰色土	
106	1区	楕円形	0.36 × 0.25 × 0.20	暗褐色土	
107	1区	円形	0.19 × 0.18 × 0.10	暗褐色土	
108	1区	楕円形	0.40 × 0.31 × 0.19	暗褐色土	
109	1区	楕円形	0.38 × 0.26 × 0.18	暗褐色土	
110	1区	円形	0.20 × 0.20 × 0.20	暗褐色土	
111	1区	楕円形	0.22 × 0.17 × 0.18	暗褐色土	
112	1区	楕円形	0.25 × 0.18 × 0.22	灰色土	
113	1区	楕円形	0.29 × 0.19 × 0.27	暗褐色土	
114	1区	円形	0.31 × 0.31 × 0.23	暗褐色土	
115	1区	楕円形	0.21 × 0.19 × 0.44	暗褐色土	
116	1区	楕円形	0.18 × 0.13 × 0.30	灰色土	
117	1区	楕円形	0.31 × 0.23 × 0.19	暗褐色土	
118	1区	円形	0.14 × 0.14 × 0.09	灰色土	
119	1区	円形	0.30 × 0.30 × 0.08	灰色土	
120	1区	円形	0.32 × 0.31 × 0.10	灰褐色土	
121	1区	楕円形	0.28 × 0.25 × 0.07	灰色土	
122	1区	楕円形	0.32 × 0.23 × 0.06	灰色土	
123	1区	円形	0.23 × 0.22 × 0.05	暗褐色土	
124	1区	円形	0.16 × 0.15 × 0.14	灰色土	
125	1区	楕円形	0.47 × 0.33 × 0.42	暗灰色土	
126	1区	楕円形	0.25 × 0.22 × 0.10	暗褐色土	
127	1区	楕円形	0.30 × 0.25 × 0.16	暗褐色土	
128	1区	楕円形	0.26 × 0.21 × 0.05	灰色土	
129	1区	楕円形	0.20 × 0.17 × 0.14	暗褐色土	
130	1区	楕円形	0.28 × 0.25 × 0.29	灰色土	
131	1区	円形	0.19 × 0.18 × 0.12	暗灰色土	
132	1区	円形	0.14 × 0.14 × 0.10	暗灰色土	
133	1区	楕円形	0.18 × 0.15 × 0.06	灰色土	
134	1区	楕円形	0.26 × 0.21 × 0.28	暗灰色土	
135	1区	楕円形	0.19 × 0.14 × 0.16	灰色土	

遺構観察表

柱穴一覧

(2)

番号 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物
136	1区	円形	0.52 × 0.52 × 0.75	灰色土	
137	1区	円形	0.22 × 0.21 × 0.10	灰色土	
138	1区	円形	0.16 × 0.15 × 0.07	灰色土	
139	1区	楕円形	0.32 × 0.26 × 0.26	灰色土	
140	1区	円形	0.11 × 0.09 × 0.08	灰色土	
141	1区	円形	0.24 × 0.23 × 0.26	灰色土	
142	1区	楕円形	0.31 × 0.26 × 0.17	暗褐色土	
143	1区	円形	0.21 × 0.20 × 0.10	暗灰色土	
144	1区	円形	0.25 × (0.09) × 0.09	灰褐色土	
145	1区	楕円形	0.24 × 0.21 × 0.21	灰色土	
146	1区	円形	0.16 × 0.14 × 0.19	暗灰色土	
147	1区	楕円形	0.19 × 0.15 × 0.09	暗灰色土	
148	1区	楕円形	0.26 × 0.21 × 0.17	暗灰色土	
149	1区	楕円形	0.23 × 0.15 × 0.25	暗灰色土	
150	1区	楕円形	0.38 × 0.28 × 0.19	灰色土	
151	1区	円形	0.17 × 0.15 × 0.24	灰色土	
152	1区	円形	0.24 × 0.23 × 0.15	暗灰色土	
153	1区	円形	0.21 × 0.19 × 0.40	灰色土	
154	1区	楕円形	0.27 × 0.21 × 0.14	灰色土	
201	2区	楕円形	0.21 × (0.13) × 0.25	暗褐色土	
202	2区	楕円形	0.21 × (0.19) × 0.18	暗褐色土	
203	2区	楕円形	0.19 × 0.15 × 0.14	暗褐色土	炭化物
204	2区	楕円形	0.23 × 0.19 × 0.39	暗褐色土	
205	2区	楕円形	0.15 × 0.10 × 0.06	灰褐色土	
206	2区	円形	0.14 × 0.14 × 0.20	灰色土	
207	2区	楕円形	0.11 × 0.07 × 0.04	暗褐色土	
208	2区	楕円形	0.17 × 0.11 × 0.11	暗褐色土	
209	2区	楕円形	0.16 × 0.12 × 0.18	暗褐色土	
210	2区	楕円形	0.19 × 0.16 × 0.07	暗褐色土	土師器
211	2区	楕円形	0.46 × 0.38 × 0.09	灰色土	土師器
212	2区	円形	0.18 × 0.18 × 0.04	暗褐色土	
213	2区	楕円形	0.21 × 0.17 × 0.21	暗褐色土	土師器
214	2区	円形	0.19 × 0.18 × 0.34	灰色土	
215	2区	円形	0.17 × 0.17 × 0.31	灰色土	
216	2区	楕円形	0.26 × 0.16 × 0.16	灰色土	
217	2区	円形	0.15 × 0.14 × 0.07	灰色土	炭化物
218	2区	円形	0.13 × 0.13 × 0.08	灰色土	土師器・炭化物
219	2区	円形	0.29 × 0.28 × 0.08	暗褐色土	
220	2区	円形	0.19 × 0.18 × 0.11	灰色土	
221	2区	円形	0.23 × (0.12) × 0.24	灰色土	
222	2区	円形	0.24 × 0.23 × 0.12	灰色土	
223	2区	円形	0.23 × 0.21 × 0.36	暗褐色土	土師器
224	2区	楕円形	0.19 × 0.12 × 0.10	灰色土	
225	2区	円形	0.27 × 0.25 × 0.36	灰色土	
226	2区	楕円形	0.18 × 0.15 × 0.28	暗褐色土	
227	2区	円形	0.17 × 0.17 × 0.16	灰色土	
228	2区	楕円形	(0.19) × 0.20 × 0.13	暗褐色土	
229	2区	楕円形	(0.28) × 0.32 × 0.12	暗褐色土	土師器
230	2区	楕円形	0.22 × 0.18 × 0.37	暗褐色土	土師器
231	2区	円形	0.26 × 0.26 × 0.29	暗灰色土	土師器・須恵器
232	2区	円形	0.30 × 0.28 × 0.30	灰色土	
233	2区	円形	0.21 × 0.21 × 0.18	暗褐色土	

文京遺跡 53 次調査

柱穴一覽

(3)

番号 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物
234	2 区	円 形	0.25 × 0.23 × 0.33	灰色土	瓦質土器
235	2 区	円 形	0.27 × 0.25 × 0.17	暗褐色土	
236	2 区	円 形	0.15 × 0.14 × 0.13	暗褐色土	
237	2 区	円 形	0.15 × 0.15 × 0.22	暗褐色土	土師器
238	2 区	楕円形	0.21 × 0.14 × 0.08	暗褐色土	土師器
239	2 区	円 形	0.25 × 0.24 × 0.22	暗褐色土	
240	2 区	円 形	0.25 × 0.23 × 0.06	暗褐色土	
241	2 区	楕円形	0.28 × 0.20 × 0.10	灰色土	
242	2 区	円 形	0.18 × 0.16 × 0.10	灰色土	
243	2 区	円 形	0.20 × 0.20 × 0.29	暗褐色土	
244	2 区	欠 番			
245	2 区	円 形	0.15 × 0.14 × 0.17	灰色土	
246	2 区	楕円形	0.25 × 0.19 × 0.24	暗褐色土	
247	2 区	楕円形	(0.17) × 0.15 × 0.05	暗灰色土	
248	2 区	円 形	0.20 × (0.18) × 0.09	灰色土	
249	2 区	円 形	0.25 × 0.25 × 0.19	暗褐色土	
250	2 区	楕円形	0.38 × 0.28 × 0.19	灰色土	
251	2 区	円 形	0.17 × 0.13 × 0.17	暗褐色土	弥生土器・土師器
252	2 区	円 形	0.29 × 0.29 × 0.32	暗褐色土	
253	2 区	円 形	0.50 × 0.50 × 0.14	暗褐色土	
254	2 区	楕円形	0.27 × 0.21 × 0.14	暗褐色土	
255	2 区	楕円形	(0.19) × 0.23 × 0.11	暗褐色土	
256	2 区	楕円形	(0.12) × 0.18 × 0.33	灰褐色土	土師器
257	2 区	円 形	0.25 × 0.25 × 0.40	暗褐色土	
258	2 区	円 形	0.15 × 0.14 × 0.33	暗褐色土	
259	2 区	円 形	0.16 × 0.15 × 0.20	暗褐色土	
260	2 区	円 形	0.16 × 0.15 × 0.20	暗褐色土	
261	2 区	円 形	0.24 × 0.23 × 0.32	灰褐色土	
262	2 区	欠 番			
263	2 区	楕円形	0.34 × 0.25 × 0.21	灰褐色土	
264	2 区	楕円形	0.22 × 0.17 × 0.34	灰色土	土師器
265	2 区	楕円形	0.39 × 0.29 × 0.47	暗褐色土	
266	2 区	楕円形	0.27 × 0.21 × 0.24	暗褐色土	
267	2 区	楕円形	0.13 × 0.10 × 0.05	緑灰色土	
268	2 区	円 形	0.19 × 0.19 × 0.12	灰色土	
269	2 区	楕円形	0.19 × 0.07 × 0.07	緑灰色土	
301	3 区	楕円形	0.20 × 0.15 × 0.30	暗灰色土	
302	3 区	円 形	0.24 × 0.24 × 0.08	暗褐色土	
303	3 区	円 形	0.20 × 0.20 × 0.06	暗褐色土	
304	3 区	楕円形	0.20 × 0.17 × 0.05	暗灰色土	
305	3 区	楕円形	0.19 × 0.16 × 0.05	暗灰色土	
306	3 区	楕円形	0.43 × 0.33 × 0.26	暗灰色土	
307	3 区	円 形	0.21 × 0.19 × 0.24	暗褐色土	
308	3 区	楕円形	0.21 × 0.18 × 0.28	暗灰色土	
309	3 区	楕円形	0.33 × 0.24 × 0.08	暗灰色土	
310	3 区	円 形	0.13 × 0.11 × 0.09	暗褐色土	
311	3 区	円 形	0.18 × 0.17 × 0.12	暗灰色土	
312	3 区	円 形	0.14 × 0.14 × 0.08	灰色土	
313	3 区	楕円形	0.18 × 0.12 × 0.16	暗灰色土	
314	3 区	楕円形	0.23 × 0.16 × 0.22	暗褐色土	
315	3 区	円 形	0.58 × 0.58 × 0.31	暗褐色土	
316	3 区	円 形	0.20 × 0.18 × 0.21	暗灰色土	

遺構と遺物観察表

柱穴一覧

(4)

番号 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物
317	3区	円形	0.16 × 0.16 × 0.05	暗灰色土	
318	3区	円形	0.17 × 0.16 × 0.31	暗褐色土	
319	3区	円形	0.15 × 0.15 × 0.11	暗褐色土	
320	3区	楕円形	0.21 × 0.12 × 0.25	暗褐色土	
321	3区	楕円形	(0.19) × 0.20 × 0.08	暗灰色土	
322	3区	円形	0.20 × 0.20 × 0.16	暗灰色土	弥生土器
323	3区	楕円形	0.20 × 0.17 × 0.11	暗灰色土	
324	3区	楕円形	0.19 × 0.15 × 0.20	暗灰色土	
325	3区	円形	0.57 × 0.57 × 0.10	暗褐色土	
326	3区	円形	0.19 × 0.19 × 0.24	暗灰色土	
327	3区	円形	0.17 × 0.15 × 0.06	暗灰色土	
328	3区	円形	0.21 × 0.21 × 0.22	暗灰色土	
329	3区	楕円形	0.18 × 0.14 × 0.13	暗灰色土	
330	3区	楕円形	0.28 × 0.21 × 0.13	灰色土	
331	3区	楕円形	0.23 × 0.20 × 0.15	暗灰色土	
332	3区	円形	0.18 × 0.17 × 0.05	暗灰色土	
333	3区	楕円形	0.27 × 0.22 × 0.19	暗灰色土	
334	3区	楕円形	0.20 × 0.15 × 0.13	暗灰色土	

表6 SD101 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	土釜	口径 (22.4) 残高 6.3	口唇部より下がった位置に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	㊶ヨコナデ ㊷ナデ・ハケ (7~8本/cm)	淡茶褐色 淡黄褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	煤付着	9
2	土釜	残高 7.9	脚部片。断面円形状。	マメツ	-	暗灰色	密 ○		9
3	土釜	残高 7.5	脚部片。断面円形状。	ナデ	-	にぶい橙色	石・長 (1~5) ◎		9
4	甕	残高 2.7	内湾口縁。口頸部内面に明瞭な稜をもつ。小片。	㊸ヨコナデ ㊹ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡乳褐色	石・長 (1~5) 赤 ◎		9
5	坏	底径 (7.4) 残高 1.4	底部片。底部の切り離しは摩滅の為、不明。	マメツ (ヨコナデ)	ヨコナデ	乳橙色 乳褐色	密 ◎		9
6	坏身	残高 2.1	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		9
7	播鉢	口径 (26.2) 残高 7.7	東播系須恵器。体部内面に8条一對の条線を施す。	㊺回転ナデ ㊻回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	褐灰色 黄灰色	石・長 (1~3) ◎		9
8	播鉢	底径 (11.0) 残高 2.3	東播系須恵器。平底。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	長 (1) ◎		9

表7 SD101 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
9	砥石	1/5	安山岩	(5.4)	6.0	(3.55)	169.24	砥面：3面	9

表 8 第八層出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
10	深鉢	残高 10.6	粗製。口縁部はわずかに肥厚する。	ナデ	マメツ	黄褐色・褐色 暗褐色	石・長 (1~3) 金・角 ◎	第1面 ②区12 地点	10
11	深鉢	残高 11.0	粗製。口縁部はわずかに肥厚する。	㊦ヨコナデ・ ㊧条痕・ナデ	板ナデか条痕→ ナデ (マメツ)	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	第2面 ②区26 地点	10
12	深鉢	残高 4.2	粗製。口縁部は肥厚する。小片。	㊦ヨコナデ・ヨコ ㊧ナデ (工具使用か)	マメツ (ナデ)	黄褐色・茶色 黄褐色・茶色	石・長 (1~2) 金・角? ◎	第1面 ②区5 地点	10
13	深鉢	残高 3.7	粗製。口縁部は肥厚する。小片。	㊦ヨコナデ・ ㊧条痕・ナデ	条痕・ナデ	黄茶色 褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	第2面 ④区	10
14	深鉢	残高 2.6	粗製。口縁端部に刻目。口縁部に RL 縄文を施す。	㊦ナデ ㊧RL 縄文	縄目圧痕・工具 によるヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	第1面 ①区	10
15	深鉢	残高 4.8	胴部に凸帯を貼り付ける。	条痕	ミガキ・ナデ	暗茶褐色 黒褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	第1面 ①区1 地点	10

表 9 第八層出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
16	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	4.2	4.8	0.6	15.9	第1面③区S3地点	10
17	石鏃	一部欠損	サヌカイト	1.9	1.9	0.2	0.79	打製。第1面②区	10

表 10 柱穴出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
18	羽釜	残高 3.9	瓦質土器。断面方形の長い鋸が付く。	ナデ・ヨコナデ	ナデ	灰色・暗灰色 灰白色	長 (1) ◎	煤附着 SP234	10

第4章 文京遺跡54次調査

第1節 調査の経過

発掘調査は平成25年10月1日から同年12月13日の間で実施した。

調査は、4地区（1～4区）に分け実施した（第23図）。以下、調査工程を略記する。

- 10月1日（火）：本日より屋外調査を開始する。調査区の設定や安全対策用の防護フェンス、仮設調査事務所の設置を行う。また、発掘機材の搬入を行う。
- 10月2日（水）：重機により表土掘削を開始する。
- 10月3日（木）：3区壁面精査を開始し、土層の堆積状況を確認する。
- 10月8日（火）：3区第Ⅶ層掘り下げを開始する。
- 10月9日（水）：3区壁面土層の測量を開始する。
- 10月11日（金）：委託業者による国土座標に基づく基準点の設置を行う。
- 10月16日（水）：調査区にグリッド杭を設置する。遺構検出状況の写真撮影を行い、北端から遺構の掘り下げを開始する。
- 10月18日（金）：1区第Ⅵ層上面の遺構検出写真撮影を行い、中世遺構の掘り下げを開始する。
- 10月22日（火）：2区第Ⅷ層上面の遺構検出写真撮影を行い、中世遺構の掘り下げを開始する。
- 10月28日（月）：3区第Ⅷ層上面の遺構検出写真撮影を行い、中世遺構の掘り下げを開始する。
- 10月31日（木）：1区第Ⅵ層掘り下げを行う。
- 11月1日（金）：高所作業車にて、1～3区の中世遺構完掘状況の写真撮影を行い、1区の第Ⅷ層掘り下げと2区・3区の第Ⅷ層黄色シルト層の掘り下げを開始する。
- 11月7日（木）：1区第Ⅶ層掘り下げが終了し、第Ⅷ層上面の遺構検出写真撮影を行い、中世遺構の掘り下げを開始する。
- 11月12日（火）：1区第Ⅷ層黄色シルトの掘り下げを開始する。
- 11月15日（金）：4区床面精査と、遺構検出写真撮影を行い、中世遺構の掘り下げを開始する。
- 11月19日（火）：4区SR402南岸検出作業を行い、遺構完掘写真撮影・測量を行う。
- 11月26日（火）：1区第Ⅷ層の掘り下げを終了し、遺物の測量・取り上げを行う。
- 11月30日（土）：現地説明会を行い市民や近所の方約80名が見学される。
- 12月2日（月）：3区礫群検出作業を開始する。
- 12月5日（木）：3区SK301下層の掘り下げを開始する。
- 12月6日（金）：3区礫群検出作業を終了し、検出状況の写真撮影を行い、測量を開始する。1～3区の土壌サンプルを採取する。
- 12月7日（土）：3区土坑の掘り下げが終了し、遺構完掘写真撮影、遺構測量を行う。
- 12月9日（月）：重機により埋戻しを終了し、安全対策用防護フェンスを撤去する。
- 12月13日（金）：仮設ハウスの撤去や発掘機材の搬出や洗浄を行い、本日より屋外調査を終了する。
- 12月16日（月）：本日より、埋蔵文化財センターにて、出土遺物の洗浄・復元作業、及び図面・写真類の整理作業を開始し、調査概要報告書の作成を行う。

第2節 層位 (第24～26図)

調査地は東雲小学校の大運動場と中運動場内にあり、標高 29～30 m に位置する。調査地の基本層位は、以下のとおりである。

第Ⅰ層：造成土で、土質の違いにより 5 層に分層され、各調査区全域に層厚 34～86cm の堆積を測る。

- ①黄色土 (2.5Y8/8)、②明褐灰色土 (7.5YR7/2)、③オリーブ灰色土 (10Y6/2)、④黄褐色土 (7.5YR8/8)、⑤オリーブ灰色土 (10Y6/2) 第Ⅰ層③にやや褐色を帯びる。

第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う耕作土で、土色・土質の違いにより 3 種類に分層される。

- ①にぶい黄橙色土 (10YR7/2) で、4 区全域に層厚 4～16cm の堆積を測る。
- ②淡黄色土 (2.5Y8/3) で、4 区南端に層厚 4～13cm の堆積を測る。
- ③黄橙色土 (10YR7/8) で、4 区南端を除いた全域に層厚 3～12cm の堆積を測る。

第Ⅲ層：灰白色 (10YR7/1) 砂質土で、2 区 (西北部を除く) から 3 区にかけて堆積し、層厚 4～16cm を測る。

第Ⅳ層：灰黄色土 (2.5YR7/2) で、4 区全域に堆積し、層厚 7～19cm を測る。

第Ⅴ層：褐灰色土 (10YR4/1) で、2～3 区全域に堆積し、層厚 5～8cm を測る。

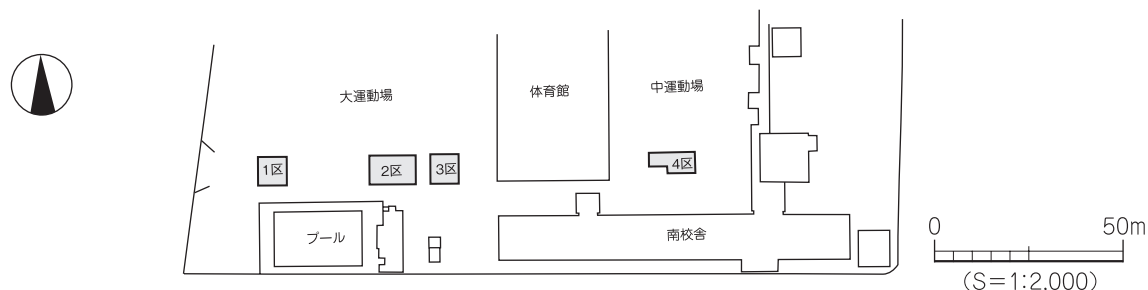
第Ⅵ層：灰黄褐色土 (10YR5/2) で、1～3 区全域に堆積し、層厚 6～21cm を測り、上面にて SD101 を検出した。第Ⅵ層中より、土師器片が僅かに出土した。

第Ⅶ層：土質の違いにより 3 層に分層され、①暗褐色 (10YR3/3) シルトで、1～3 区全域に層厚 3～25cm を測る。②①層に灰色を帯びており、1～3 区全域に層厚 5～30cm を測る。③砂を多く含有しており、1～3 区全域と 4 区の西南隅に堆積し、層厚 4～10cm を測る。第Ⅶ層中より弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土した。

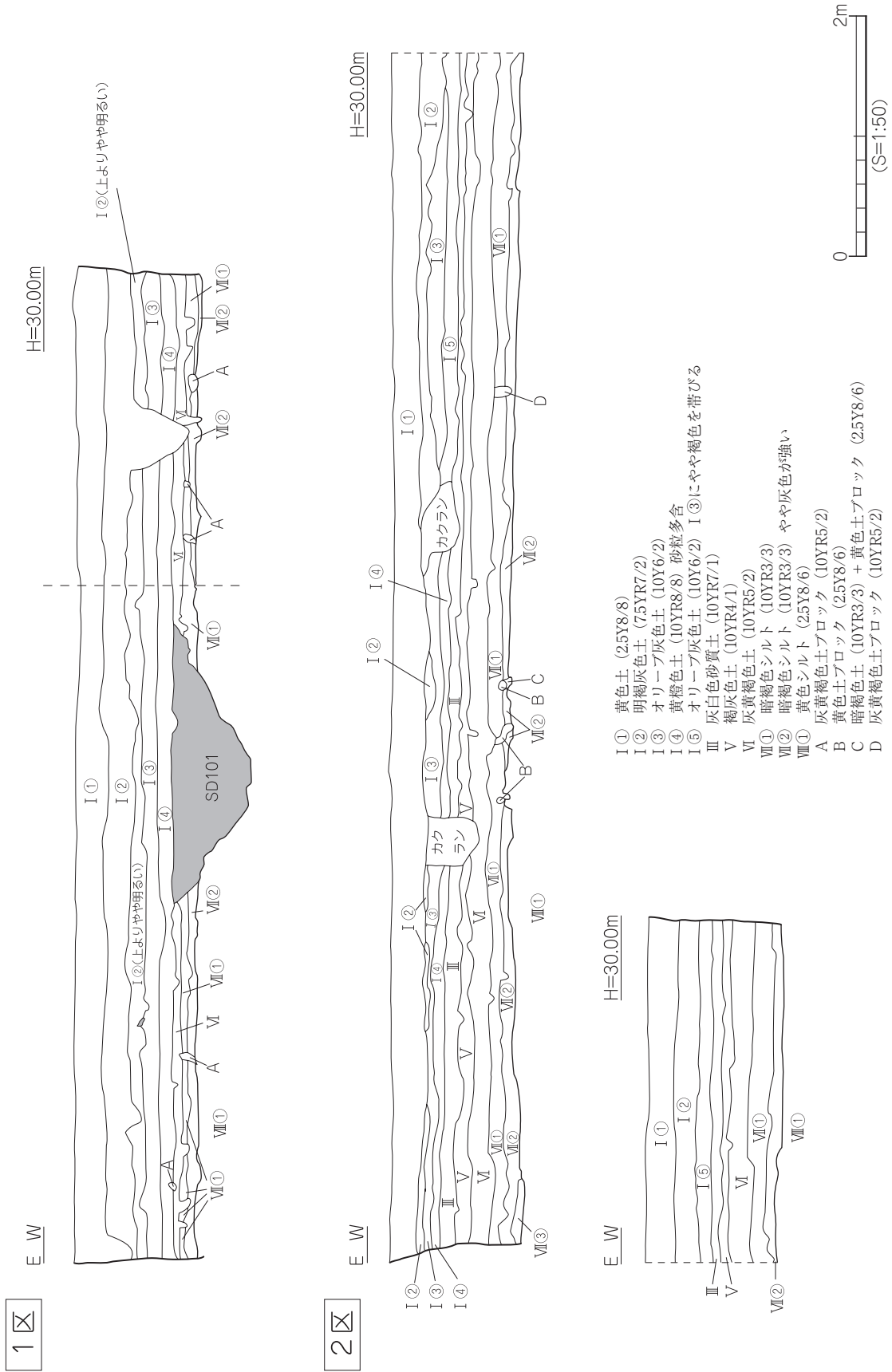
第Ⅷ層：土質の違いにより 2 層に分層され、①黄色 (2.5Y8/6) シルト、②層は①層に砂質が多く含まれる。①層上面が最終の遺構検出面となり、①層中から縄文土器や素材剥片のほか焼土・炭が出土し、各調査区全域に堆積し 42～114cm を測る。①層上面は東 (4 区) から西 (1 区) に向けて 90cm の比高差をもち傾斜する。

検出した遺構や出土遺物のほか、北隣の文京遺跡 53 次調査の調査結果より、第Ⅷ層は縄文時代、第Ⅶ層は弥生時代～古墳時代、第Ⅵ層から第Ⅲ層は中世段階の堆積層と考えられる。

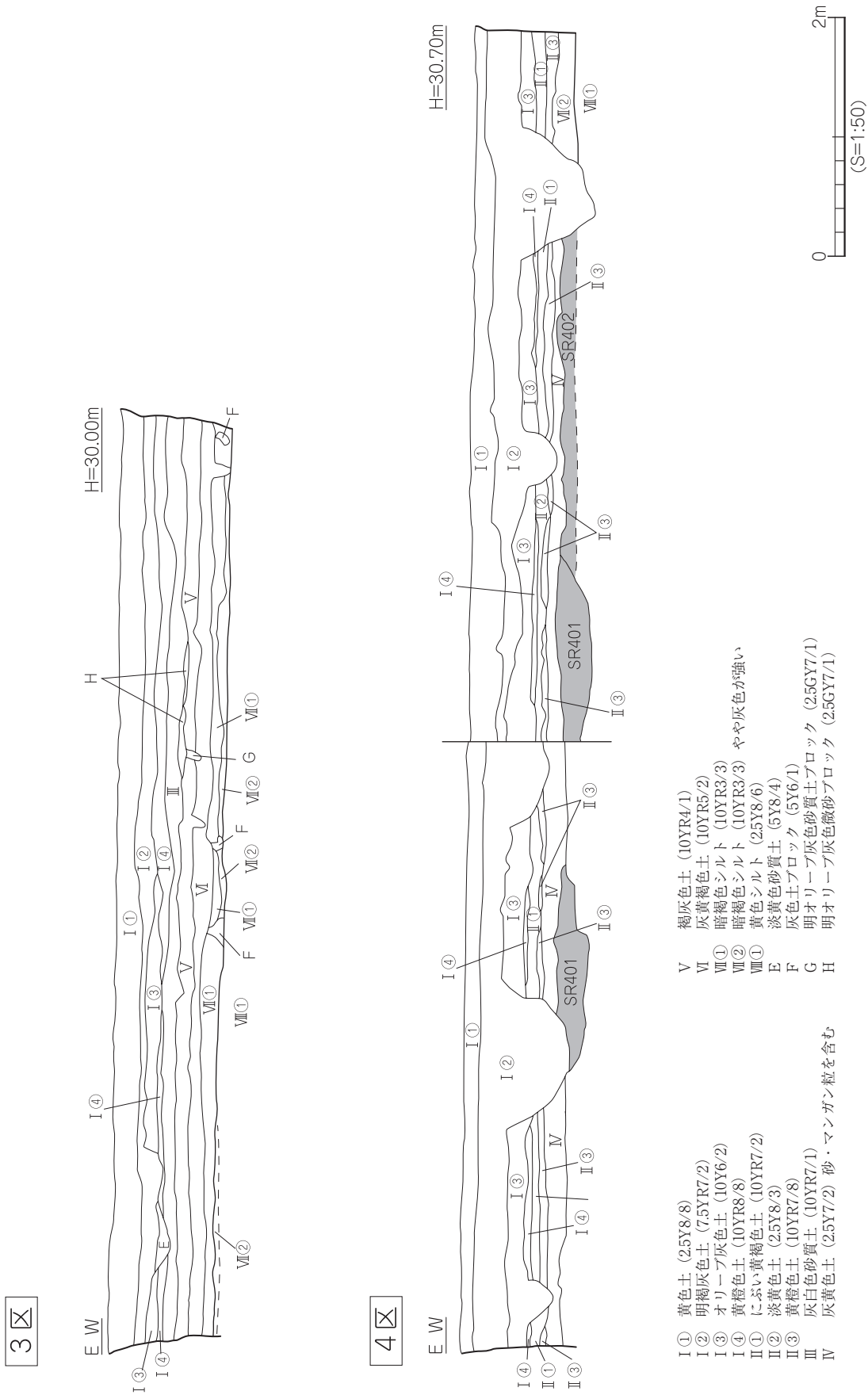
なお、調査にあたり調査区は西から東にかけて 1・2・3・4 区とし、調査区内に国土座標 (世界測地系) に基づき 5m 四方のグリッドを設定した。グリッドは北から南へ向けて A・B、西から東に向けて 1・2・3・・・とした。



第23図 調査区位置図



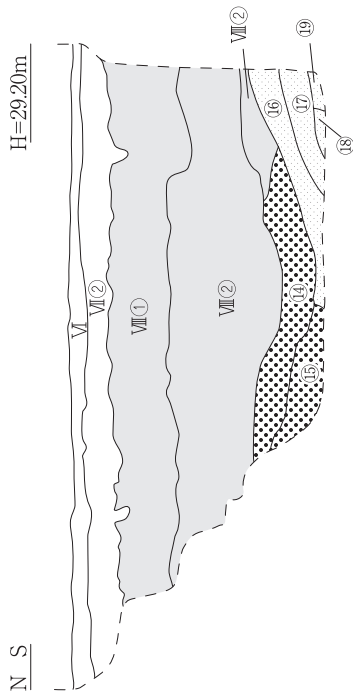
第24図 1・2区 南壁土層図



第 25 図 3・4 区 南壁土層図

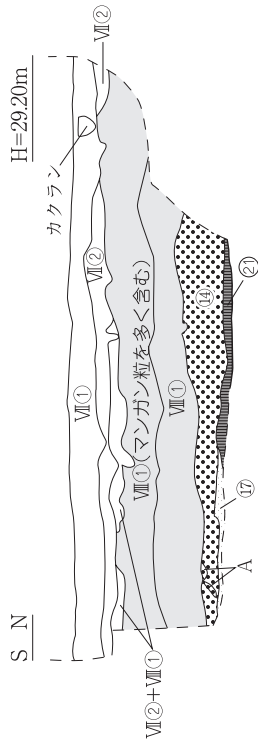
1区

深掘トレンチ (東壁)



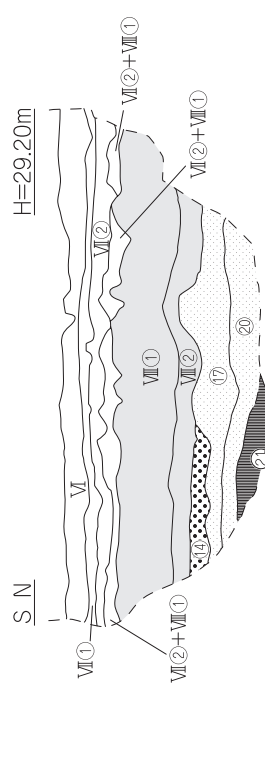
2区

深掘トレンチ (西壁)



3区

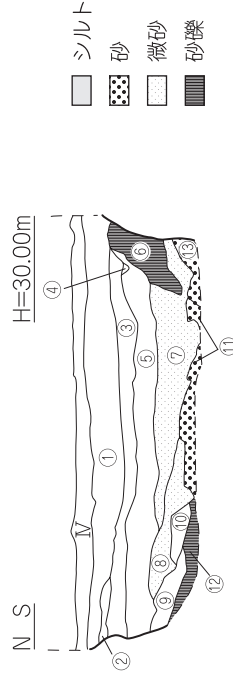
深掘トレンチ (西壁)



- VI 灰黄褐色土 (10YR5/2)
- VII(1) 暗褐色シルト (10YR3/3)
- VII(2) 暗褐色シルト (10YR3/3) やや灰色が強い
- VIII(1) 黄色シルト (25Y8/6) 砂質を強く帯びる
- VIII(2) 灰黄褐色土ブロック (10YR5/2)
- A 灰白色土 (10YR8/2)
- ① 浅黄褐色土 (10YR8/3)
- ② 灰黄色シルト (25Y8/6)
- ③ 灰色砂ブロック (5Y5/1)
- ④ 灰白色土 (25Y8/2)
- ⑤ 灰白色土 (5Y7/2)

4区

深掘トレンチ (東壁)



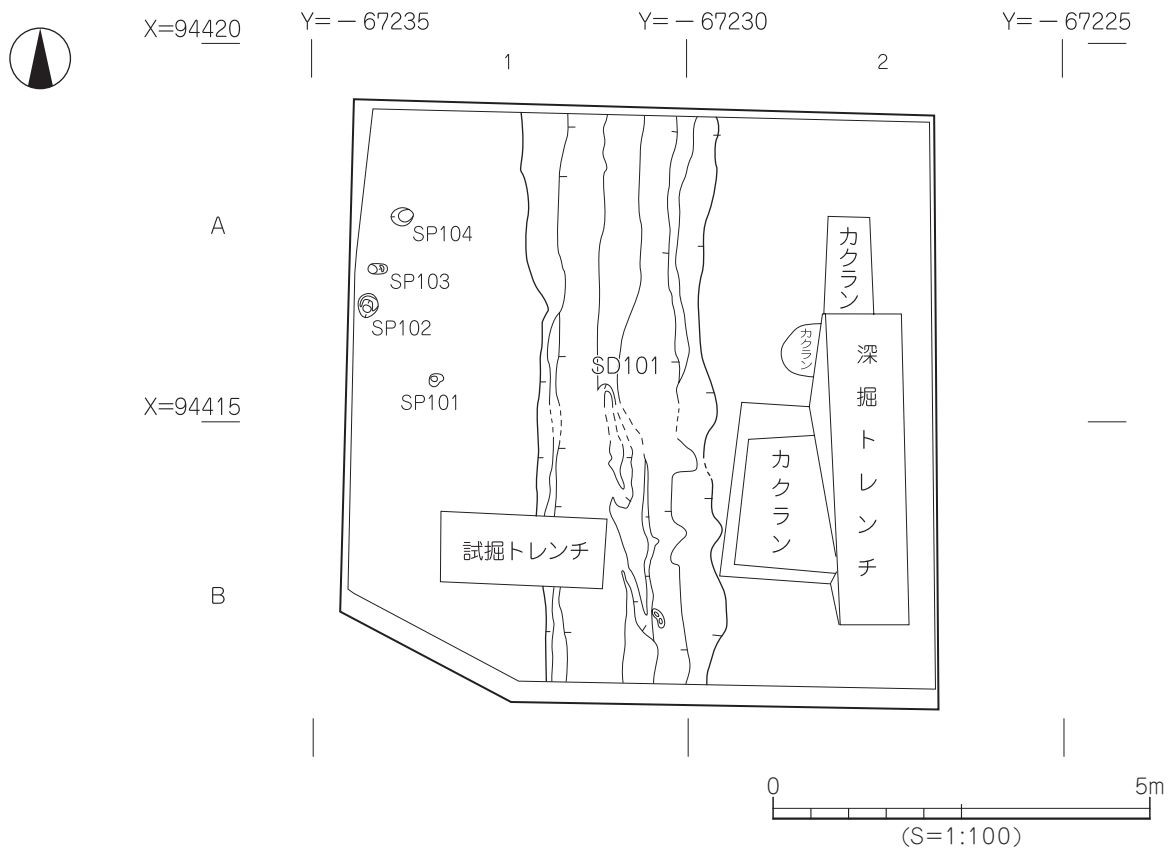
層位

- シルト
- 砂
- 微砂
- 砂礫



- ⑬ 黄色微砂 (25Y8/6)
- ⑭ 灰白色微砂 (5Y5/1)
- ⑮ 黄色微砂 (25Y8/6) ⑯よりややしまる、黄灰色砂礫 (25Y6/1) 1~3cm 大の円礫含む
- ⑯ 淡黄色微砂 (25Y8/3)
- ⑰ 黄灰色砂礫 (25Y6/1) 1~3cm 大の円礫含む

第26図 1~4区 トレンチ土層図

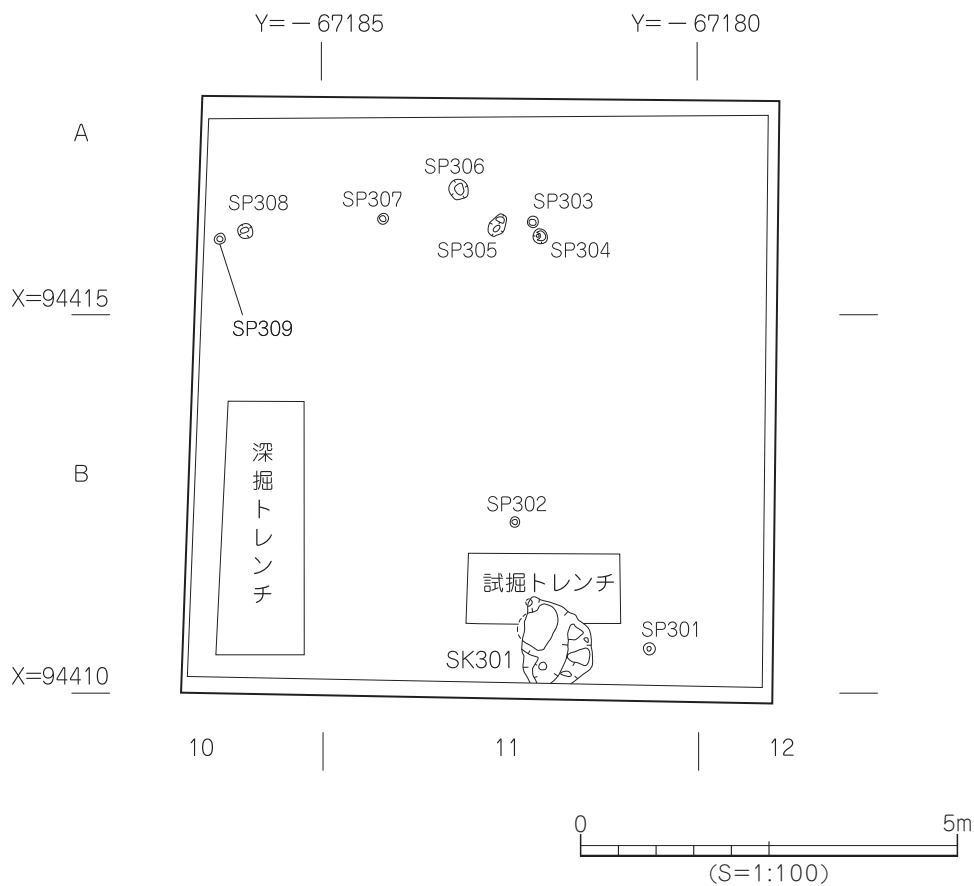


第 27 図 1 区 遺構配置図

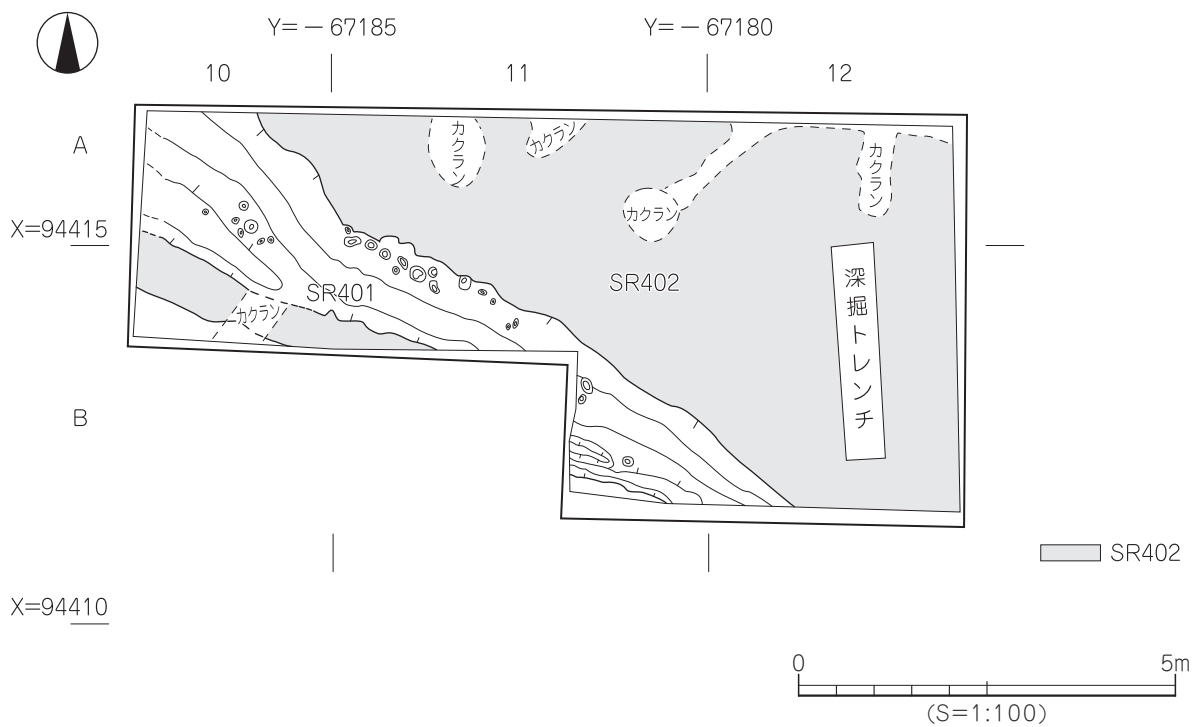


第 28 図 2 区 遺構配置図

層位



第29図 3区遺構配置図



第30図 4区遺構配置図

第 3 節 遺構と遺物

本調査で検出した遺構は、溝 1 条、土坑 1 基、柱穴 28 基、自然流路 2 条である。溝は第Ⅵ層上面の検出であり、その他の遺構は第Ⅷ層上面での検出である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、動物骨などが出土した。

(1) 1 区の調査

1 区は、大運動場の南西隅部に位置する。第Ⅷ層上面にて柱穴 4 基、第Ⅵ層上面にて溝 1 条や近現代の攪乱を検出した。また遺物は、第Ⅷ層中より縄文土器の小片やサヌカイト剥片、第Ⅶ層中より弥生土器、土師器の小片が出土した。

1) 溝状遺構

SD 101 (第 31 図、図版 11・12)

1 区中央部 A1～B2 区の第Ⅵ層上面にて検出した南北方向の溝で調査区外に延びており、ほぼ真北を指向する。断面形状は U 字状を呈し、規模は検出長 7.5 m、上場幅 2.1～2.6 m、深さ 60～80cm を測り、比高差は殆どない。位置関係や埋土などから、北側は文京遺跡 53 次調査 SD101 に繋がるものと考えられる。埋土は 5 層に分層され、下層では砂礫層が堆積する。遺物は埋土中から土師器の小片が少量出土した。

出土遺物 (第 31 図、図版 20)

1～3 は土師器坏である。2 は口縁部がやや外反し、1 と 3 は平底の底部付近で、内外面にはナデ調整が施される。

時期：時期を決定しうる遺物が乏しく、53 次調査 SD101 と同一遺構と考えられることから 13～14 世紀代とする。

2) 柱穴状遺構 (第 27 図、図版 11・12)

1 区西端 A・B1 区の第Ⅷ層上面において 4 基の柱穴 (SP101～104) を検出した (表 14)。平面形態は円形～楕円形を呈しており、規模は直径 14～33cm、深さ 23～31cm を測る。埋土は暗褐色土で、埋土中からの遺物の出土はないが、第Ⅶ層堆積以前の弥生時代～古墳時代以降と考えられる。

3) 第Ⅶ層の調査

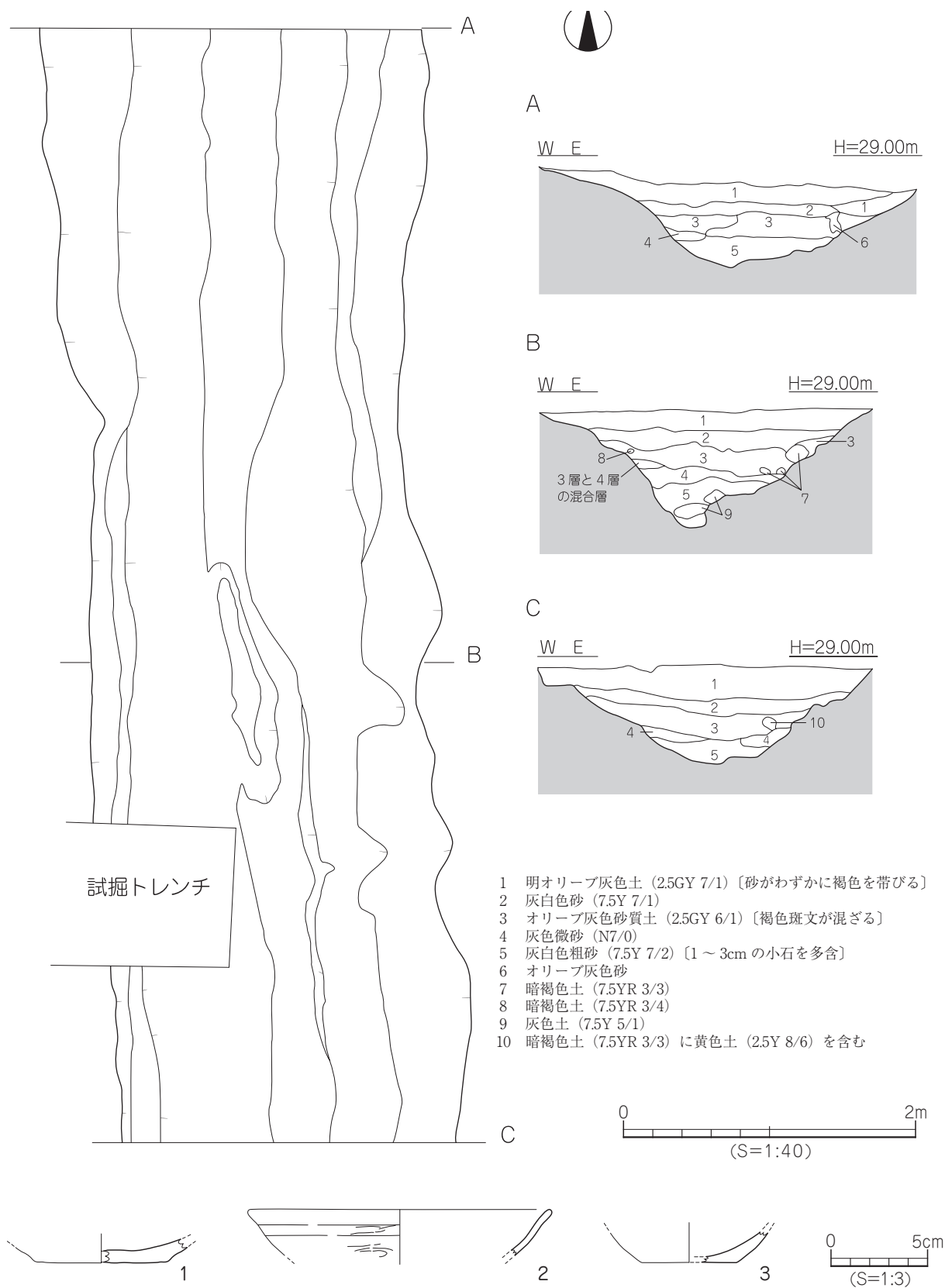
1 区全域に第Ⅶ層の暗褐色シルトが 8～27cm の堆積を測り、色調の違いから二層に分類される。第Ⅶ層中からは、土師器の小片が少量出土した。

4) 第Ⅷ層の調査 (第 32 図)

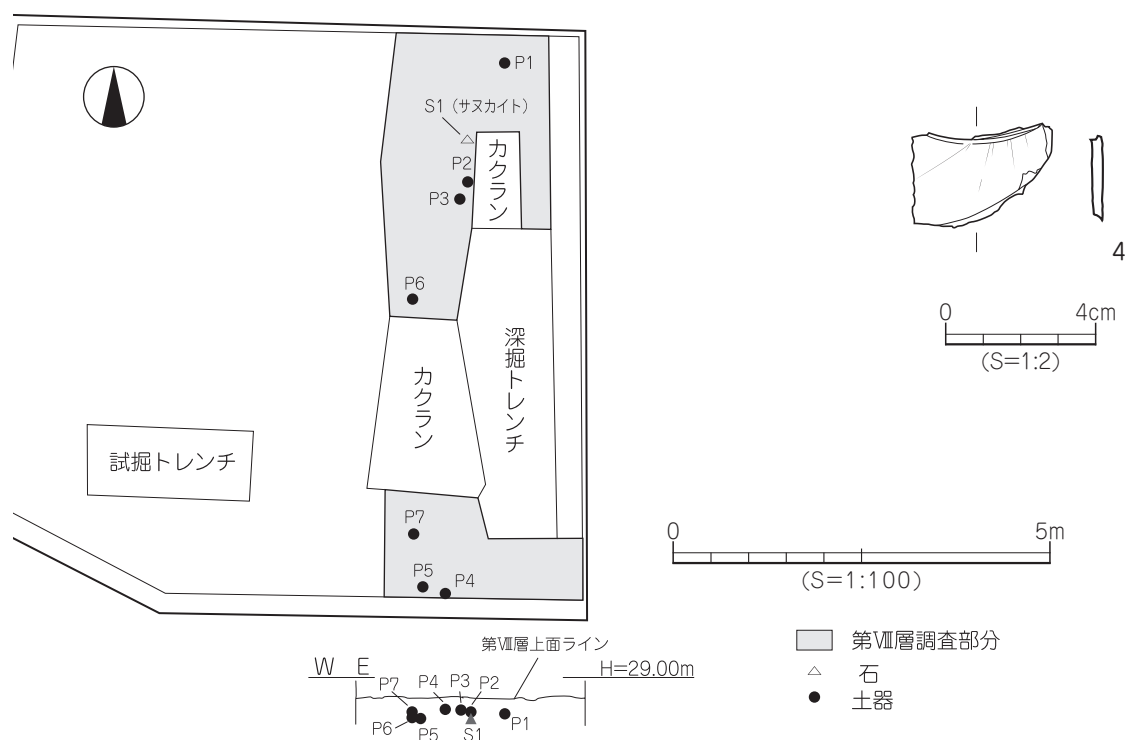
調査区東側 A・B2 区に小調査区を設定し、第Ⅷ層黄色シルト層の上面から深度 12～29cm の掘り下げを行なった結果、第Ⅷ層中より縄文土器や素材剥片が少量出土した。1 区での第Ⅷ層の堆積は東壁沿いの深掘トレンチにて 0.9～1.1m を測るが、遺物は第Ⅷ層上面から深度約 2～17cm 付近までで縄文土器の胴部片が僅かに散在した状態で出土した。

第Ⅷ層出土遺物（第32図）

4は素材剥片で、長さ3.7cm、幅2.4cm、厚さ0.3cm、重さ4.11gを測る。石材はサヌカイトである。



第31図 SD101 測量図・出土遺物実測図



第 32 図 1 区 第Ⅶ層黄色シルト遺物出土状況図・出土遺物実測図

(2) 2 区の調査

2 区は、大運動場の南西部に位置する。第Ⅶ層上面にて柱穴 15 基を検出し、第Ⅶ層中より焼土塊を検出し、礫に混じり縄文土器の小片が出土した。

1) 柱穴状遺構 (第 28 図、写真 14)

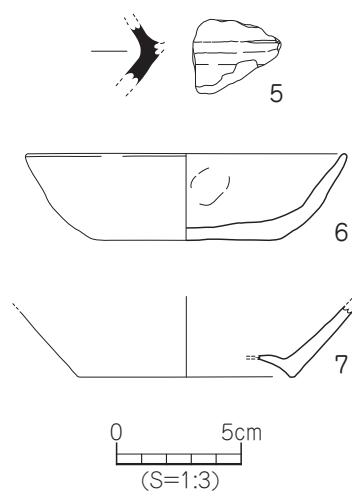
第Ⅶ層上面にて 15 基の柱穴 (SP201 ~ 215) を検出した (表 14)。平面形態は円形~楕円形を呈しており、規模は直径 13 ~ 32cm、深さ 4 ~ 27cm を測る。埋土が暗褐色土で柱穴内からの遺物の出土はない。

2) 第Ⅶ層の調査

2 区全域に第Ⅶ層暗褐色シルトが 16 ~ 42cm の堆積を測り、土師器や須恵器、陶器の小片が少量出土した。

第Ⅶ層出土遺物 (第 33 図)

5 は須恵器の坏身の受部付近である。6 は土師器の坏で、平底の底部より内湾気味に立ち上がる。内面にはナデ調整が施される。7 は陶器の壺の底部付近で、上げ底の内外面には回転ナデ調整が施される。



第 33 図 2 区 第Ⅶ層出土遺物実測図

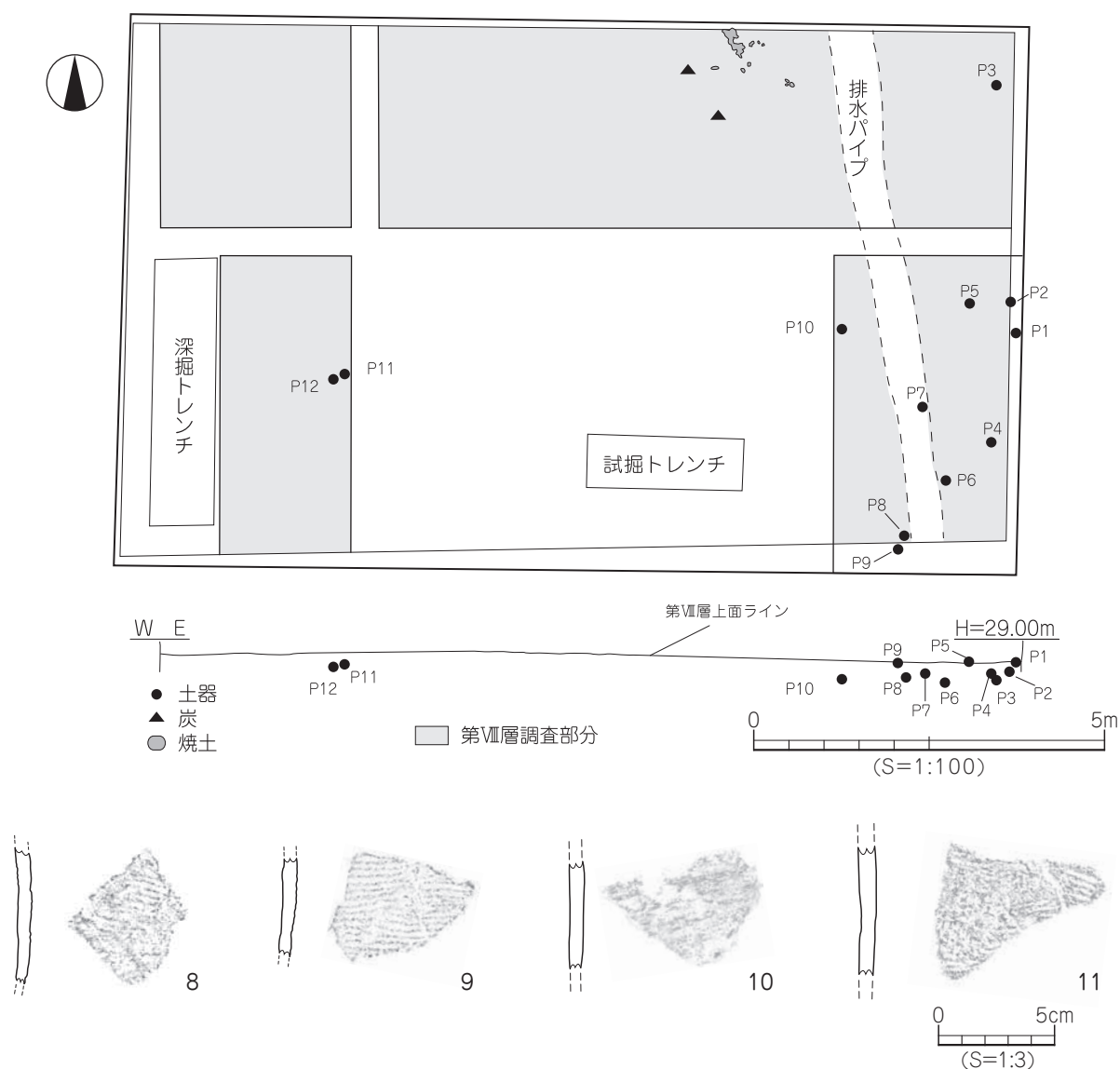
3) 第Ⅷ層の調査 (第 34 図)

調査区東西端と北側に小調査区を設定し、第Ⅷ層黄色シル

ト層の上面から深度23～45cmの掘り下げを行った結果、第Ⅷ層中より6～12cm大の円礫に混じり、縄文土器片が出土した。礫は花崗岩が多く、砂岩やホルンフェルスが混じる。縄文土器は胴部片が出土した。また、調査区北東部のA9区では焼土塊を検出した。焼土塊は6～15cmの大きさのものが多くあり、北壁部分の同じレベルに集中し、1.5mの範囲に散在している。2区での第Ⅷ層の堆積は西壁沿いの深掘トレンチにて35～56cmを測るが、縄文土器は第Ⅷ層上面から深度30cm付近まで散在した状態で出土している。下部から礫層の盛り上がりの一部を検出した。

第Ⅷ層出土遺物（第34図）

8～11は縄文土器の深鉢である。いずれも胴部片で外面には横方向に条痕が施され、内面にはナデ調整が施される。色調は外面は灰黄褐色～鈍い褐色、内面は灰褐色～にぶい黄褐色を呈する。



第34図 2区 第Ⅷ層黄色シルト遺物出土状況図・出土遺物実測図

(3) 3区の調査

3区は、大運動場の南東隅部に位置する。第Ⅷ層上面にて土坑1基、柱穴9基を検出し、第Ⅷ層中より礫群を検出し、縄文土器が出土した。

1) 土坑状遺構

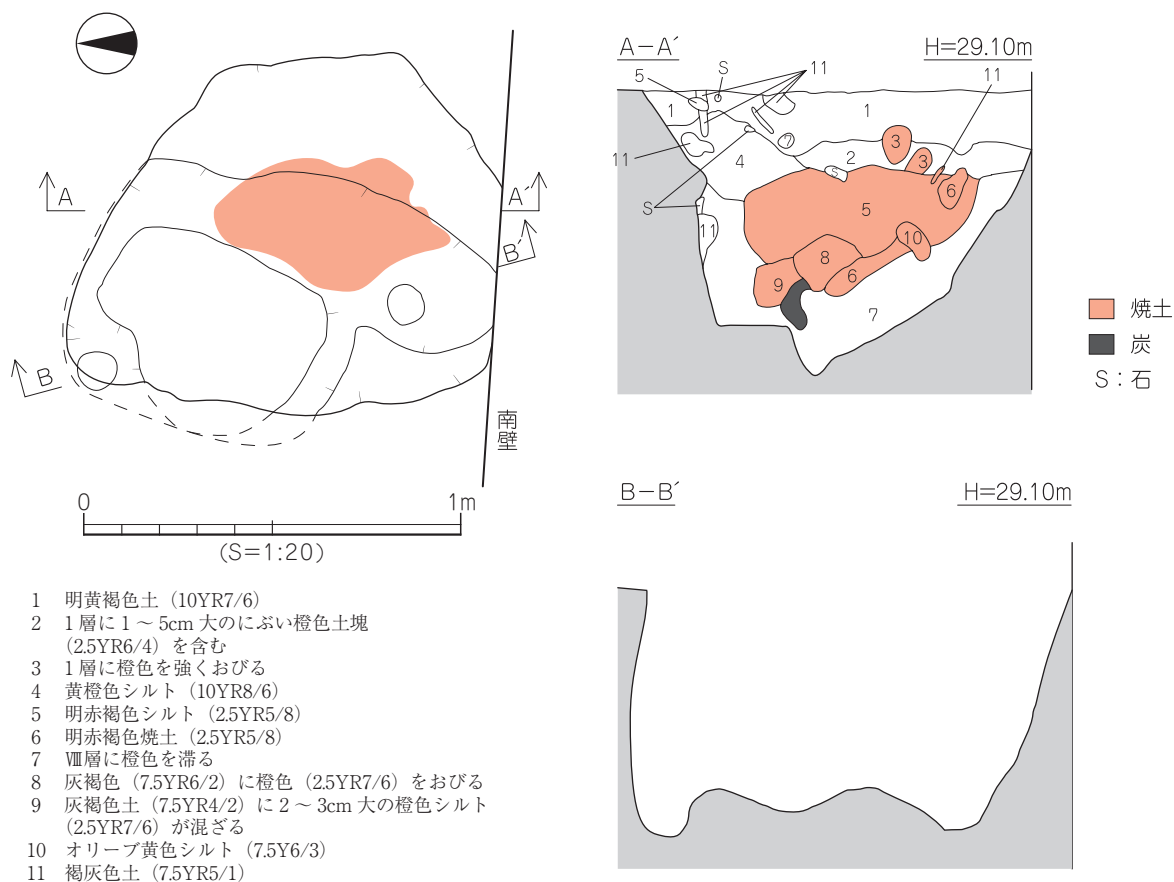
SK301 (第29・35図、図版16・17)

調査区南端 B11 区に位置する。第Ⅷ層上面から検出し、南端は調査区外に延びる、平面形態が不整楕円形、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸 1.14m、短軸 0.92m、深さ 0.75 m を測る。埋土は明黄褐色土であるが、遺構上面から基底面にかけての大半に焼土が堆積しており、長軸方向の基底面の南北両端付近には平面形態が円形で直径約 10cm を測る柱穴状の掘り込みを伴う。その南側の掘り込み上には円柱状の炭化材 (14 ~ 18cm 大) を検出した。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、遺構は第Ⅷ層上面で検出していることから、弥生時代から古墳時代の間としか現段階では分からない。

2) 柱穴状遺構 (第29図)

第Ⅷ層上面にて9基の柱穴 (SP301 ~ 309) を検出した (表14)。平面形態は円形~楕円形を呈し、規模は直径 12 ~ 32cm、深さ 9 ~ 26cm を測る。埋土が暗褐色土で、SP301 内から土師器の小片が僅かに出土した。

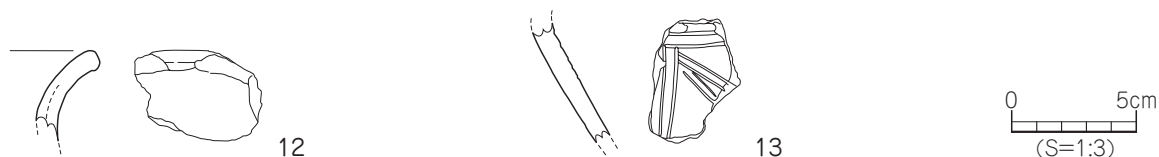


第35図 SK301 測量図

3) 第Ⅶ層の調査

3区全域に第Ⅶ層暗褐色シルトが8～20cmの堆積を測り、弥生土器、土師器の小片が少量出土した。
出土遺物（第36図、図版20）

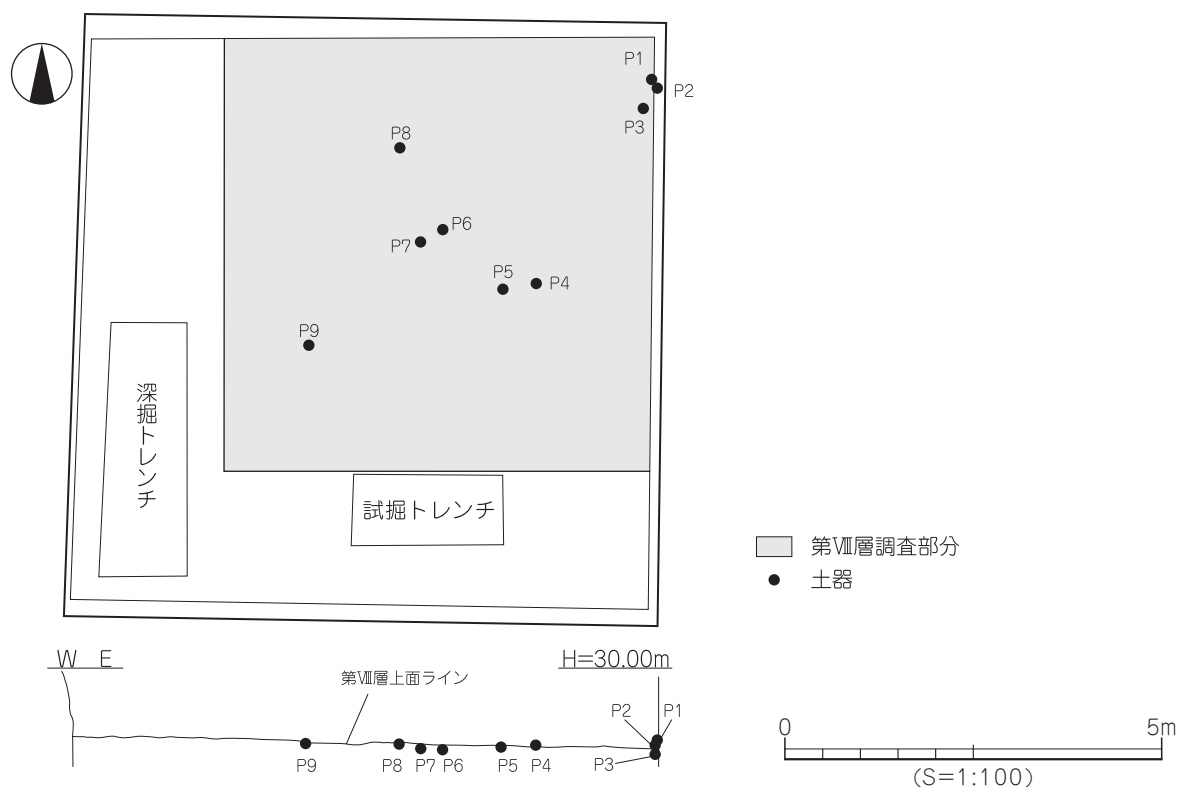
12は甕の口縁部で外面に横ナデ、内面にナデ調整が施される。13は壺の肩部で外面に木葉文が施される。



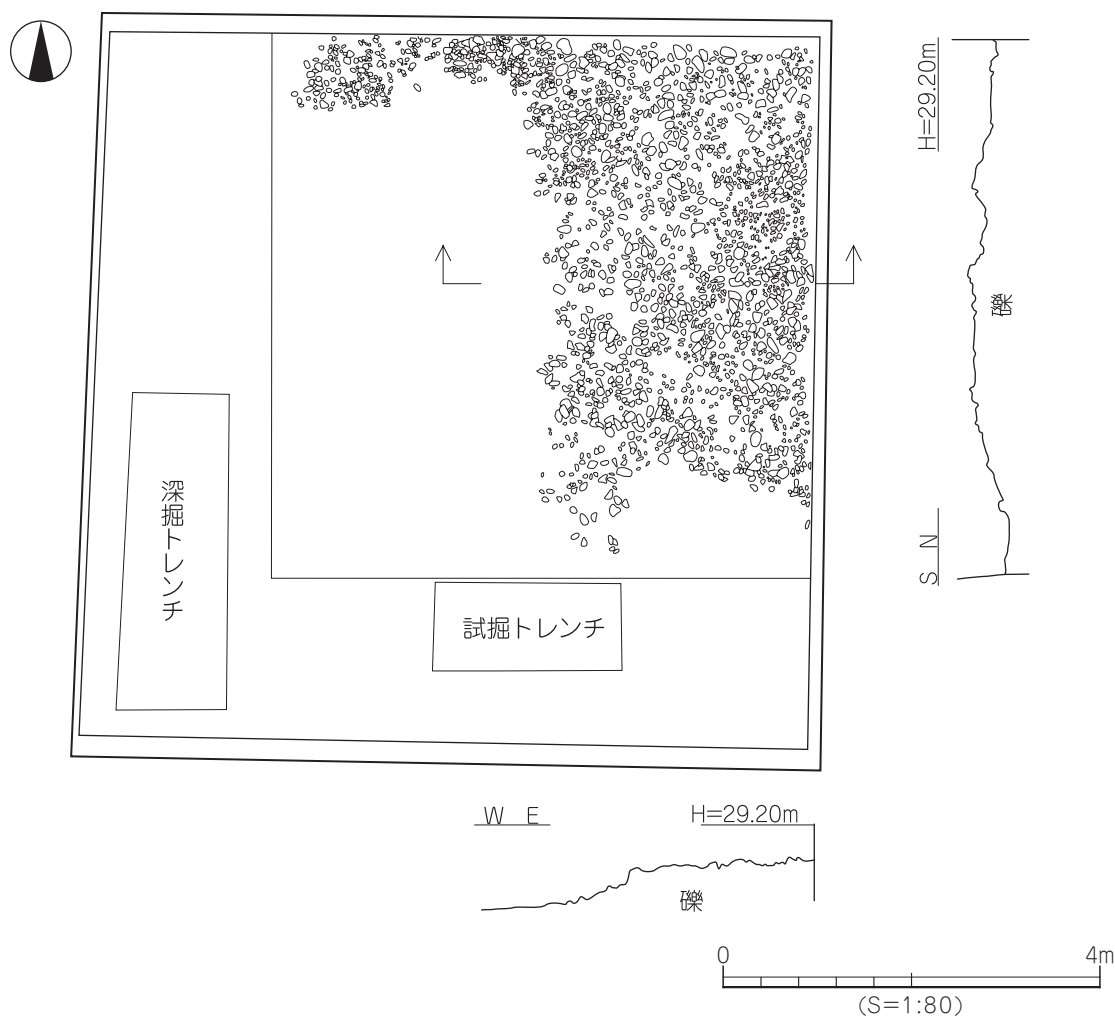
第36図 第Ⅶ層出土遺物実測図

4) 第Ⅷ層の調査（第37図）

調査区北東部を中心に小調査区を設定し、第Ⅷ層黄色シルト層の上面から深度12～26cmの掘り下げを行った結果、第Ⅷ層中より3～17cm大の円礫に混じり、第Ⅷ層上面から深度14cmにかけて縄文土器の小片が散在した状態で少量出土した。礫は花崗岩質のものが多く、縄文土器は胴部の小片が少量出土した。3区での第Ⅷ層の堆積は西壁沿いの深掘トレンチにて厚さ40～58cmを測る。上面から深度15cmにおいて縄文土器を出土しているが、下位の砂質を多く含む土層からは出土していない。東壁中央部付近の第Ⅷ層下面から礫層の隆起部分を検出した。この礫層は東西方向や南北方向に傾斜しており、礫の下層には砂層が堆積している。礫は花崗岩が多く、砂岩やホルンフェルスなども含まれる。



第37図 3区 第Ⅷ層黄色シルト遺物出土状況図



第 38 図 3 区 第Ⅷ層中の礫測量図

(4) 4 区の調査

4 区は中運動場の南端部に位置する。自然流路 2 条や近現代の攪乱を検出した。

1) 自然流路

SR401 (第 39 図、図版 19)

調査区南西部 A23 ~ B25 区の SR402 上面の南岸に沿って検出し、東西端は調査区外に延びる。南東から北西方向を指向しており、主軸は $N - 57^\circ - W$ を指向する。断面形状はレンズ状を呈し、溝床には凹凸がある。規模は検出長 7.5 m、上場幅 1.1 ~ 2.1m、深さ 16 ~ 24cm を測り、比高差は殆どない。埋土は灰白色砂の単一層で、遺物は土師器の小片が少量出土した。

出土遺物 (第 39 図、図版 20)

14 は土師器坏の底部である。平底の底部から内湾気味に立ち上がる。

時 期：出土した土師器が小片であり、中世頃としか分からない。

SR402 (第 40 図、図版 19)

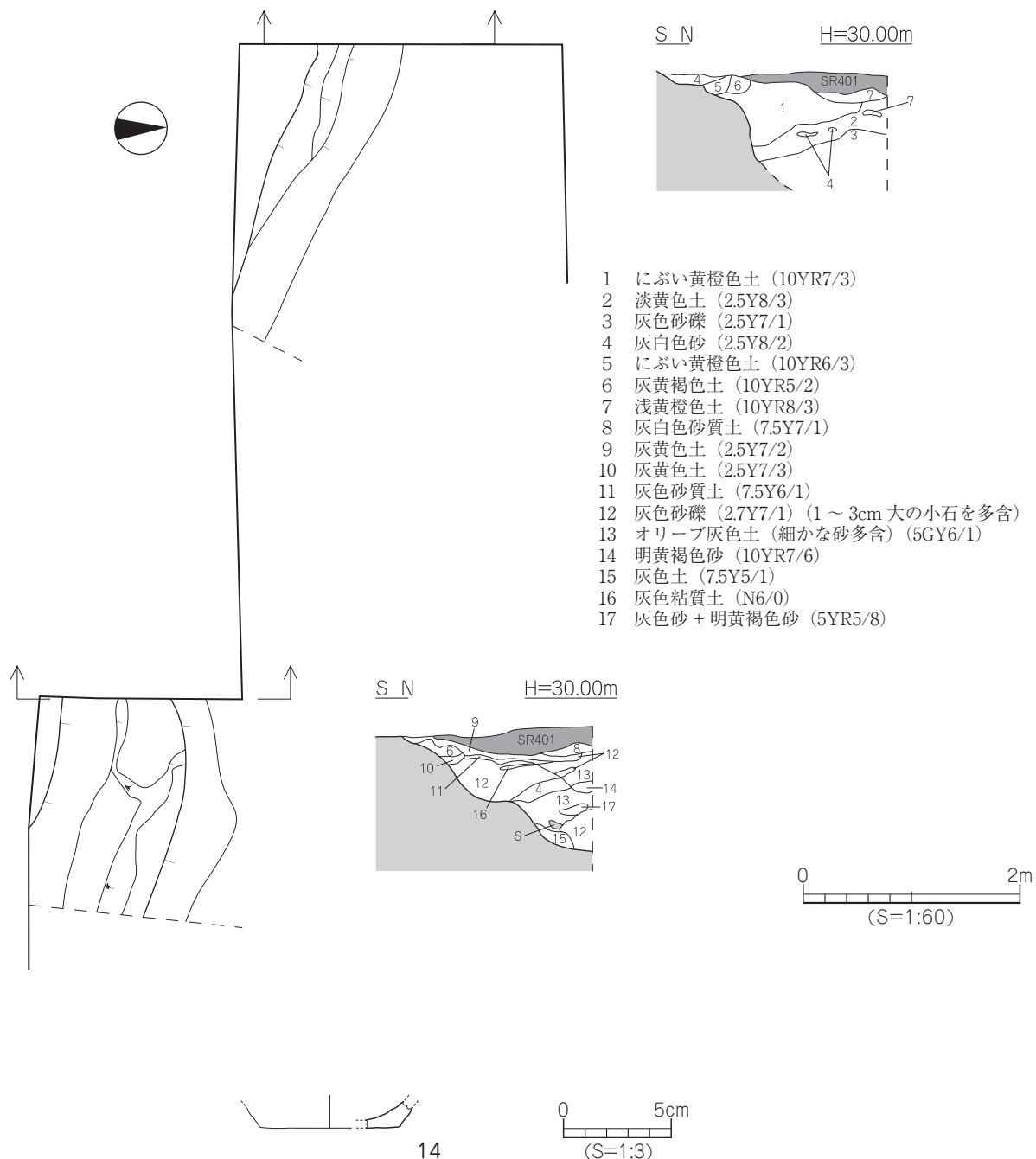
調査区中央部 A23 ~ B25 区の第Ⅷ層上面にて南岸部分を検出した。南東から北西方向の調査区外

に延びており、主軸は $N - 63^\circ - W$ を指向する。南岸は急激に傾斜しており、規模は検出長 10.1 m、流路幅 6.2 m 以上、深さ 0.8 ~ 1.14m を測る。埋土は鈍い黄橙色 ~ 灰黄褐色土で河床付近に砂礫層が混入する。遺物は砂礫層から弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土する。

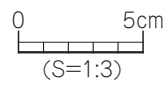
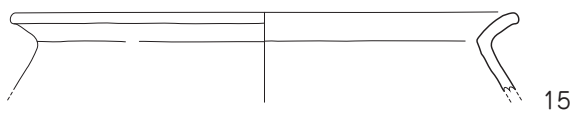
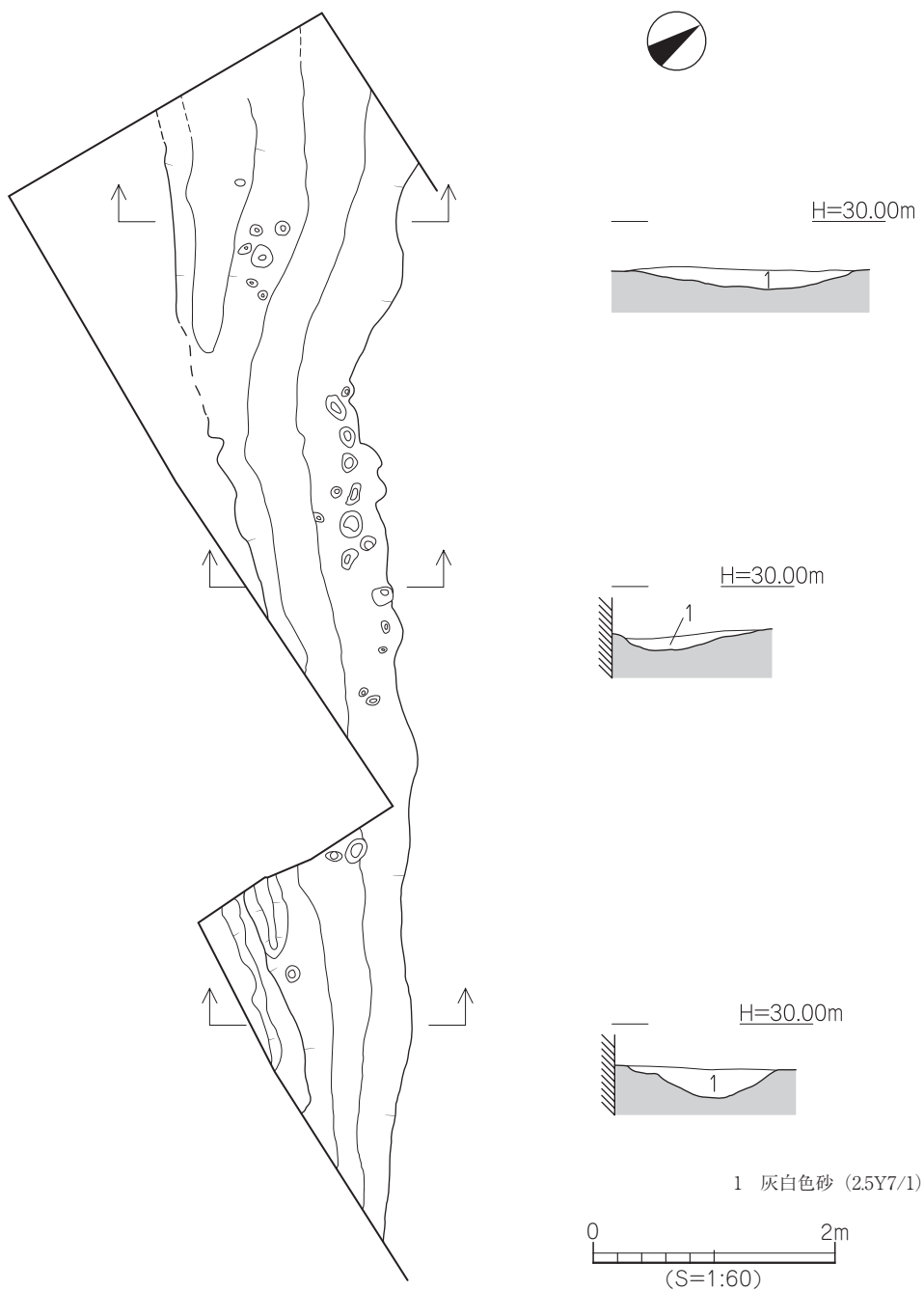
出土遺物 (第 40 図、図版 20)

15 は土師器の甕の口縁部で「く」字状の口縁部外面は横ナデ調整が施される。

時期：出土した弥生土器や土師器、須恵器などから弥生時代から古墳時代にかけて流路として機能していたことが考えられる。



第 39 図 SR401 測量図・出土遺物実測図



第 40 図 SR402 測量図・出土遺物実測図

第4節 まとめ

今回の調査では、弥生時代から古墳時代にかけて機能していた自然流路や中世頃の溝、柱穴、自然流路を検出したほか、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。

縄文時代

1～3区の第Ⅷ層中から小礫に混じり、縄文土器の小片や石器の素材が出土し、焼土塊を検出した。遺物は第Ⅷ層の上面から比較的浅い部分で出土している。焼土塊や炭化材も同レベルから検出しており、縄文時代に当地で火を使っていたことが想定できる貴重な資料である。小礫は2・3区の第Ⅷ層上位から中位にかけて散在した状態で出土しており、2～16cm大の円礫で、花崗岩が多く見られ砂岩やホルンフェルスなどが含まれている。縄文土器は礫に混じって小片が出土しているが、土器の摩滅は少なく、破片の状態であり移動していないことも考えられ、調査区周辺に縄文集落が展開していた可能性が高い。

弥生時代～古墳時代

4区SR402は、自然流路の南岸である。周辺の既往調査において、調査地周辺には自然流路が南東から北西方向に西流していることが想定されているが、この流路の南岸であることが確認できた。SR402は岸部が急傾斜しており、水流が激しかったことが窺える。SK301は出土遺物がなく検出した層から弥生時代から古墳時代にかけての土坑と想定される。この土坑は掘り方の上位から基底面にかけて焼土が詰まった状態で検出しており、基底面付近に長軸方向に柱穴の痕跡を確認し、その1基の上には柱状に炭化材が残っていた。このことは、土坑内に柱状のものが立っており、火を受けた可能性が高い。

中世

1～4区の第Ⅵ～Ⅷ層上面で溝や柱穴、自然流路を検出した。SD101は南北方向を直線的に人為的に掘られた溝で、北側は文京遺跡53次調査SD101に延びており、両端の検出長は55mを測ることがわかった。溝底の比高差は殆どないが、53次調査1区の北側約30mには自然流路の南岸が想定されており、その流路から取水したものと考えられる。溝内には砂礫が堆積していることから農耕に伴う水路、53次調査で農耕に伴う鋤跡溝を検出していることから、農耕に伴う施設の可能性が高い。柱穴は第Ⅷ層上面で検出しており、SD101より古い段階（鎌倉時代以前）の遺構で、散在した状態で規則性がないが、調査地及び周辺には掘立柱建物が存在していたことが想定される。4区SR401はSR402の南岸をほぼ沿っており、SR402の埋没過程において最終段階に機能していた流路であることがわかった。

今回の調査により、本調査地は第Ⅷ層黄色シルト層が形成する微高地の東先端部付近であることが確認できた。第Ⅷ層を中心に縄文時代から中世までの成果が得られたことは、微高地上に展開する文京遺跡の集落の東端を考える上で貴重な資料となるものである。

文京遺跡 54 次調査

表 11 溝一覧

溝 (SD)	区	地区	断面形	規模 (m) 長さ × 幅 × 深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
101	1	A~B・1~2	U字状	7.5 × 2.1 ~ 2.6 × 0.6 ~ 0.8	明利-ア 灰色土 ~ 灰白色粗砂	土師器	13 ~ 14 世紀	両端は調査区外に延びる。

表 12 土坑一覧

土坑 (SK)	区	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長径 × 短径 × 深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
301	3	B・11	不整楕円形	舟底状	1.14 × 0.92 × 0.75	0.85	明黄褐色土	なし	弥生時代~ 古墳時代	南端は調査区外に延びる。

表 13 自然流路一覧

流路 (SR)	区	地区	断面形	規模 (m) 長さ × 幅 × 深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
401	4	A~B・23~25	レンズ状	7.50 × 1.1 ~ 2.1 × 0.16 ~ 0.24	灰白色砂	土師器	中世	両端は調査区外に延びる。
402	4	A~B・23~25	逆台形状	10.1 × 6.2 × 0.8 ~ 1.14	鈍い黄橙色~ 灰黄褐色土	弥生土器 土師器・須恵器	弥生~古墳	両端は調査区外に延びる。

表 14 柱穴一覧

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 (m) 長径 × 短径 × 深さ	埋土	出土遺物
101	1区 A1	楕円形	0.20 × 0.16 × 0.24	暗褐色土	
102	1区 A1	楕円形	0.32 × 0.26 × 0.28	暗褐色土(明るい)	
103	1区 A1	楕円形	0.26 × 0.14 × 0.28	暗褐色土	
104	1区 A1	楕円形	0.29 × 0.24 × 0.33	暗褐色土(明るい)	
201	2区 B9	円形	0.24 × 0.23 × 0.28	暗褐色土	
202	2区 B9	楕円形	0.25 × 0.20 × 0.17	暗褐色土	
203	2区 B8	円形	0.24 × 0.23 × 0.16	暗褐色土	
204	2区 B8	楕円形	0.23 × (0.15) × 0.20	暗褐色土	
205	2区 A9	円形	0.16 × (0.13) × 0.03	暗褐色土	
206	2区 B9	楕円形	0.14 × 0.12 × 0.08	暗褐色土	
207	2区 B9	楕円形	0.15 × 0.12 × 0.10	暗褐色土	
208	2区 B8	楕円形	0.22 × 0.19 × 0.12	暗褐色土(明るく黄色土多含)	
209	2区 B8	楕円形	0.19 × 0.15 × 0.23	暗褐色土	
210	2区 B8	円形	0.18 × 0.18 × 0.16	暗褐色土	
211	2区 B8	楕円形	0.22 × 0.17 × 0.17	暗褐色土	
212	2区 A7	円形	0.20 × 0.18 × 0.09	暗褐色土(明るく黄色土多含)	
213	2区 B8	円形	0.12 × 0.12 × 0.09	暗褐色土(明るく黄色土多含)	
214	2区 B7	円形	0.19 × 0.18 × 0.08	暗褐色土	
215	2区 B7	円形	0.14 × 0.13 × 0.06	暗褐色土	
301	3区 B11	円形	0.16 × 0.15 × 0.20	暗褐色土	土師器
302	3区 B11	円形	0.13 × 0.13 × 0.04	暗褐色土	
303	3区 A11	円形	0.14 × 0.14 × 0.14	暗褐色土	
304	3区 A11	円形	0.22 × 0.18 × 0.15	暗褐色土(明るく黄色土多含)	
305	3区 A11	楕円形	0.31 × 0.22 × 0.24	暗褐色土	
306	3区 A11	円形	0.27 × 0.25 × 0.11	暗褐色土(明るく黄色土多含)	
307	3区 A11	円形	0.15 × 0.14 × 0.08	暗褐色土	
308	3区 A10	円形	0.21 × 0.19 × 0.26	暗褐色土	
309	3区 A10	円形	0.15 × 0.14 × 0.13	暗褐色土	

遺物観察表

表 15 1区SD101 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏	底径 (7.0) 残高 1.2	平底の底部。	ヨコナデ ㊟ナデ	ナデ	浅黄橙色 橙色	密◎		20
2	坏	口径 (15.6) 残高 2.4	内湾気味の胴部に口縁部は外反気味。	ミガキ	ナデ	淡黄色 浅黄橙色	微砂粒◎		20
3	坏	底径 (4.8) 残高 1.6	平底の底部。	ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	微砂粒◎		20

表 16 1区第Ⅷ層黄色シルト出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
4	剥片		サヌカイト	3.7	2.4	0.3	4.11		20

表 17 2区第Ⅷ層出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
5	坏身	残高 3.0	外方に伸びる受部を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 (1) ○		20
6	坏	口径 (12.6) 器高 3.4 底径 (7.2)	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	マメツ	ナデ マメツ	浅黄色 淡黄色	石・長 (1~2) ○		20
7	徳利?	底径 (8.6) 残高 2.8	上げ底である。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	密◎		20

表 18 2区第Ⅷ層黄色シルト出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	深鉢	残高 5.9	直立気味に立ち上がる。	タタキ	ナデ ハケ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~3) 金○		20
9	深鉢	残高 4.3	直立気味に立ち上がる。	タタキ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~6) 金○		20
10	深鉢	残高 4.6	直立気味に立ち上がる。	縄目	マメツ	にぶい褐色 灰黄褐色	石・長 (1~5) 金○		20
11	深鉢	残高 5.5	直立気味に立ち上がる。	縄目	マメツ	灰褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~5) 金◎		20

表 19 第Ⅶ層出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	甕	残高 3.6	外反する口縁端部はやや下方に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ○		20
13	壺	残高 4.9	肩部に木葉文が施される。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長 (1~3) 金○		20

表 20 SR401 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
14	坏	底径 (6.4) 残高 1.2	平底の底部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~2) 金◎		20

表 21 SR402 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	甕	口径 (19.9) 残高 3.1	断面「く」字状の口縁部。	ヨコナデ マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい橙色 にぶい黄褐色	石・長 (1) 金◎		20

第5章 調査の成果と課題

文京遺跡 53 次・54 次調査では、縄文時代から中世までの遺構や遺物集落構造解明を主目的として調査を実施した。ここでは調査地内における層位や集落変遷についてまとめを行う。

1. 層位

調査区全域に安定して堆積する第Ⅷ層黄色シルト層は沖積扇状地の微高地面を形成しており、今回の調査では最終の遺構検出面である。既往の調査により、この第Ⅷ層上面は文京遺跡を構成する弥生時代中期後葉を中心とした集落遺跡を確認している。この上面は、東から西にかけて 0.9 m の比高差をもち緩傾斜することが確認できた。また、第Ⅷ層中には縄文土器に混じり炭化物や焼土などが出土しており、扇状地が形成された後に縄文時代の痕跡を確認できた。第Ⅷ層より下層は砂層や砂礫層が互層となり堆積しており、扇状地の堆積層が調査区全域に広がっていることが確認できた。特に 53 次調査 3 区で第Ⅷ層下の礫層は氾濫原の隆起部分が想定できる。

2. 遺跡の変遷

(1) 縄文時代

53 次調査 1 区・3 区、54 次調査 1 区・2 区の第Ⅷ層中からは、縄文時代後期頃の縄文土器や石器に混じり、炭化材や焼土を検出している。今回の調査では遺構は未検出であったが、調査地において集落遺構の検出が期待される。

(2) 弥生時代～古墳時代

54 次調査 4 区にて自然流路 (SR402) の南岸は、調査地周辺を網目状に展開している自然流路の窪地であり、今回の調査地はその窪地の南側から文京遺跡最大の微高地の東端部分であることが確認できた。調査地の西方約 300 m にある文京遺跡 3 次・7 次調査で検出された大型掘立柱建物群や、その周辺の竪穴建物群から構成される大集落と同じ微高地であるが、今回の調査においてこの微高地の東端付近は集落遺構が未確認であり、集落から離れた場所における広場、或いは畑地などの土地利用も想定できる。

(3) 中世

53 次調査 1 区から 54 次調査 1 区に延びる溝 (SD101) は、両端がさらに南北方向に延びる様相を呈している。溝床の比高差は殆どないが 53 次調査 1 区の溝から北方約 30 m に自然流路が西流しており、その自然流路から取水し南方に流した農耕に伴う水路と想定される。また、54 次調査 4 区の自然流路 (SR401) は、SR402 が埋没する最終段階の流路であり、この流路は規模を縮小しながら中世まで機能していたことが確認できた。調査区のはほぼ全域からは小規模な柱穴を多数検出しているが、これらは調査地に中世集落が存在していたことを示すものである。

今回報告した 2 遺跡は文京遺跡が展開する微高地上の東端部付近にあり、今回の調査成果により東端部付近の状況が明らかとなり、縄文時代から中世における集落様相や動態を解明することが急務となる。

写真図版

写真図版 1 ~ 10 : 文京遺跡 53 次調査

写真図版 11 ~ 20 : 文京遺跡 54 次調査

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判フィルムカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67 55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール 28～85mm他
フィルム	白黒 ネオパン SS・アクロス		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビューー 45G
レンズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製版：写真図版 175線
印刷：オフセット印刷
用紙：マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』 vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』 vol.1～6

[大西 朋子]



1. 調査地全景（西より）



2. 1区遺構検出状況（南東より）



3. 1区完掘状況（東より）



1. 1区SD101 完掘状況
(北より)



2. 1区SD102 完掘状況
(南より)



3. 1区SD103 完掘状況
(東より)



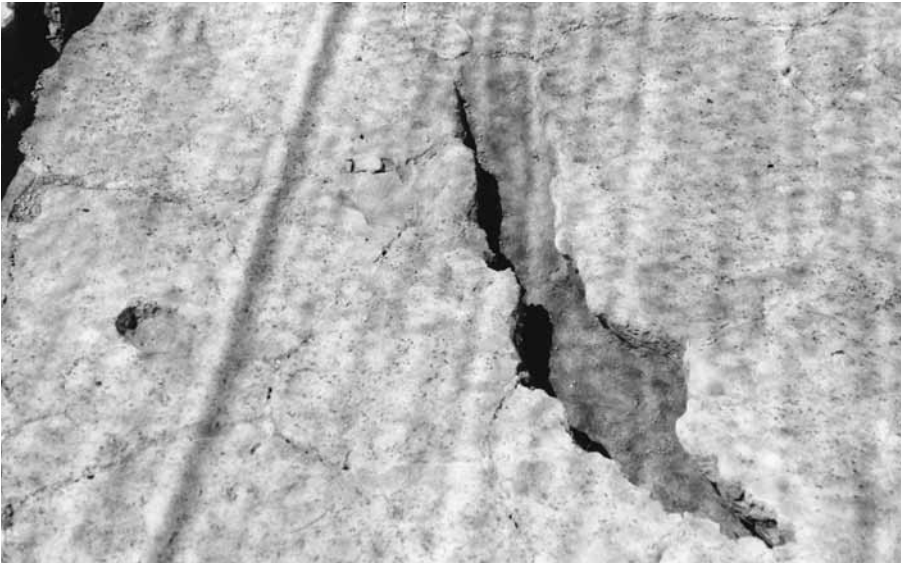
1. 1区SD104完掘状況
(東より)



2. 1区SP136検出状況
(南より)



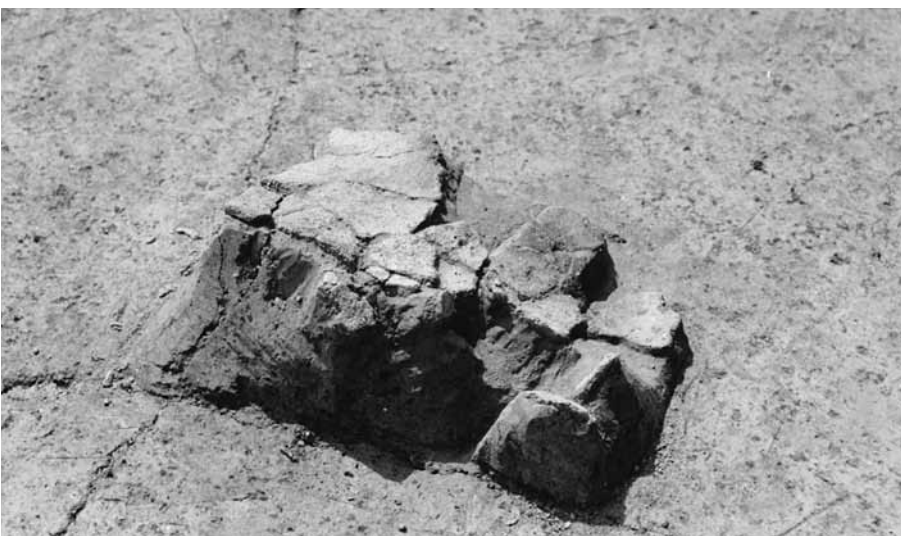
3. 1区第Ⅶ層検出状況
(南より)



1. 1区第Ⅶ層小溝①
検出状況
(北東より)



2. 1区第Ⅶ層遺物出土
状況①
(北東より)



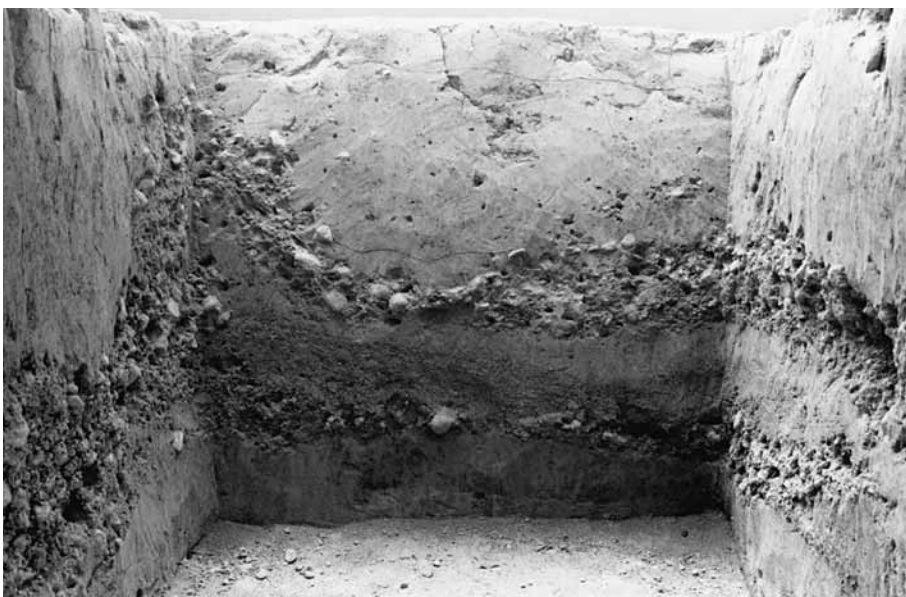
3. 1区第Ⅶ層遺物出土
状況②
(南より)



1. 1区第Ⅶ層遺物出土
状況③
(東より)



2. 1区トレンチ土層①
(南東より)



3. 1区トレンチ土層②
(北より)



1. 2区遺構検出状況
(南西より)



2. 2区完掘状況
(西より)



3. 2区東壁土層
(西より)



1. 3区遺構検出状況
(北西より)



2. 3区完掘状況
(北より)



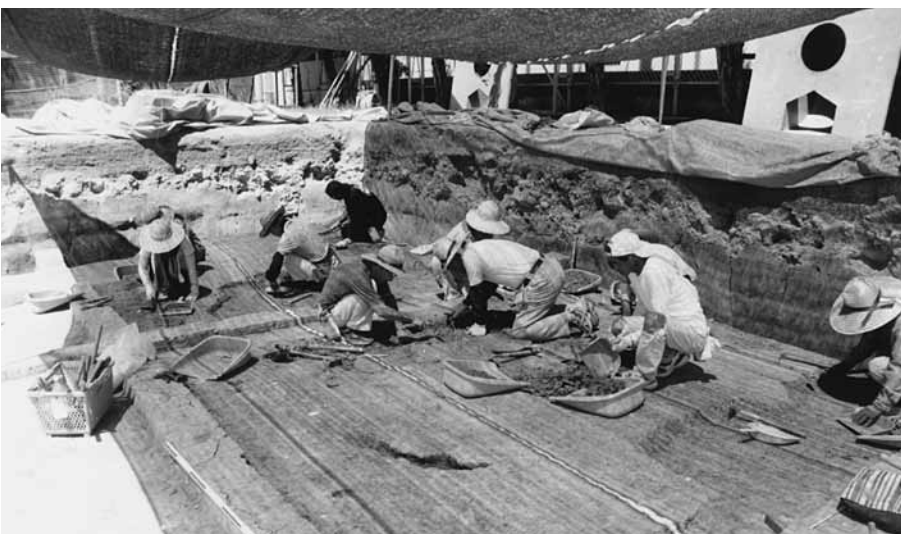
3. 3区 SR301 検出状況
(南より)



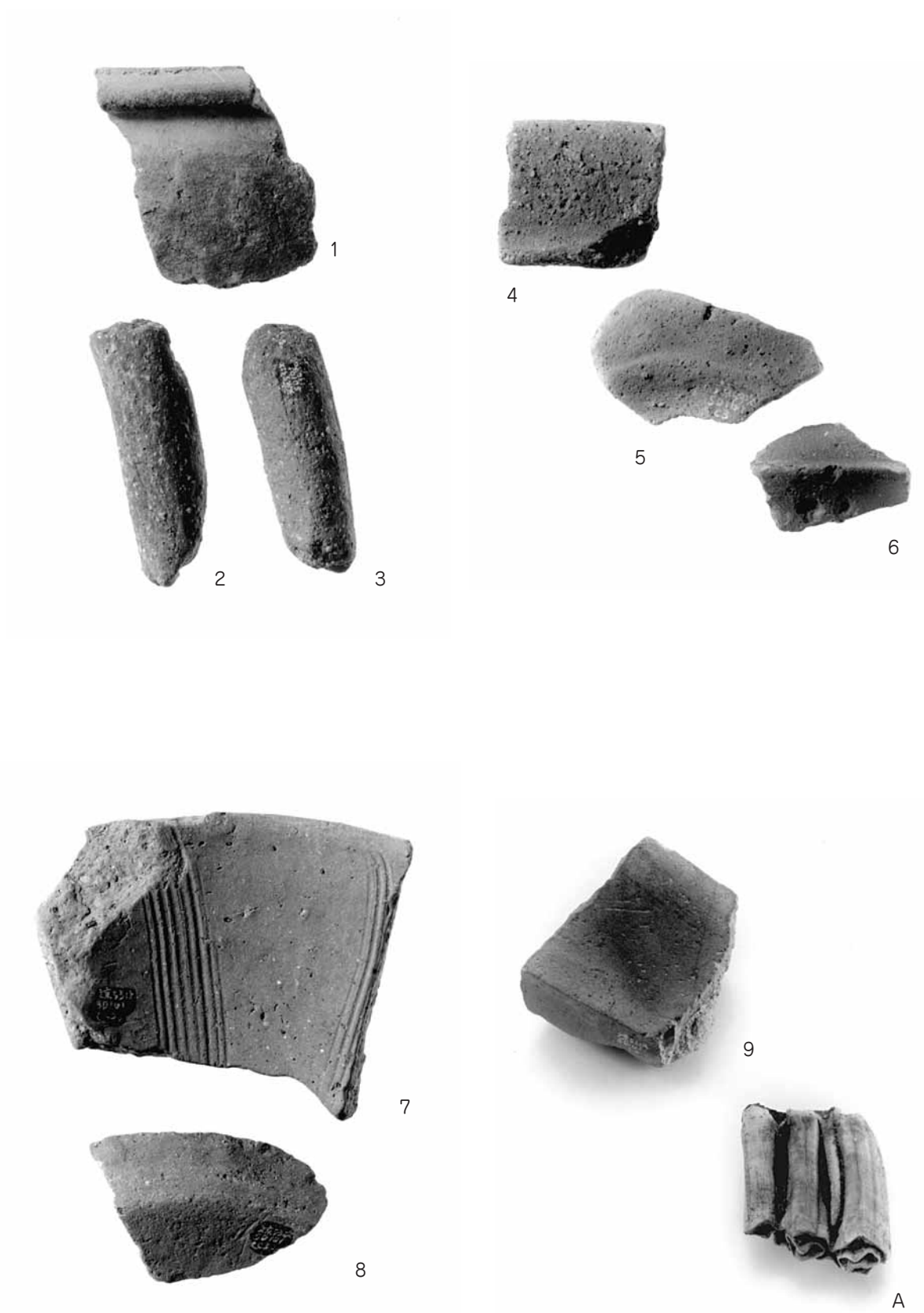
1. 3区第Ⅶ遺物出土状況
(南東より)



2. 3区トレンチ土層
(北東より)

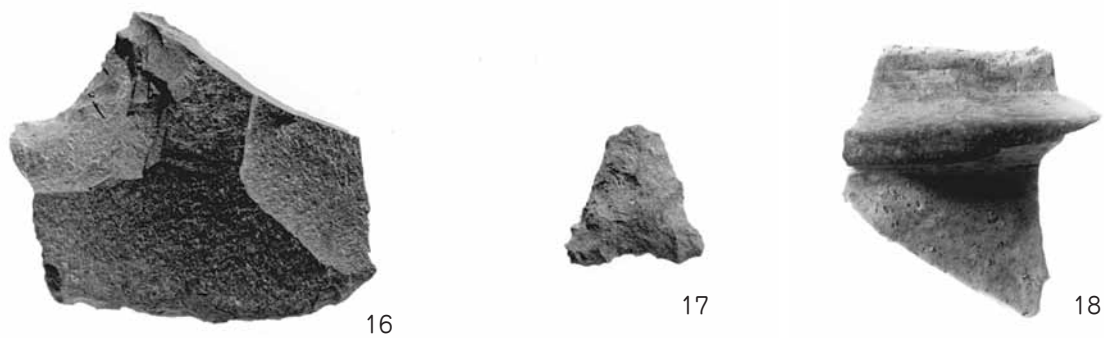
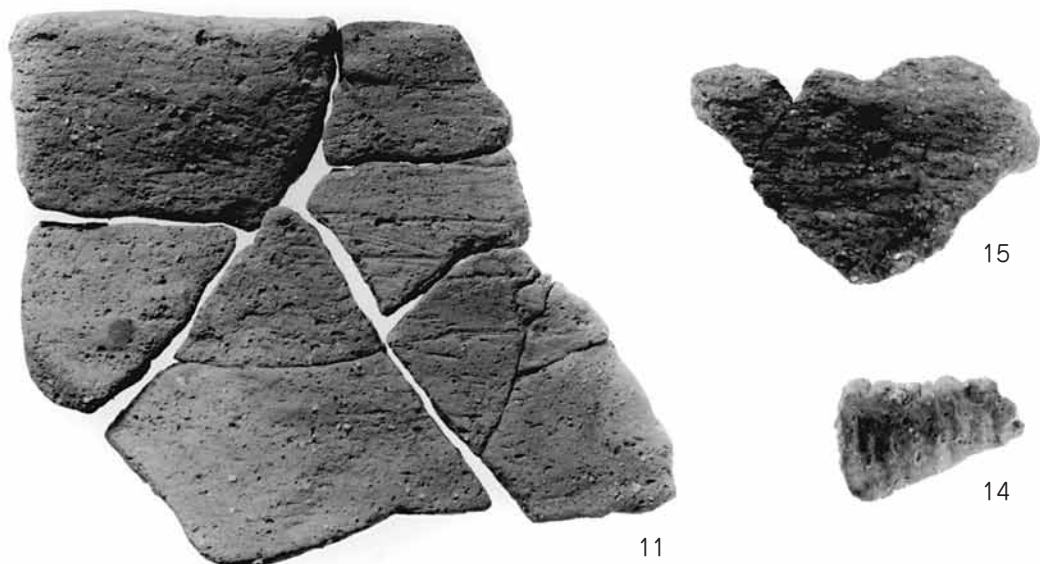
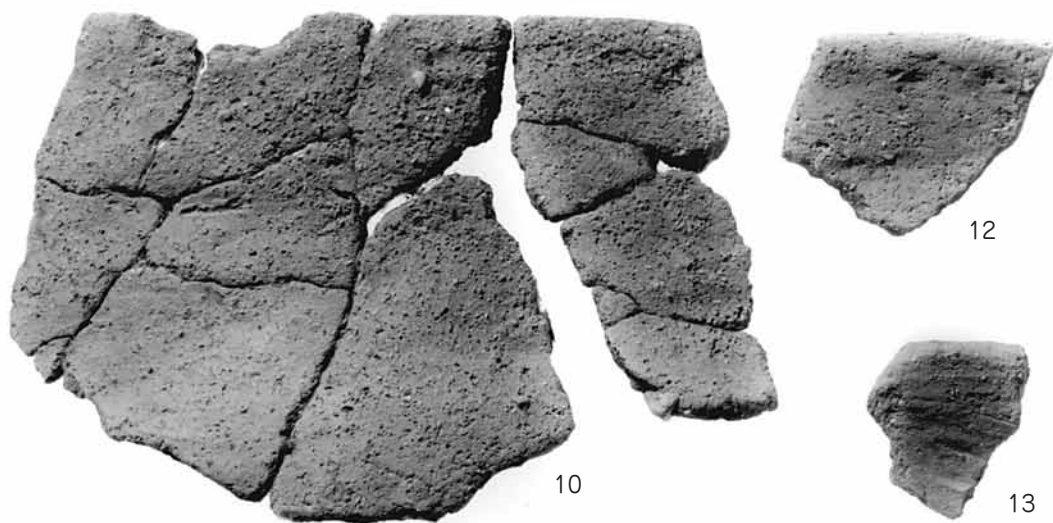


3. 作業風景
(南西より)



1. 1区SD101 出土遺物

図
版
10



1. 出土遺物 (1区第Ⅷ層: 10~17、SP234: 18)



1. 1～3区調査前全景（西より）



2. 1～3区配置状況（西より）



3. 1区東壁土層（西より）



4. 1区第Ⅵ層上面遺構検出状況（北より）



5. 1区第Ⅵ層上面遺構完掘状況（北より）



1. 1区SD101 完掘状況
(北より)



2. 1区SD101 堆積埋土
(南より)



3. 1区柱穴完掘状況
(北より)



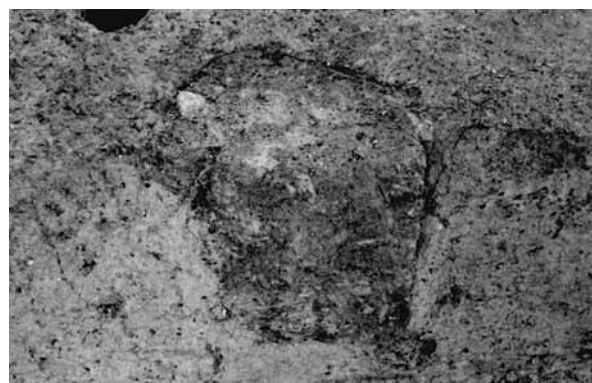
1. 2区東壁土層（西より）



2. 2区第八層上面遺構検出状況（東より）



3. 2区 SP202 半掘状況（南より）



4. 2区 SP204 半掘状況（北より）



5. 2区第八層上面遺構完掘状況（北西より）



1. 2区第Ⅷ層中縄文
土器片出土状況
(北より)



2. 2区第Ⅷ層焼土・
炭化材出土状況
(北より)



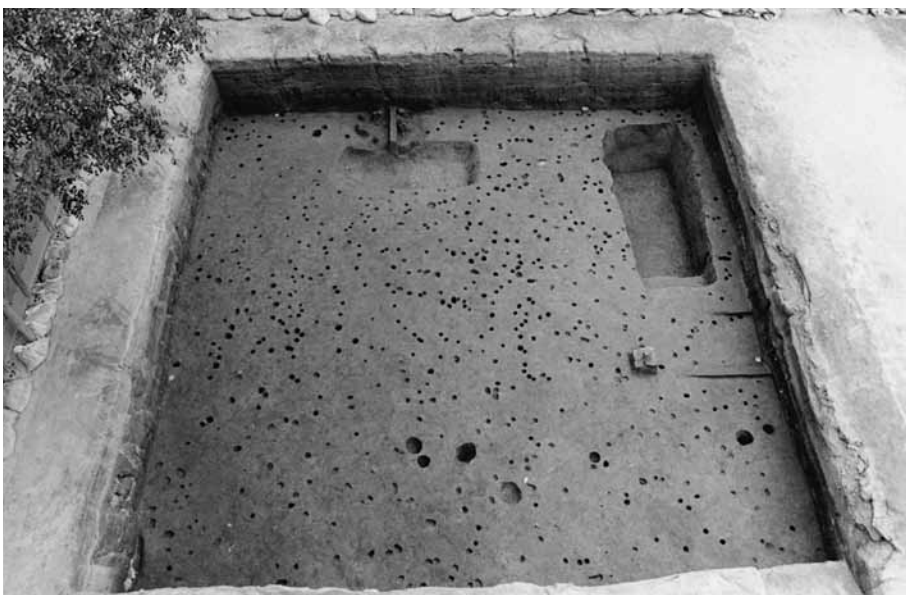
3. 2区第Ⅷ層中で隆起
した礫層
(北より)



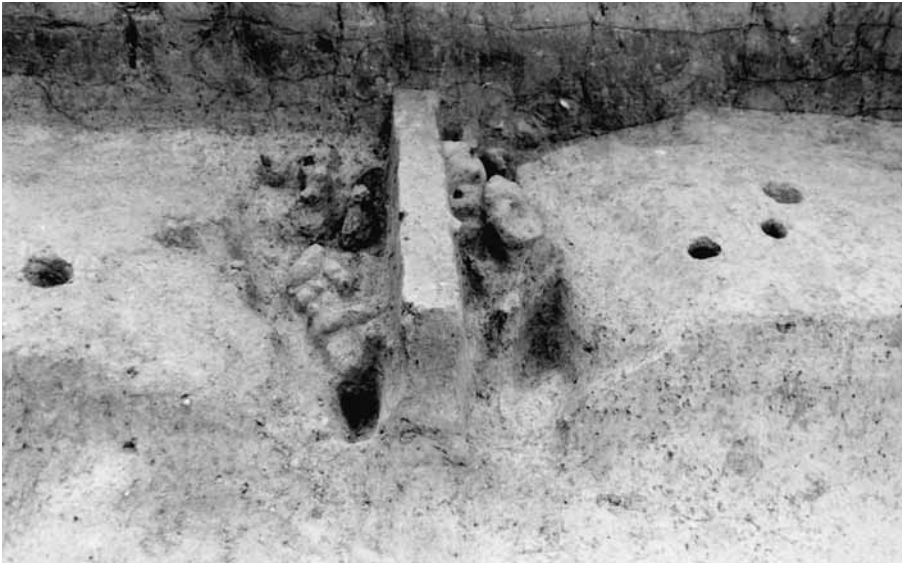
1. 3区西壁土層
(東より)



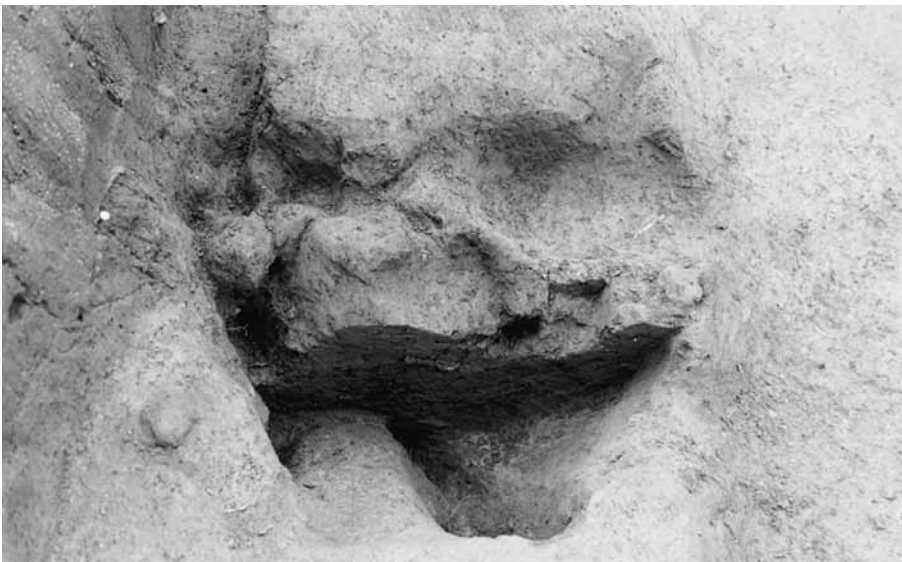
2. 3区第IV層上面遺構
検出状況
(西より)



3. 3区第IV層上面遺構
完掘状況
(北より)



1. 3区 SK301 焼土
(上位) 検出状況
(北より)



2. 3区 SK301 焼土
(下位) 堆積状況
(東より)



3. 3区 SK301 堆積土層
(東より)



1. 3区SK301 完掘状況
(東より)



2. 2区第Ⅷ層中で出土
した礫と土器片
(北より)



3. 2区第Ⅷ層中で隆起
した礫層
(東より)



1. 4区調査前全景
(東より)



2. 4区西壁土層
(南東より)



3. 4区遺構検出状況
(東より)



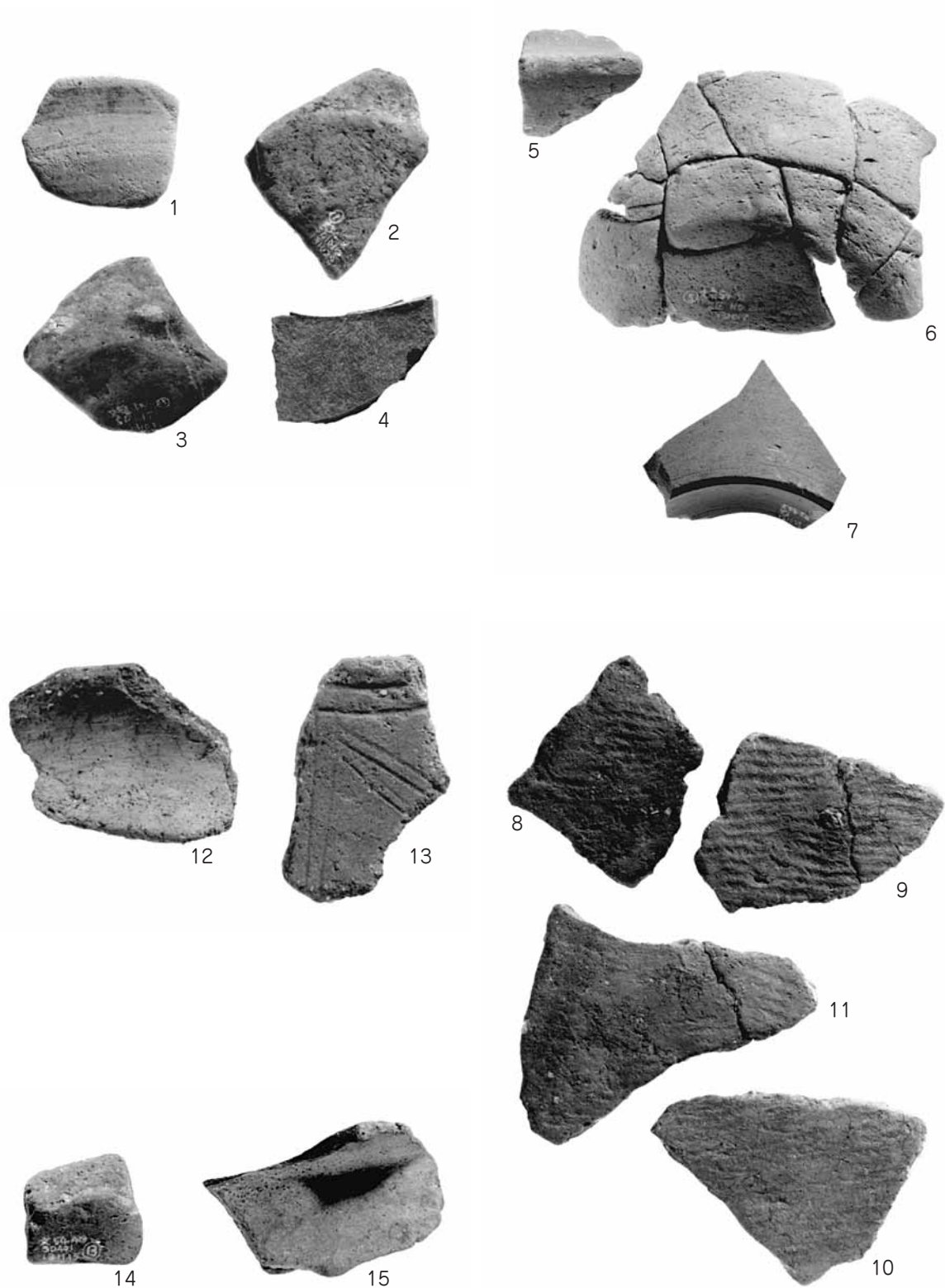
1. 4区 SR401 完掘状況
(北より)



2. 4区 SR401 完掘状況
(東より)



3. 4区 SR402 部分掘り
下げ状況
(東より)



1. 出土遺物 (1区SD101: 1~3・5、2区: 6~11、3区: 12・13、4区SR401: 14、4区SR402: 15)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぶんきょういせき
書名	文京遺跡 53 次・54 次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 180 集
編著者名	宮内慎一・河野史知・大西朋子
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒 791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦 2016 (平成 28) 年 3 月 15 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぶんきょういせき 文京遺跡 53 次調査	まつやましぶんきょうちやう 松山市文京町	38201	568	33° 50' 57"	132° 46' 26"	20130708) 20130830	819	緊急調査
ぶんきょういせき 文京遺跡 54 次調査	まつやましぶんきょうちやう 松山市文京町	38201	570	33° 50' 58"	132° 46' 24"	20131001) 20131213	1,079	緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ぶんきょういせき 文京遺跡 53 次調査	集落	縄文 中世	溝・柱穴・自然流路	縄文土器 土師器・須恵器・動物骨	縄文土器は黄色シルト層から炭化物や焼土に混じり出土。
ぶんきょういせき 文京遺跡 54 次調査	集落	縄文 弥生 古墳 中世	土坑・自然流路 柱穴	縄文土器・スクレイパー 弥生土器 須恵器 土師器	自然流路 SR402 を検出したことにより、微高地の東端付近であることが確認できた。

要 約	<p>今回報告する 2 遺跡では、縄文時代から中世に至る遺構や遺物を確認した。</p> <p>縄文時代では、両遺跡の黄色シルト層から出土した縄文土器は、炭化物や焼土に混じり出土しており、調査地周辺に集落の存在を示すものである。54 次調査で検出した自然流路から、文京遺跡が展開する微高地の東端付近には弥生時代から古代にかけての遺構は希薄である。中世の溝 SD101 は南北方向に延びており、調査地の北方を西流する自然流路から取水した農耕用水路と考える。今後は微高地の東端付近の更なる集落様相や遺構解明が必要となる。</p>
-----	---

松山市文化財調査報告書 第180集

文京遺跡
- 53次・54次調査 -

平成28年3月15日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷 平和印刷工業株式会社
〒790-0921 松山市福音寺町728番地
TEL (089) 947-9155(代)
